
ハイスクールD×D 夢幻龍

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 夢幻龍

【Nコード】

N0947W

【作者名】

大喰らいの牙

【あらすじ】

また、大喰らいの牙がやらかしました。無計画乙。

イエー.....（。A）人（。A）ノ.....
.....イ。

今度は“ハイスクールD×D”でございます。

簡単なあらすじでは、星が生まれ、星は話し相手が欲しく、一体の龍が生まれた。

その龍は、星が自身の力を分け与えた為半身でもあった。

そんな龍と星は次に“神”を創り、そこから色々創造して何十億年も楽しく過ごしていた。

だが、神が死んでから、世界の情勢が変わり始めた。

そこで一体の龍は世界を見て回ろつと旅をする。

ブログ（前書き）

暑さで頭がイカレ暴走した状態で書きました。

無計画製法です。

まあ、多分、不定期更新になるんじゃないだろうか？

と言いつつ、一週間に一回は必ず更新する自分が目に見えます。

それではどうぞ。

プロローグ

俺は自我を持った時、その時はまだ体がなかった。
そこに、声を掛けられた。

『やあ』

声を掛けてきたのは、男の子だった。いや、男すら分からない感じだった。

『気分はどうだい？』

「体がないんだ分からないぞ。」

『それもそうだね。どんな体がいいかい？』

少し、思い悩んで描いたのは力強く、何も受け付けないほどのオーラを出し、全てを薙ぎ倒すような生き物（？）だった。

「・・・龍になりたい。」

『龍か・・・ちょっとキミが描いたモノを見させてもらっね。』

そう言っただけで目の前の男の子は『ふむふむ』と言っている。
そう言っただけで、『うん。こんな感じかな。』と言ってこちらに言っただけで来た。

『じゃあ、体を与えるね。』

「ああ、頼む。」

そう言った俺は光が襲い、目が覚めると目線が上がり、強靱な肉体に鱗、翼。全てを噛み砕くことが出来そうな牙に爪、そしてあらゆるものを薙ぎ倒しそうな尻尾だった。

「かつこいいな。」

『気にいってくれて、嬉しいよ。……ついでに特殊な力も付加させておいたよ。』

「特殊な力？」

『そう、力だ。キミは体を幻影のようになれるんだ。』

「幻影？」

『実体があるのに実体がない。というべきなものだよ。』

「強そうだな。」

『だろう？まさに夢幻の如く……。だから、夢幻龍ってのはどうだい？』

「それでいいぞ。」

『じゃあ、今度は名前を付けなきや。』

「名前？」

『夢幻龍だけじゃ、寂しいでしょ？』

「別に構わないんだが・・・」

『ボクが嫌なんだよ。うーん、幻真はどうだい？』

「別にそれで構わない。」

『じゃあ、幻真ね。』

「幻真か。・・・お前の名は？」

『ボクの名は星^{ガイア}っていうんだ。』

「ガイアか、よろしくな。」

『うん、よろしく!』

そついうやり取りの後、俺たちは色々と話し合ってた・・・

ブログ（後書き）

はい。作っちゃいました。

本当に救われないな……。オレもオマエも（妄想的な意味で）

設定の方は次回投稿とさせていただきます。

能力もそちらで説明します。

感想、誤字脱字、意見待ってます！！

キャラ設定（前書き）

ヒッシャー！二日ぶりの投稿だー！

あ。あと、裂やん様からバトンを渡されました。

色々ネタバレになるので言えませんが、キャラのみ言います。
登場するキャラは“ネギま”の主人公の『蒼騎 真紅狼』です。

待っていてくださいね。

では設定をどうぞ。

キャラ設定

名前 幻真

龍の名 夢幻龍

性別 男

年 だいたい64億9千万歳

身長 人の時、177cm

龍の時、10〜12mぐらい

容姿 髪は『ナムコ×カプコン』の主人公である有栖零児の髪型なので白と黒のメッシュ。

体形はFFDDのジエクトみたいな感じ。

設定

^{ガイア}星によって生まれる。

ガイアが自身の力の半分を幻真に分け与える。

そのため、幻真は星の半身でもあり、リンクしているためどんな傷も寝ていれば治る。属性攻撃の加え、『時』、『空間』、『混沌』、『無』といった掴み難いものも操れる。

戦闘は己の肉体と自身で創造した戦闘法。

元にしたモデル

ニコ動の『MUGEN』に出てくる“グスタフ・ミュンヒハウゼン”の戦闘法。

武器はワイヤーと魔力（もしくは龍の気で戦う）

KOFシリーズに出てくる“K'”の戦闘法。

『BLEACH』のスタークが^{レクレシオン}帰刃したときの龍ver。

オリジナル神器

『魔槍 ゲイ・ボルク』

ぶっちゃけFateのランサーの武器のイメージでOK

あと一つ持っていますがこれは原作にも出ている物です。
物語が進めば、明かします。

そして、ときどきFDDのEXバーストの技を出します。

『キング・オブ・ザ・ブリッツ』とか『ネオアルマゲスト』とか。

あとは出てくるセリフとか・・・。

こんなカンジです。

戦闘法は今のところ増やしません。多分これだけでも確実に敵を潰せるので。

神器の方は分らないです。状況によって変化します。

分かると思いますがチート使用になっております。ご了承ください。

キャラ設定（後書き）

まだ、イツセー達は出ません。

時代で言つとリアスのおばあさまがまだ若いころの時の頃のお話です。

旧魔王がそれなりに存在している時のお話。

この頃の世界情勢（前書き）

続けて投稿。

多分明日は投稿できません。

この頃の世界情勢

数百年前から天使、悪魔、堕天使との小競り合い（俺からみればだが）が起きている。

いやー、色々あったんだよ。

……何？時間が飛んでいる？

説明するのはめんどくさいから、簡単に言つと。

俺が生まれる。

←

次に神、魔王を生む。

←

四人で楽しく過ごす。

←

その間に色々な存在が生まれる。

←

数十億年後にささいな事で神と魔王が喧嘩勃発。

←

それをきっかけに戦争が勃発し、その途中で神と魔王が死ぬ。

↑ 今

ここだ。

お解り？

なんだが、最近戦場に赤い龍と白い龍が暴れているせいで、戦場がメチャクチャらしい。

心当たりがあるんだがどうしよう？

ドライグとアルビオンは何やってんの？

どうせ、またくだらん喧嘩で始まったことなんだろうよ。

『あの二人もよくやるね。』

「・・・ガイアか」

『ボクじゃ悪いかい？』

「いんや、別に？」

『幻真はこの戦争に参加するの？』

「なんでだよ、こいつらが勝手に始めた戦争だ勝手にやらせるさ。・

・まあ、星に迷惑をかけなければだけど。」

『そうなるね。ボク達は基本的に傍観役、余程のことじゃない限り手出し無用だしね。』

「さて、この戦争はいつまで続くんだろうかねえ。」

『それはあの二人の喧嘩が収まるまでじゃない？』

「だろうな。・・・ドライグにアルビオン、いい加減に止めないと三勢力に封印されるぞ？」

「といって、俺は下界をみるのを止め、眠りについた。」

さらにその数百年後・・・

あの戦争はどうやら三勢力に大打撃を与え、今は沈静化しているらしい。

ドライグとアルビオンは三勢力が手を取り、封印されたらしい。

そして、神が前々から創っていた。

セイクリッド・ギア
神器に封印されたらしい。

ちなみに俺も持っている。

二つも持っている。

以前、神はこう話していた。

「神器は一人に付き、一つ。しかも、人間に宿る。」

とね。俺のは特別製な為、そんなルールは知りません。

“神”が遣していった神器は人間に宿るため、三勢力は人間を転生させ、自分たちの戦力の底上げをしていた。

『ねえ、幻真？』

「・・・なんだ？」

『世界を見て回ってきたら？』

「なんでだ？」

『外の様子を見ている時の顔がニヤけていたよ？』

「・・・本当か？」

『うん。』

「行ってもいいのか？」

『好きな時に帰ってくればいいよ。』

「そんじゃあ、言ってくるよ。」

というなんとも軽いノリで旅に出ることになった幻真は人の姿に変身してガイアがいる領域から出ていった。

長い間、力を完全に自分のものにするのにみっちりやった。そうしたら、仮の姿でも言つべきか人間の姿になった。

『その姿も久しぶりにみるね。』

「まあ、ここでは必要ないからな。だが、外はそうもいかないだろう。」

『そうだね。じゃあ、いつてらっしゃい。気をつけてね。』

「おう。行ってくる。」

こうして、幻真ののんびりな旅は始まった。

この頃の世界情勢（後書き）

最初に向かう場所は、天界です。

天界に向かう方法は次の話で明かします。

【追記】

ちよつと編集し直しました。

天界に來たんだが歡迎は・・・されねえよな。(前書き)

長い文になってしまった。

天界に來たんだが歓迎は・・・されねえよな。

〔幻真side〕

今、俺は人でありながら龍・・・つまり『龍人』つてのになっている。そんなわけでガイアのいる星の領域から次元の狭間を通って、天界に移動中だ。

このルートは俺専用で、天使、悪魔、墮天使に絶対気が付かれない。まあ、通っていると光りが見えてきて出口らしきモノに出てみたら、うん。イメージ通りの世界だったよ。

雲の上に神殿や役所みたいなものがあり、所々に下級天使がせつせと働いている。

そこにかけてくる声は警戒の声だった。

「そこの方、止まりなさい！」

「うん？俺か？」

「その黒いスーツを來た貴方に言っています。」

「ああ、俺なわけね。」

まあ、あちらのご要望通り止まってあげた。

「ここは天界です。どこから來たか言いなさい。名も無き龍人よ。」

「言ってもいいけど、信じないだろうから言わない。」

「・・・私をバカにしているんですか？」

と言った後、彼女の部下だろうか数人の下級天使がじりじりと寄って來た。

「おいおい、そんなに怒るなよ。綺麗な顔が台無しだぜ？」

「なっ！？」

「案外俺はアンタのような女、タイプだぜ？」

とちよつとからかってみることにした。

「ふざけたことを！！・捕えなさい！！」
と下級天使たちは魔力で光りの鎖のようなモノを造り、俺に向けて投げた。

だが、そんな鎖は虚しく俺の体を通り抜け捕まえることは出来なかった。

「そんなバカな!？」

「さて、ちよつと下級天使たちは邪魔だな。・・そおい！」
と抜けた声の後、下級天使たちは全員この場から消えた。

「一体何を!？」

「なにこの場から遠ざけたただけだ。」

「私一人なら勝てると思つたならそれは間違いです！」

そう言いながら、光で造られた小鳥たちがいくつもなつて俺に襲いかかつて来たが先程の現象のようにすり抜けるといふ事だけだった。

「くっ！実体があるのに認識されない。まるで幻のようね。」

「俺はそこに居ないぞ？」

「ではどこに!？」

「それはアンタの後ろだよ。（ムニユ）」

「えっ!？・・・アン？」

「お！いいおっぱいだな。なかなか張りがあつて揉みがいがある。」

「ひゃうん。や、やめなさ・・ああん。」

「やだね。・・ちよつとばかり付きあつてもらうぞ？」

一人の女性の上級天使（？）は幻真におっぱいをしばらく揉まれることとなった。

（幻真side out）

（????side）

いつもの天界を眺めながら仕事をしていた私は部下から「侵入者が来ました！」という報告を受け、現場に向かった。

侵入者の容姿は黒白の髪に黒いスーツだったが、奴から溢れている波動は龍そのものだった。

「（龍人か。・・・戦闘はなるべく避けたいですね。）」

“龍人”とは元は龍だが長い年月を掛けることによって、人に変わることが出来る龍の事をそう呼ぶ事になっている。

それと同時にそれは『危険』ということを示す言葉となった。

先程言ったように「長い年月」ということは見た目はどうであれ、力などはズバ抜けて高いのだ。

上級天使が三人でようやく対等出来るレベルである。

部下たちに命じて、捕縛用の鎖を投げたが、通り抜けるとい現象が起きた。

その現象を解析しようと思ったときには部下の皆はどこかに飛ばされており、気が付けば私一人だった。

「私一人なら勝てると思ったならそれは間違いです！」

私は攻撃したがやはりさつきと同じだった。

「くっ！実体があるのに認識されない。まるで幻のようね。」

「俺はそこに居ないぞ？」

「ではどこに！？」

「それはアンタの後ろだよ。（ムニユ）」

「えっ！？・・・アン？」

「お！いいおっぱいだな。なかなか張りがあって揉みがいがある。」

「ひゃうん。や、やめなさ・・・ああん。」

いきなり胸を揉まれ、咄嗟の事に対応が出来なくなっていた。

「やだね。・・・ちよつとばかし付きあってもらうぞ？」

そう言った侵入者は何かを呟きながら、私の胸を揉み砕いていった。
「???? side out」

「幻真side」

俺はこの女のおっぱいを揉みながら色々やっていた。

「（他の天使たちが来ないようにこの場所までの距離をいじって後、察知されないように結界を張らないと・・・よし完了！あとはこの女をイジメてみるか。）」

頭で考えながら、手は張りのあるおっぱいを揉みまくっていた。

ときどき、「はぁん」「あん」「ヒィ！」と口から涎を垂らしながらアエギ声を聞こえる。

・・・うん、エロい。

「まあ、アンタのおっぱいが揉みがいあるだけで満足かな。」

「えっ？は、ヒィ！」

最後に思いつきりち。びを引っ張り手を離してあげた。

女天使はしばらく快楽に酔いしれていて立つことが出来ても、フラフラだった。

少々お待ちください・・・

どうやらヤル前の状態に戻ったらしく、大丈夫と見て結界を解除したら周りには下級天使からすごい輝いている天使たちがこの場を囲んでいた。

「・・・ワァーオ。」

「その龍人。大人しくしなさい。そうすれば怪我はしません。」

「大人しくしているんだから、目の前のモノを引っこませろ・・・ウゼェんだよ。」

目の前には光りの鎖を何個も持った下級天使たちが今にも投げようとしていた。

「それは出来ません。貴方が本当に危険じゃないのであれば・・・ですが。」

「取り敢えず、名乗れ」

「それは貴方からでしょう?」

「こんなふざけた真似をするやつらに自ら名前を教えねえよ。」

「では私も教えません・・・ガブリエル大丈夫ですか?」

「え、ええ。平気よ。ミカエル。」

へー。さっきの女天使ガブリエルっていうのか。覚えておこう。

「さて、拘束させてもらいましょうか?」

「・・・つたく、こつちが大人しく従っていたら調子に乗りやがって。」

と言いながら俺は黒い手袋を締め直した。

「鎖を投げなさい!」

「・・・終わりだ。」

と言った後ここに居る天使たち全体に龍氣ドラゴニック・オーラを叩きつけた。

『Undulation of Phantasma dragon
!-!』（夢幻龍の波動）

この一撃により、天使たちは一気に倒れ、生き残ったのはミカエルと呼ばれていた天使とガブリエルと呼ばれた先程の女天使だった。

（幻真side out）

「ガブリエル side」

結界を解いた時には、仲間が来てくれていた。

私はこの瞬間、「勝った!」と思った。

なぜならば、熾天使の中でも最高位に立つミカエルが着ていた。

だが、侵入者は態度を変えず、むしろ依然優位に立っていた。

その時、侵入者の動きがあり、その事に気が付いたミカエルは部下達に“光の鎖”を投げつけようとした瞬間、目に見えない力が容赦なくこの一帯全体に叩きつけられた。

まるで、上から物を押し潰すほどの威力だった。

当然、力が無い者や実力差がある者は倒れていた。

私やミカエルがやっこの思いで立てる程度だった。

「こ、この力、あり得ないわよ。」

「あり得ないだろうが実際に目の前で使われたんだ。信じるしかない。」

「・・・ここまでして、貴方の目的はなんですか!？」

「観光だよ。ミカエル」

「何故、私の名を・・・?」

「ん? そりゃ、昔会ってるからな。」

「貴方と私が?」

「お前がまだ熾天使なりたてだったころにな・・・。神にいつもの報告をしてた時に俺は訪れていたんだが・・・覚えてないか、龍の姿だったし。」

と侵入者は当時の様子を思い出しながら話していた。

ミカエルはその時の記憶を必死に思いだしているようだった・・・がしばらくしてから「ハッ!」となり侵入者の方をみた。

「まさか、あの時の龍ですか?!」

「おお! ようやく思いだしたか。」

「あの厳格な神が笑っていたいながら喋っていた時の記憶が未だに印象

に残ってます。・・・まさか、貴方だったとは。」

「ミカエル・・・この侵入者を知ってるの？」

「こちらの方は、今は亡き主ですが生前の神と親交の深かった龍ですよ。」

「この龍が?!」

ぱつと見て、そうとは思えない容姿だけど、ミカエルが言うんだからそうなんでしょうね。

「確か、名前は幻真でしたよね?」

「名前まで覚えてるとは嬉しいね。」

「幻真さんがこの天界に何用で来たんですか?」

「いや、神死んだじゃん? 戦争中に。その墓参りと世界を旅しようかなと思って。」

「・・・!!」

この龍、なんで私たちの主が死んだことを知ってんのかしら?

「・・・神が亡くなったことをご存知でしたか。」

「まあ、アイツは俺の“・・・”みたいなモンだしな。」

「何か言ったかしら?」

「いや、何も言ってねえよ。」

「では、ご案内します。・・・私たちの主の墓に」

〈ガブリエル side out〉

〈幻真 side〉

ミカエル達に案内をさせられ、神の墓まで来た俺は取り敢えず手を合せて拝んだ。

龍が拝むつてのもどこか奇妙な光景だがしょうがない。

まったく、オマエもアイツも勝手に死にやがって・・・

途中で止めればよかったものをここまで発展させやがって、お前らは頑固者だよ。

まあ、ゆつくり寝ろよ。
いずれ、また来るぜ。」

「・・・さて、そろそろ行こうかね。」

「もう行くんですか？」

「ああ、まだ見て回りたい土地がたくさんあるからな。」

「そうですね・・・また来てください。歓迎しますよ。」

「熾天使のトップが一介の龍を歓迎しちゃマズくないか、それ？」

「大丈夫ですよ。神の友人と言っておけば、皆納得するでしょう。」

「それもどうか・・・。。。。開け。」

と言った後、空間が割れ、“次元の狭間”が開いた。

「今度は、騒ぎにならないように天使のルートで来てください。」

「気が向いたらな。じゃあな。」

「縁があれば、再び逢いましょう。」

そうして、俺はどたばたした天界を出ていった。

次元の狭間移動中・・・

「さて、今度は“冥界”に行くとするかねえ。魔王の墓参りもしねえと。」

〈幻真side out〉

天界に来たんだが歓迎は・・・されねえよな。（後書き）

この物語で初の微エロ（？）になった。

あ、『夢幻龍の波動』ですがあれは『星の波動』とも言えます。
だって、幻真は星の半身でもありますし・・・。

そして神と魔王は幻真やガイアにとって“弟”みたいなものです。

冥界に行ったが・・・やっぱり歓迎はされないのかよ。(前書き)

メンテナスがあるという知らせがあったので、一気に投稿します。

冥界に行ったが・・・やっぱり歓迎はされないのかよ。

＼幻真side＼

無事、天界を出て、今度は冥界に移動中だが・・・。

こうもやることがないと暇でしようがない。

なんか面白いことはないかなー？と考えていたら出口に着いた。

「よし、到着。」

と降り立った場所は、目の前に天にそびえ立つ城のようなものが見えていた。

「・・・冥界だよな、ここ。」

そんな風に思い返してみると、天界と同様、警備の者に見つかった。

・・・あ、なんだこれ、既視感がパネエ。

「貴様、何者だ！」

あー、やっぱりこうなるわけね。

「動かねえから、お偉いさん連れてきてくんない？」

と先制したけど逆効果だった。

「侵入者だ！！現ルシファー様に知らせろ！！」

「はい！」

「またこのオチかよ。」

とまたやってくる出来事に頭を抱えた幻真だった。

＼幻真side out＼

＼ルシファー（サーゼクス）side＼

私が魔王となつてから、数百年が過ぎたが先代魔王に比べると十分

のーにも達していない。

今日も次からやってくる書類の整理や旧魔王派たちの確執などの問題に取り組んでいたら、警備を担当している者から急ぎの伝言が入った。

「失礼します！」

「どうかしたのかい？」

「サーゼクス様、この領の境で侵入者が現れました！」

「侵入者？」

「現場の者からの伝言では“龍人”らしいんですが……。」

「……！！それで状況は？」

ただの侵入者ならいつもの通りに対処してもらうが、龍人ならば私たち上級悪魔で対処をしなければならない。

「今のところ、大きな動きはありませんがただ……」

「ただ？」

「『動かねえから、お偉いさんを連れてこい』と言ってます。」

「ふむ……。ならば行ってみようか。」

「よろしいですか！？」

「あちらにも話し合いには応じる構えのようだし、出来るなら話し合いで済ませたい。」

「……分かりました。準備します。」

「うん、よろしく頼むよ。」

私はその龍人に会うことを決めた。

く ルシファー（サーゼクス） side out く

く 幻真 side く

発言してから、数十分待っていたらあちらからいい具合の魔力がこっちに向かってきた。

ようやく来たか。

「待たせて済まないね、私はサーゼクス・ルシファー。魔王をやっている。」

「ふーん。アンタが魔王ね。」

「キミの名を聞いてもいいかい？」

「あ、俺の名は幻真だ。」

「幻真か……。下の名は？」

「ない」

「そうか……。では幻真君キミは冥界になんの用かな？」

「ただの観光と墓参りだ。」

「墓参り？」

「そ、墓参り。……初代魔王の」

そこでサーゼクスと名乗った奴以外は騒ぎ始めた。

「キミは初代魔王と知り合いなのかい？」

「知り合いというかなんつか“兄弟”？」

「兄弟だつて?!」

「取り敢えず、アイツの墓まで案内してくれよ。」

「あ、ああ。……こつちだ。」

とサーゼクスは初代魔王の墓へと案内してくれた。

移動中……

「ここが、初代魔王の墓だ。」

「そうか……。そつ」

俺は墓の前で拝んだ。

来てやったぞ、バカ弟。

神と同じで頑固者のお前がいきなり亡くなるなんて、……。この不孝者が。

「……………」

そろそろ、後ろで待ってる奴の相手をしなくてはならないからな。また来るぜ。

そして、俺は立ち上がりサーゼクスの方を向いた。

「済まなかったな。いきなりお邪魔して。」

「いえ、まさか初代魔王様の兄君だったとは知らず申し訳ない。」

「さて、聞きたいことがたくさんありそうだし、どこか落ち着ける場所で話そうか？」

「では、我が家に……。」「

我が家？」

「ルシファアの名は魔王を名乗るときに使うんですよ。本来なら私の名はサーゼクス・グレム……。」「ドガン！！！！」

名を言いきろうとした瞬間、先程来た道から爆発が起き、数人の悪魔が吹き飛ばされた。

「……………来たか。」

「来たって……………何が？」

理由を聞こうとした瞬間、爆発を起こした本人から声が掛かった。

「……………ごきげんよう、サーゼクス・ルシファア」

「……………やあ、エドワード・アスタロト。」

「温くなった貴様を殺し、私が魔王となる！」

「……………???」

依然、状況が読み込めない俺。

そんなとき、そのエドワードって奴は俺を見た瞬間なにやら笑っていた。

「……………頭、大丈夫か？」

「ハハハハ！コイツは都合がいい！！厄介極まりない龍人も殺せるなんて！！」

あれ？俺さりげなく、巻き込まれてね？

「ここで会ってしまったのが運の尽きだ。・・・名も無き龍人よ。」

〈幻真side out〉

冥界に行ったが・・・やっぱり歓迎はされないのかよ。(後書き)

エドワードはティオドラの叔父に当たります。
オリジナル設定です。

旧魔王は一部を除いてアホばっか。(前書き)

リアスはまだ生まれておらず、サーゼクスはまだ結婚してない状況です。

旧魔王は一部を除いてアホばっか。

〈幻真side〉

突然現れた旧魔王さんは「最高にハイッてやつだ！」状態です。

まあ、実力の違いに分かっていない奴が俺に勝てるわけないんだけど。

めんどくさいったらありやしない。

「で？戦うのか笑うのか、どっちかにしてくれない？」

「貴様、この状況が分かっていないのか？」

「分かっていつてるんだよ、バカ。」

「どうやら、本格的に頭がおかしくなったらしい。」

うわ、俺イカれたことになってるよ。

「サーゼクス、お前は手を出すなよ？俺の獲物だ。」

と言って、俺は構えた。

「やれるものならやってみろ！」

と吼えた後、一気に間合いを詰めて、俺の顔にストレートを放ってきた。

その攻撃は充分に避けれるモノだったが敢えて、受けた。

ドガッ！！

なかなかのものだが、俺はもつとすごいストレートを受けたことがあるため大したことはなかった。

俺はすぐさま体勢を立て直し、威力を込めず目くらまし程度のレベルの魔力球を数個程地面にぶつけた。

ボムッ！ボムボムボムッ！

「クソッ！目くらましか！！無駄なことを！！」

コイツ・・・バカじゃないのか？

敵が目くらましするなんて敵の攻撃が整いましたよって大声で言っているようなモノだぞ？

敵の位置を的確に把握した後、拳に龍焰を纏って、突撃した。

“ S U P E R C A

N C E L ! ”

“ ヒートブレイズ ”

「・・・そらよ。」

「があ？！」

土煙の中から突如出てきた幻真とエドワード。

しかし、前者は右手を前に出した状態で出てきたが、後者は空中に吹き飛んでいた。

そのまま落ちてくるエドワードは着地をしようとするが、幻真の攻撃はまだ終わっていないかった。

「まだ終わっちゃいねえぞ、コラ！！」

「なに、ぐがあー！！」

着地する瞬間、後ろから肘を叩き込み、体全体にジャブ、ストレート、飛び蹴り、ローキック等を打ち込んでいく。

“ D R E

AM CANCEL!!”

“ドラゴンドライブ”

「オラオラオラオラア!!!」

「ぐあああああ!!!」

「……行くぞ、オラア!!!」

最後の締めと言わんばかりに大きく振りかぶり、エドワードの腹に思いつきりボディブローを叩き込み、そのまま上に吹き飛ばす瞬間、火柱が捲き上がった。

「かつ……はっ……」

龍焰で身を焦がしながら、幻真の前に墜ちてくる。

「………終わりだ」

……ボツ!

ヒュッ!

ドゴオン!!!

「がああああああああ!!!」

幻真は右手に龍焰を纏わせ、地面にぶつかる前にエドワードの体に高速ですり抜けながら打ち込んだ。

その時、スピードの関係で幻真が通った道には炎が微かに燃えていた。

そして、エドワードは打ち込まれた炎によって爆発した。

「弱くて、話しにならねえな。」

幻真side out

サーゼクスside

幻真から、「手を出すな」と言われたので観戦することにした私は、戦闘が始まってからエドワードが魔力で強化した拳でストレートを放っていたが、幻真は大したことないな。と言わんばかりにケロツとしてた。

・・・やはり、龍人に対して打撃は効果は薄いかな。

そのあと、幻真は魔力で造った魔力球を地面に放ち、煙幕を張っていた。

エドワードは一度体勢を立て直す為に張ったと思っているが、私はすでに決めるつもりでいることに確信が持てた。

その勘はあたり、少し待ってから幻真は右手を燃やしながら突撃し、エドワードを上空に吹き飛ばした。

なんだ、あの焰は？

悪魔の体を簡単に燃やしている・・・。

そんなことはあり得ないハズだ。

悪魔は一般的に炎や闇の攻撃に強い耐性を持っている。

だが、あの焰は何かがおかしい。

思考に耽っていると、さらに技を叩き込んでいた。

一撃一撃が重く、意識が飛ぶほどのものだと分かる。

実際にエドワードは意識を先程から何回か失っているのが見える。

そして、時折、「ボキッ！」や「バキッ！」という折れる音も聞こえてくる。

「もう、その辺で……」

と声を掛けようとしたとき、アッパーの要領で再び上空に吹き飛ばす瞬間、火柱がエドワードを包み込みながら、上にかち上げしぱらくしてから、墜ちてきたエドワードを高速ですり抜けた。
その後、エドワードは爆発し、絶命した。

彼は「話しにならない」と言って、興味を無くしたのか一度もエドワードの方には振り向かなかった。

「……凄まじいな。龍人の戦闘は。」

「それでも、抑えてる方だぞ？」

「これでかい？」

「……本気になったら、この一帯が吹っ飛んでるよ。」

さらっと言われる言葉に私は身震いした。

今のがもし、本気でやられていたら……。

「想像もしたくないな。」

「……何がだ？」

「こちらの話した。では、今度こそ行こうか、我が家に。」

「あー、そんな話だったな。」

想像した光景を消し、私たちはグレモリー家に向かった。

「サーゼクス side out」

「幻真 side」

今、俺はサーゼクスの実家、つまりグレモリー家に訪れているんだが……。

うん、メツチャ大きい。

なんだこれ？

「……ここがサーゼクスの家か？」

「ああ、そうだよ。」

そうついいながら、門が開いた。

「……お帰りなさいませ、サーゼクス様」「」

凄い数のメイドと執事がお迎えしていた。

「やあ、帰って来たよ。」

「お帰りなさいませ、……こちらの方は？」

と言ってサーゼクスの後ろに居た、俺の方に注目が集まる。

「ああ、彼は初代魔王の兄君であり、龍人でもある幻真君だ。」
「……！？」」「」

「兄弟っていうよりかは兄貴分って感じだけだな。」

「だけど、兄には変わりはないだろう？」

「まあ、な。」

そんなやり取りをした時、屋敷の方から「サーゼクス」と言って近づいてくる亜麻色の髪をしている若い女性悪魔が来た。

「お帰りなさい、サーゼクス。……ようこそ、グレモリー家へ。」
とご丁寧にあやづをしてきた女性悪魔。
多分、サーゼクスの母だな。

「どうも、ご丁寧に。龍人の幻真と申します。」

「幻真さんとお呼びしても？」

「どうぞ。」

「幻真さんは、どのような目的で冥界に？」

とグレモリー夫人は質問を。

「初代魔王の墓参りと観光ですよ。」

「初代魔王の知り合いか、なんかですか？」

「母上、幻真君は初代魔王の兄君らしいですよ。」

グレモリー夫人は一度止まり、その後再起動した。

「……本当ですか？」

「本当だ。……そういや、貴女の名は？」

「これは、失礼しました。私はヴェネラ・グレモリーですわ。」

「まあ、アイツが死んだって聞いたからな。墓参りには行こうと思つてな。そのついでとして、冥界観光をしようと思っただけだ。だが、まさかああなるとは。」

「どうしたのですか、サーゼクス？」

「母上、実は——」

説明中……

「……そうですか。旧魔王派の方が……。」

「厄介な確執を抱えてるな、サーゼクス。」

「申し訳ありません。」

「……？なんでヴェネラさんが謝つてんだ？」

「他人の貴方に私たちの厄介事に関わらせてしまったからです。」

「別に気にしてないし、今回は俺が勝手にやったことだしな。だから、謝るな。」

「しかし、これで俺も標的か。」

「本当に済まない。」

「警告しておけよ、サーゼクス。」

「ああ、旧魔王達にいつておこう。」

「何も教えないよりかは、幾分トラブルが減るし、抑止力にもなる。」

「……まあ、暗い話はこれぐらいにして、食事にしましょう。」

そのあと、俺は一人で喰いきれるか分からないほどの料理が出てき

た。

・ ・ ・ 全部喰ったけどさ。

幻真 side out

旧魔王は一部を除いてアホばっか。(後書き)

作中に出てきたのは、KOFのK・と言って分かる人はいるかなあ。

幻真と少女（前書き）

皆、大好きあの女性が登場します！

幻真と少女

〈幻真side〉

冥界に来てから、数十年が経ち……。

時間が飛んでる？ほら、あれだ。時間圧縮ってやつだ。

あ、違うか。

まあ、そんなことはどうでもいいな。

この数十年でサーゼクスは魔王の仕事を確実にこなしていき、それなりに名声が高くなっていった。

さらに、ヴェネラさんに子が宿ったようだ。

判明してるのは女の子らしい。

それにより、サーゼクスがメツチャ浮かれている。

だが、それも一時であり、未だに終わってない問題もあった。

旧魔王との溝が埋まることはなく、むしろ深くなっていくばかりだった。

「そろそろ、冥界^{ヨミ}を出るべきかな。一つの場所に留まり過ぎてるし。」

「そんなことをグレモリー家の近くにある街で歩きながら、呟いていた。」

「さて、次は……ん？」

次の行き場所をどうしようかなと考えた時、そこそこ位のある貴族が後ろにメイドを連れて歩いていった。

どこにでもいそうな奴なので、無視しようと思ったとき声を掛けられた。

「おいそこの龍人！」

「あ、俺？」

「貴様だ。」

「なんかよう？」

「貴様があの有名な“焰拳”か？」

「……そうですが。」

そう、俺は旧魔王のエドワードを倒した後、数年後に付けられた異名だ。

旧魔王たちに付けられたのがこっちに流れてきて、しかも目の敵にされている。

「私は旧魔王側の悪魔だが、“焰拳”がどんな奴か、見に来たが強そうに見えないな。」

「噂なんて尾びれが付きもんだ。違うか？それでは俺は、これで。」

その時、後ろの銀髪メイドが凄く印象に残った。

〈幻真 side out〉

〈サーゼクス side〉

幻真に話したいことがあつて、家に戻って来たが今は散歩中と言われたので困っていたが、そんなとき幻真は帰って来た。

「幻真、いいところに来てくれた。」

「どうした、サーゼクス？」

「ちよつと、私の部屋まで来てくれ。」

「………おう。」

私の声が真剣なのが伝わってくれたのか、何も言わずに着いて来てくれた。

「で、どうした？」

「この書類を見てくれ。」

「どうして……おい、こいつは。」

「ああ、最悪だ。」

「……こいつさつき会ったぞ。」

「本当かい!？」

「ああ、平然な顔で歩いていたな。」

「ということは、表と裏を使い分けているってことか。」

「……消すか？」

「出来れば、そうしたいが私の立場が表だって介入したら……。」

「……俺がやろう。」

「しかし!!」

「構わん、“これも”俺の気まぐれだ」

「……済まない。」

「では、行ってくる(ちょうどいい機会だ)」

「そうやって必要な書類を持ち出し、さっきの奴の本拠地に向かった。」

〈サーゼクス side out〉

〈幻真 side〉

悪の本拠地あつて不気味なオーラが漂っていたが、俺にはそんなことは関係ない。

行きたい場所にどこにでも行けるのだから。

「……よう。また会ったな。」

「!？」

「貴様がしていることに決着ケリを付けに来た。」

「私がしていること?なんのことだ？」

「とぼけるな、若い女性悪魔を何人も犯した揚句、人形遊びと称して体を干切ったりしてるそうだな。」

「……。」

「黙っているということは否定しなのか。」

「……クク、ヒヤハヤヒヤ。」

「なにがおかしい。」

「よく調べたネエ。僕がやっていることに!!」

そこからは、ベラベラと喋ってくれた。あたかも自分が正しいことをしてると思いながら。

「いやさ、若い女性悪魔の体は最高だよ!!アイツ等何人もが口を揃えてイイ声で啼くんだけ?やってる最中も泣きじゃくる声がそられるし、終わった後は「殺して」っていうから、遊びながら殺してやったよ!!」

「お前、同じ悪魔なのに心が痛まないのか!」

「彼女たちは喜んでいたんだから、痛むわけではないだろう!」

コイツは殺すんじゃないくて、『無』くしたほうがいいな。

そう思い、手の上で黒い球体を創り、アホみたいに喋っているアホに向けて、デコピンの要領で弾き飛ばした。

その男は普通に避けたが避けるのではなくさまこの場から逃げれば、もう少し長く生きれたかもしれない。

幻真が放った黒い球体は避けた男の後ろで急激に広がり、その男を呑み込んだ。

「な、なんd・・・!?!」

言い切る前に完全に呑み込まれ、その呑み込まれた球体は再び元の大きさのサイズになり、幻真の手の上に収まった。

「・・・これが『無』だ。」

バキンッ!

球体を潰したあと、さっきの悪魔はすでに存在が『無』く。ただそこには幻真のみが立っていた。

そこに先程見かけた銀髪のメイドが襲いかかって来た。

「貴様ああああああ!!」

＼幻真side out＼

＼????side＼

主に尽くす為にこの場に居た私は、お茶を入れていた。

部屋の前まで来たとき、先程すれちがった男が主を変な球体を投げつけ、それを避けたが後ろでそれは膨れ上がり、主を呑み込んだ。その後は見たくなかった。

それよりも、手に持っていたナイフでその男を殺したかった。

「貴様ああああああ!!」

＼????side out＼

＼幻真side＼

男を消し、一息ついたときにナイフを持って少女は襲ってきた。俺は、それをいなしそのままナイフを地面に叩き落とした。

カランッ!

地面にぶつかった音が静かな屋敷の中に響き渡った。

「落ちつけよ。」

「貴様だけは、貴様だけは!!」

「お前は奴が何をやっていたか知っているのか?」

「主は、私たちのような身寄りのない悪魔を働かせてくれた!」

「.....名は?」

「.....グレイフィアよ、そして、私の居場所をお前は壊した!!」

「・・・眠れ。」

トン・・・

「っは!？」

「全てが終わった後には消えてるさ。」

「わ・・・たし・は、あな・・・た・・・を許さな・・・い!!」
その後、目を閉じた。

「後の事はサーゼクスに任して、俺は冥界^{「冥」}から去るか。」

そうして、俺は少女を抱えグレモリー家に帰った。

＼幻真side out＼

＼サーゼクスside＼

幻真が出ていってから、約一時間半が経った頃に、彼は帰って来た。
銀髪のメイドを手に抱えながら。

「・・・幻真、彼女は？」

「奴の被害者になりかけた少女だ。保護してくれないか？」

「別に構わないが・・・。なにかやったのかい？」

「この娘、奴を慕ってたらしい。」

「・・・本当かい？」

「本当だが、もちろんコイツがやってたことは知らなかったらしい。」

「やってたことは？」

「教えてない。復讐する相手ぐらい遺していないと自殺しかねないからな。」

「・・・本当に済まない、幻真。キミに辛い思いをさせて。」

「さて、俺はそろそろ、冥界を出ていくぜ。」

「なに？」

「元々、観光目的だったんだ。それがなし崩しにここに何十年も留まっていただけだ。別のところにも行きたいところはあるしな。」

「そうか……。寂しくなるな。」

「妹が生まれるんだから、寂しくならないうる？」

「それを言われると、否定できないな。」

苦笑いするサーゼクス。

「あ、そうそう。彼女の名前はグレイフィアらしい。」

「グレイフィアか、分かった。」

「そんじゃま、縁があればまた逢おう、サーゼクス。」

「ああ、元気で。」

そう言った後、幻真はそこから居なくなっていた。

（サーゼクス side out）

「さて、お次はどうしようかねえ？」

行き先も決まらないまま、幻真は次元の狭間を彷徨った。

幻真と少女（後書き）

この後、まあ色々あってからサーゼクスとグレイフィアは結婚し、ヴェネラナさんはリアスを生みます。

どうしてこうなった？（前書き）

このタイトルは書いてて付けました。

本当にどうしてこうなった？

【追記】

R・18です。

良い子はバックしてください。

どうしてこうなった？

〔幻真side〕

行き先が決まらず、取り敢えず適当に彷徨っている。

「さて、勢いよく飛び出した方がいいが、どうしようかね？」
頭を捻ってる俺だったが、突如俺の体が引つ張られた。

「……………来て」

「ん？……………うおおおおお？！？！？！？」

誰かに囁かれたと思ったときには体が引つ張られ、見たことのない景色が目の前に広がった。

「一体なんだよ……………」

自分が居る場所を確認しようと、目を開いたらそこは城が遠くにあ
り、地面は白い花で埋め尽くされており、異様に月が大きく見えた。

「……………どこだ、ここ？」

というか、こんな空間……………次元の狭間にあつたわけ？

「……………私の元に来て。」

また囁かれた。今度ははっきりと聞こえた。

方角からして、あの城からか。

取り敢えず行ってみることにした。

移動中……………

ようやく城門の前まで辿り着いた俺は一言言いたかった。

「遠い!!」

あそこの丘から、ここまでメチャクチャ遠かった。
門を開け、玉座の扉を開けたら・・・

ガチャ・・・

「待ちくびれたぞ、我が夫よ」

そこには白いドレスで金髪で長髪の女性(?)が待っていた。
しかも、何故か玉座の間が式場になっていた。

ボタン・・・

「・・・OK。今のは夢だ。そうに違いない。」
そして、再び扉を開ける

ガチャ!

「何をし・・・」

ボタンッ!

「OK、OK。今のは間違いなく夢だ。」

と何度も呟き、武装概念を強化させた。

・・・よしこれでバッチリだ!!

「お主は何をしているのじゃ?」

「・・・どちらさんで?」

概念は一瞬で崩れ去った。

「我が名はアルクエイド・ブリュンスタッド。真祖の吸血姫だ。」

「俺の名はg・・・夢幻龍なのであろう」!？」

「何故、知っている？」

「教えてもらったのだ。」

「誰に？」

「^{ガイア}星に」

「・・・・・・・・・・・・・・・・why？」

今、耳を疑うような言葉を発しなかったか？

「だから、^{ガイア}星だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・really？」

「うむ。」

つまり、この娘はガイアとお知り合いだということか。

「・・・・・・・・ちよつと、ガイア出てこい!!」

「・・・・・・・・なんだい、幻真？」

「なんでこの娘がお前と知り合いなのか、吐けや、コラ。」

「あ、アルクエイド。幻真と逢えたんだ。よかったね。」

「ちゃんと、逢えたぞ。」

「で、どう？」

「うむ。物凄いタイプだ。」

「それはよかった。すぐに式を挙げる？」

「頼む。」

幻真そつちのけで勝手に話を進めていく二人。

「人の話聞けよ!!」

「なんだい、幻真？今、ボクは大事な話をしてるんだけど？」

「そつちも重要だが、こつちの方が優先度高いだろ！」

「ああ、理由だったね。幻真が星の聖地を出てから、数年経った後だったんだよ。ボクに話しかけてくる女性がいてね、その女性は自らを“真祖の吸血姫”と名乗ってきたんだ。しかも、ボク達、星相

手に話しかけても潰されないほどの力も持っていたから、友人になつてね。そこから、楽しく会話をしていたんだが、彼女が急に「結婚したい」って言うてきてね。相手を探そうと思ったら、いい相手が居てね、幻真を薦めたわけだ。」

「人を勝手に結婚させないでくれませんかねえ!？」

『幻真もそろそろ身を固めたらどうだい?』

「なんでその理論に行きつくんだよ!!」

『ぶつちやけ、孫の顔が見たいからかな? (幻真も恋ぐらいしなよ)』

『

「オイ、建前と本音が逆だぞ。」

「よろしく頼むぞ。我が夫よ。」

「そして、お前もナチュラルに会話に入ってくんな!!」

俺は人の話を聞かない二人相手にツツコミながら会話をするのが疲れてきた。

〈幻真side out〉

〈アルクside〉

なかなか、承諾してくれないから、違う手でいこうと思ったたら予想外の言葉が飛んで来た。

「・・・もうどうにでもなれ。」

『それは「承諾」ってことでいいかい?』

「判断はそちらに任せるよ、俺は疲れた。」

『んじゃあ、式を挙げるよ。』

ガイアは式を創り、俺の服装を替えた。

『じゃ、ボクが立会人になるよ。ある意味とんでもない立会人だよね。』

「早くしてくれ」

「そうだぞ、ガイア。」

『はいはい。えーと、これより、夢幻龍 幻真と真祖の吸血姫 ア
ルクエイド・ブリュンスタッドの婚儀を執り行う。』

中略（分かんから）

では、誓いのキスを』

と言つて、俺はアルクエイドの方に顔を向けた。

「あ、あまり見るな／＼／／」

「なんでだよ。」

「我だつて、このようなことは初めてなのだから／＼／／／」

「そーですか。．．．だが、待たないけど。」

「なに?! ．．．「ちゆる。」んっ!!」

ちゆる．．．ぴちゃ．．．ぢゅうううう!!

「んんうゝゝゝ!!!!（舌までしゃぶられています）」

「はい、終わり。」

「．．．ハア．．．ハア。（トロツ）」

口から溢れ出る、唾液がいつそう艶やかに魅せる。

『長かったね。どうだいお味は?』

「なかなかイケる（キリツ）」

「キスから、激しいとは．．．」

カチッ!

『あ、マズイ。アルクゝ。』

「なんだ、ガイアよ。」

『幻真の“スイッチ”がOFFになっちゃった。』

「どういう．．．きゃ!!」

『いやね？幻真はこう見えてもon/offの切り替えがうまくてね。色々（・・・）と凄いだよ。だけど、今の幻真は無理矢理スイッチを切り替えられた為か、暴走中だね。多分今夜は寝かしてくれないと思うから。まあ、なんだその、ガンバッテね？』

「え”？」

『じゃあ、ボクは消えるね』

くアルクside outく

く幻真sideく

「さて、イクぞ。アルクエイド・ブリュンスタッド――

――理性の貯蔵は充

分か？」

「え、ちょ、まtt・・・ヒイン!!」

魔の手から逃れようとしたが、すでに腕が捕まっており、勢いよく引っ張られ体が幻真の中に収まり、おっぱいを激しく揉まれた。

「そ、そんなに強く揉んじゃ・・・ダメEEEE!!」

「知らん、その気にさせたのがガイアとお前だ。だから、俺の気が済むまでたっぷりとやらせてもらっ！」

ぎゅっつっつう~~~~。

「はっ、はひっ!!そこはもつとだめえ!!」

「へー、ここがアルクの弱いところの一つか・・・なら、もつと攻めてやるっ。」

ぎゅっつっつう~~~~。

ピンッ!

ぎゅっつっつう~~~~。

ピンッ！

ち。びを弾いては思いっきり掴みまた弾くの繰り返しに色んな声で鳴く。

「はあっああー！！」

ヒイン！

んんんっ！

ヒイイイ！！！！」

アルクを見てみると、だいぶ蕩けた顔になっていた。
最後の止めとして、思いっきり口で引っ張った。

ぢゅっっっっっっっっっっ！！！！

「伸びちゃうー！！伸びちゃうよー！！！！」

「・・・準備はこんなもんだろ。」

「・・・ええ？」

「・・・そろそろいいよな？」

「・・・うん、キテえ。」

「そんな声で言ったら俺は止まらなくなるぞ？」

「早くシテ。」

「・・・挿れるぞ」

ずりゅずりゅずりゅ・・・

「・・・お”お”お”！！」

「くう・・・なかなか狭いな。だが、これで・・・全部！！（ズン！」

「・・・ッ！！」

「おっ、締まる締まる。」

「・・・んほお？」

あまりの快楽にアルクは口を開き、涎を垂らしていた。

ずちゃっ！

ぐちゃ！

っパン！

と腰と腰が当たる度に鳴り響く、音は卑猥で二人の感情を昂ぶらせる。

「イ、イク！こんなに激しいとイクウウウ！！」

「伊っても、ずっとやり続けるけどな。・・・（ドスンッ！」

「っ！！アヒイイイイッ！？」

アルクは奥まで叩きつけられ、その反動で弓のように体を逸らして痙攣した。

「・・・お”お”っ。」

「まだまだ、始まったばかりだ。」

三時間経過・・・。

「も、もうダメ。」

と言ってアルクは動かない体を無理に動かそうとするが、幻真は逃がさず腰を掴んだ。

「まだだ、満足してねえんだよ。」

そっいいながら、掴んだ腰を思いつきり降ろした。

ずりゅりゅりゅりゅ・・・！！

「んほおおおお?!?!?!」

さらに二時間経過・・・

結局、早朝まで続いた。

＼幻真side＼

＼ガイアside＼

『さて、朝になったわけなんですが・・・』

二人は運動に疲れたのか、裸で抱き合って寝てた。

『もしもし、起きろ。』

「・・・んあ?」

『昨日はお楽しみでしたね。』

「第一声がそれかよ。」

『で、結局何回シたの?』

そう聞くと数えはじめた幻真。

本当に何回シたんだ?

「十回から覚えてない(キリッ)」

『・・・さいですか。あ、名前なんだけどね。どっちを残そうか迷ったんだけど。これが一番しっくりきたからこれからはこう名乗ってね。』

今後、幻真のフルネームは“幻真・G・ブリュンスタッド”って『

「じゃあ、アルクェイドは“アルクェイド・G・ブリュンスタッド”
か?」

『うん、そうだよ。』

「おい、起きろ、アルク。」

「・・・ふああ?」

『やあ、どうだった?』

「・・・../../../../」

『答えられないほどのレベルか。』

「お前の願い叶うんじゃないか？」

『洒落にならないから。』

「・・・アレに耐えらなければ、幻真には悦んでもらえないということか・・・」

「まあ、アレはそうそう成らないよ。・・・今回はしょうがないけど。」

『さて、二人とも着替えた。着替えた。』

そついい二人はする前の格好に戻った。

『で、幻真はまだ旅を続けるかい？』

「ああ、住む場所を選定しながら。」

「私も行くぞ。」

「分かってるよ。」

『住む場所が決まったら、教えてね？その家からここを直結させるから。』

「分かった。じゃ、またしばしのお別れだ。」

「元気だね。」

『いつてらつしゃい』

二人は手を組みながら、次元の狭間の中に消えていった。

『孫の顔が見れるのか・・・。名前考えておこつ』

（ガイア side out）

どうしてこうなった？（後書き）

・・・エロいなあ。

つか、これ大丈夫なのか？

はい、メインヒロイン（？）のアルクエイド・ブリュンスタッドさんです。

もうイメージはメルブラのイメージで。あ、でも、髪は長髪で。ちゃんと、理由はあるんですよ？

幻真って星の半身なので、それに耐えられる人物を思い描くとアルクしかいねえ。

という感じです。

この回のみ削除覚悟で投稿しましたので見るならお早めに。

最後にこちらの都合により、これから五日間投稿が出来ないかもしれませんのでその辺にご理解ください。

・・・本当にどうしてこうなった？

住む場所は・・・（前書き）

どうか投稿出来た。

・・・他の作品も投稿しないと。

住む場所は・・・

（幻真side）

ガイアが居る、星の聖地から出て、アルクと様々な場所を旅した。その行き先々で、“夢幻龍”の仕事をしなかったが。

“夢幻龍”には大まかな仕事がある。

一つは、星にとって危険とみなした者を殺し、星を護ること。

二つ目は、人間達によって、殺されそうになった神話上の生物を保護して、別の場所で生きてもらうことだ。

結構、助けているんだぜ？

人間達にとって、害にしかない存在を保護して、別の世界に過ごさせている。

その場所は、次元の狭間というより、“星の聖地”に近い場所にある。

その場所に行くには、俺もしくはガイアにパスを貰わなければならないし、無理矢理侵入しようとする痛い目に遭う。護っている者が者だから、しょうがない。

まあ、そんなことをしながら、旅をしてそろそろ腰を下ろそうかなと思ったとき、面白そうな土地があったのでそこを住む場所にした。

「アルク、ここでもいいか？」

「我は幻真が決めたなら、どこでもよい。」
それはどーも。

腰を降ろす場所は、日本で近くに『私立駒王学園』という学校があ

った場所だった。

ちょうど、売りに出てた家があったので、一括払いで土地ごと丸ごと買った。

広さで言つと・・・東京ドーム二個分の広さ。

表札には英語でブリュンスタッドと表記し、取り敢えず落ち着いた。その後、空間を弄つて、アルクの家である“千年城”と俺の家であり、生まれた場所の“星の聖地”に繋げた。

「ま、こんなもんかねえ。」

「終わったか、幻真？」

「おう。まあ、大きなことしか片付けてないけどな。」

「・・・我なりに頑張つて作ってみたんだが、どうだ？」

と言つて、持っていたのはサンドイッチだった。

「うっ。・・・もぐもぐ、・・・うまいぞ。」

「そ、そうか／＼／＼」

「（塩辛いけど、作ってくれたんだし文句を言わず食わねえとな。）

」

「・・・（じー）」

何かを物欲しさそうに見てくるアルクエイド。

「ふあ、眠い。・・・寝るか、アルクエイド。」

「・・・うむ。」

そう言つて、家に入つていったが、寝ることなくやってました。だって、あんな風に見つめられたら、応えなきゃいかんだろ？

そういう生活をしながら、さらに数年が過ぎていった。

（幻真side out）

＼アルクside＼

日本に着いてからは、幻真が手慣れた手つきで物事を進めていた。

「・・・手慣れておるな。」

「まあ、星が生まれてから、同じぐらい生きているからな、ああいう仕事もやっていると慣れてくるもんさ。」

「そうか。」

幻真はせつせと、働いている。

我は、ちよつと思いつき、ダイニングに行った。

「・・・幻真。」

「ん？」

「・・・我なりに頑張つて作ってみたんだが、どうだ？」

「ああ、頂くよ。」

その後、幻真は苦い顔をせずに、普通に「うまいぞ」と言ってくれた。

・・・実際は塩辛いはずなのに。

出来た後、試しに食べてみたが自分でも不味いと思った。

それを幻真は嫌な顔をせずに普通に食べた。

我はそれが嬉しかった。

だからか、幻真の顔を見つめてしまった。

「・・・（じー）」

幻真は、私が何を求めていたのが察したらしく。

誘ってきたので我はそれに応えた。

・・・やっぱり、幻真は最高だな。

＼アルクside out＼

＼幻真side＼

うい。幻真です。

なんというか、報告があります。

子供が生まれた。

それから数年経ち、人間で言うところの今は11歳だ。

もちろん、生まれてくる子は星の加護と力が使えるよ。

生まれてきた子は女の子だった。

名前は、“朔夜”と名付けた。

（東方の殺人姫の金髪verをイメージで by 作者）

龍と真祖の吸血姫の子供というのは色んな意味でヤバいんだ。

なにせ、真祖の時点ではほとんど弱点がなく、しかも龍の耐久力などが受け継いでいるためぶっちゃければ、ほぼ弱点ナシだ。

能力では、俺の方を受け継いでいた。

各属性攻撃 + 『時』と『空間』の力が使えるらしい。

武器はナイフみたいだ。

まあ、色々とスペックがおかしいけど、強くて凛々しくなってくれれば俺は嬉しいな。

（幻真 side out）

住む場所は・・・（後書き）

次から原作開始かな。
その前にキャラ設定ですね。

キャラ設定その2（前書き）

最近、これしか投稿してないな。

他の作品を呼んでる方ごめんなさい！

あと二日で休みに入るので待っていてください。

ようやく、八時間の六連勤バイトが終わる・・・。

キャラ設定その2

名前 旧名 アルクエイド・ブリュンスタッド

現在 アルクエイド・G・ブリュンスタッド

性別 女

スリーサイズ B 90 W 58 H 62 (この小説内のみの設定)

種族 真祖の吸血姫

年 だいたい40億年ぐらい(この小説内のみの設定)

容姿 普段は短髪の方、有事や大事な場面は姫アルクに変わる。

イメージカラー 白、金

固有結界 マイブル・ファンタズム 空想具現化 制限なし

細かい設定

幻真が生まれてから、約10億年ぐらい後に生まれる。

幻真が旅に出て言った後、ガイアに至ることができ、ガイアと友人になる。

その後、話していたら「結婚したい」という発言からガイアに幻真を薦められなし崩しに結婚する。

現在、娘を生み11歳になった。

龍と真祖の吸血姫のハーフ

名前 朔夜・G・ブリュンスタッド

性別 女

種族 龍と真祖の吸血姫のハーフ

年 11歳

容姿 モデルは東方の殺人姫。金髪verで

武器 ナイフ

イメージカラー 黒、金

細かい設定

幻真とアルクエイドの子供。

スペック的に色々とズバ抜けていて、龍の弱点や吸血鬼の弱点は無いに等しい。

容姿はアルク寄りで能力は幻真寄りになっている。

各属性の魔力攻撃+『時』、『空間』が使える。

こんな感じです。また、新しく増えたらそのつど追加します。

今日から、高校二年生?! (前書き)

疲れたよ・・・パトラッシュ

今日から、高校二年生?!

〔幻真side〕

俺は今、『私立駒王学園』の職員室にいる。

・・・どうしてこうなった?

思い返すとこの原因を作ったのはガイアだったな。

数日前・・・

俺は朝食を作った。

基本的に俺が家事全般を受け持ってる。

まあ、苦じゃないし、楽しいしな。

「おい、二人とも起きろー。朝ごはん出来たぞ。」

「うーん、あと三日待って。」

「寝すぎだろ。」

「・・・ん、後五分。」

「朔夜も起きろ。」

そんなやり取りが毎朝続く。

「・・・いただきます」「」

それでも、ちゃんと食べる二人。

抜いてしまうと、調子が悪いらしい。

「・・・ごちそうさま」「」

そこに間延びした声が登場。

『幻真は居るかい?』

「なんだ、ガイア?」

『幻真にお知らせがあつてね。』

「俺に知らせ？」

『そう、近くに“学校”っていうがあるじゃん？』

「ああ、あるな。」

『そこに編入してもらうから。』

「………は？」

『いやだから、編入だつて。』

「アルクエイド、俺の耳はおかしくなったのか？」

「残念ながら正常よ。」

「朔夜はどう聞こえた？」

「私も編入と聞こえたよ。」

「……マジかよ。」

俺が高校生って色々と問題があるだろ。

『もう手続きとかはこつちで済ませといたから。』

「手際がいいツスねー（棒読み）」

『ちょちよいとやりました。』

「威張んな、阿呆。」

ということがあつたのだ。

「……ということで、編入おめでとう。」

「………」

「幻真君？」

「ああ、はい。すみません。」

「大丈夫？最初は慣れないと思うけど、頑張つてね。」

「わざわざ、有難うございます。」

「じゃ、キミが編入するクラスまで案内するから。」

「はい。」

あー、本当に編入するとは思わなかった。

（幻真side out）

ガラッ・・

「SHRを始めるから、席につけ〜」
ぞろぞろと席に着いていく。

「今日は・・・先生!」・・・なんだ?」

「このクラスに編入生が来るってのは本当ですか?」

「情報が早すぎるだろ。まあ、本当だ。」

それを聞いて、男子は美少女だと想像し、女子は美男子を想像する。

「待たせるのも悪いから、入ってもらおう。・・・入ってこい!」

ガラッ・・・

俺は呼ばれたので中に入り、先生の横に立った。

「自己紹介を頼む。」

「はい。・・・幻真・G・ブリュンスタッドだ。新参者だがよろしく頼む。」

「・・・きゃあああああああ!!」・・・」

「・・・ケッ!!」・・・」

女子には友好的だったが男子には悪かったらしい。

「カッコイイ!!」

「ワイルド!!」

「しかも、イケメン!!」

「・・・最っ高!!」・・・」

そいつはどうも。

その後、質問タイムとなったが、一人の女子が質問してきた。

「幻真君の髪はどうなってるんですか？」

「ああ、これね。遺伝子の問題で中学二年のときから、こんな感じになったんだよ。」

「そうなんですか。」

「こんなものだな。まだ聞きたい奴は休みの時間を利用するなどして聞け。幻真、お前の席は窓側の一番後ろだ。」

「了解です。」

「それじゃ、授業を始める。」

授業中・・・。

休み時間・・・

授業が終わって、休み時間になったとたん、女子全員が質問してきた。中には他のクラスの女子もいた。質問の連発が凄まじい。

「どこに住んでるの？」とか

「好きな物はなに？」とか

「得意なものはなに？」とかだった。

皆好きだね。こういうものが。

そして、再び授業が始まった。

終わった後の光景が浮かんで見えることに溜息がでた。

全部の授業が終わり、自宅に帰ろうとしたとき、三年の女性の先輩に呼び出された。

呼び出し人はこの学園の二大お姉様と呼ばれているらしい。

名前は姫島 朱乃。

「こちらに編入生の幻真・G・ブリュンスタッドという方がいらっ
しゃいますか？」

「ん？・・・ああ、俺だが。」

「お時間よろしいですか？」

「・・・ああ。（・・・彼女、悪魔と・・・堕天使？の力の波動を感
じるな。）」

そのまま、クラスを出ていった。

後日、色々な噂が生まれたらしい。

「・・・何故、先輩は俺を呼び出したんですか？」

「・・・ついてくれば分かりますよ。」

「理由もなしに着いていくほどバカじゃないんで、理由を言えない
なら、帰っていいですか？」

「理由ですか・・・。簡単に申しますと、我が主が会いたいとい
うことですな。」

「まあ、ついていこうかね。」

そこから数分歩き、辿り着いた場所は旧校舎だった。

「ここに居ます。・・・どうぞ。」

「失礼します。」

入ってみると外のような古びた感じとは全く感じられず、むしろ新
しく感じた。

そこに“紅”の髪をした女性が優雅に座って待っていた。

「私はリアス・グレモリー（・・・）。オカルト研究会の部長
を務めているわ。」

（幻真side out）

くリアスsideく

今日この学園に編入生が入った。

学年は二年、あの子と同じ学年で同じクラスらしい。

あの子の方も大切だけど、今はこっちの方が重要ね。

あの“幻真・G・ブリュンスタッド”は見た目は人間に見えるが、
なにかがおかしい。

「・・・ちょっと、アプローチをかけてみましょうか。・・・朱乃」
「分かりました。」

そう言った後、朱乃は校舎の方に向かって行った。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか。」

その数十分後彼は朱乃に連れられてやってきた。

「私はリアス・グレモリー（・・・）。オカルト研究会の部長
を務めているわ。」

「・・・どうも。幻真・G・ブリュンスタッドです。」

「単刀直入に聞いわ。・・・貴方、何者？」

「・・・人間ですが？」

「嘘ね。人間らしく見えるけど、どこかおかしいわ。」

「・・・じゃあ、ちょっと変わった人間で。」

「ふざけないでくれる？」

「要件がそれだけなら帰りたいんですが・・・」

「・・・ええ。もう帰っていいわよ。呼び止めてしまってごめんな
さいね。」

「いえいえ。・・・ああ、まあ、なんとかお礼にいいことを教
えますよ。」

「何かしら？」

「この街に『はぐれ悪魔』と墮天使が四人、あと『はぐれ悪魔払い』

が数人程この街にいますよ。」

「・・・どこで知ったのかしら、そんな情報。」

「神秘性を真似て言うならば、『俺はなんでも知っている』と言いましようか。・・・では、失礼。」

私たちでも一片のみの情報しか知らないハズだったのに彼は細かく詳しく知っていた。

「朱乃、彼・・・本当に何者なんでしょうね？」

「さあ？・・・ですが、なんとなくですが近いうちに正体がかかる気がします。」

彼から持たされた情報を確認するために、私は実家の方に連絡を入れた。

＼リアス side out＼

今日から、高校二年生?!（後書き）

とうとうリアスたちに出てきました!

イッセーがレイナーレに殺されかけるのは都合によりカットしました。

それと、ガイアは幻真達が結婚してからイタズラ好きになり、アルクエイドは砕けた形となりました。

さて、次はアルクをどうしようかな・・・。

来ちゃった・・・orz（前書き）

章がありましたが、タイトルが微妙だったので止めました。
思いついたらまたやります。

来ちゃった・・・orz

＼幻真side＼

リアス・グレモリーの尋問（？）から帰ってきて、堕天使の動向を頭の片隅に入れながら、その日は寝た。

次の日、いつもどおりに朝早く起きて、二人の朝食を創っていた。珍しいことに今日はアルクが一人で起きてきた。

「珍しいな、アルクが一人で起きるなんて」

「私もやるときはやる女よ」

「はいはい。あとちょっと待っててくれ」

「おはよ～～」

「はい、お早う朔夜。顔洗って来な」

「うん、分かった～～」

間延びした声で眠たそうに洗面所に向かった。

「さて、出来たし先に食べていいか？」

「学校だっけ？」

「ああ、間に合わなくなる」

「いいわよ」

「済まないな」

先に一人で食べる幻真。

そして、食事が終わる直前に朔夜が着替え終わってリビングに来た。

「あれ、父さん。もう行くの？」

「ああ、ゴメンな。一緒に居れなくて」

「大丈夫だよ」

朔夜は笑顔で答えた。

そんな朔夜の表情を見た幻真は頭を撫でてやった。

アルクエイドはそのやり取りを見て、自分もと言いだした。

「幻真、私にもなにかやって」

「何かって何をだよ？」

「なんでもいいから」

「……じゃ、これで（チュ）？」

「んんっ?!」

同じことをやっても満足しないのは分かっているため、ディープキスだが短めにやった。

「……これでいいか？」

「うん。満足！」

「いつてらっしゃい、父さん」

二人に見送られながら、俺は学校に向かった。

〈幻真side out〉

〈アルクエイドside〉

幻真を見送った後、二人はリビングでくつろいでいた。

「いつちゃったね」

「暇ね……。いいこと思いついたわ、ガイア？」

アルクエイドはなにやら思いついたみたいで、その協力としてガイアを呼び寄せた。

『はいはい、なにかな？』

「あのね、……なんだけど」

『ふんふん、……いいね。その考え、手を貸すよ』

「楽しみだわ」

二人で練っている悪巧みに朔夜は終始、首を傾げていた。

〈アルクエイドside out〉

＼幻真side＼

学校に行く途中の通学路では大いに目立ってる俺。
なにせ、服装が服装だからなあ。

本来なら制服だが、俺は何故か特別措置としてスーツで通学しても
いいと連絡が着た。

なんでも、あの学校の生徒会長が許可をくれたようだ。

しかし、生徒会長の名前をどこかで聞いたことがあるんだが、どこ
だっけ？

まあ、その内に思い出すだろ。

その事を考えるのを止めた時に、向こう側から“紅”色の髪をした
女性が登場した。

＼幻真side out＼

＼イツセーside＼

俺は朝から教室で、悪友二人とエロい話で盛り上がっていた。

教室の窓から校庭を見ると、通学中の全生徒が二人の姿を見て、足
を止めていた。

右からはほぼ黒で統一されたスーツの幻真が、左からは紅の髪を優
雅に揺らすリアス・グレモリー先輩が来ていた。

そんな二人が校庭に入ると、男子女子生徒は道を開けるように開い
た。

二人はそんなことに気を取られずに、平然と進む。

その時、彼女と眼が会った。

俺の勘違いと思ったが、彼女の眼は確実に俺を捉えていた。

彼女と接点は一つも無いハズ……。

なのに何故、見つめられたのか分からなかった。

もう一度見ようとしたが、すでに彼女の姿は無かった。

＼幻真side＼

「……であるからして……」

キンコンカンコン

「鐘がなったか、今日はここまで」

「起立――」

「礼――」

「――有難うございました」――

授業が終わり、今は昼休憩となった。

そして、いつものようにクラスの女子は俺の元に殺到してくる。

理由は簡単……

「――幻真君！ お昼一緒に食べよ？」――

「悪いが、今日は一人で食いたいんだ。また今度誘ってくれ。」

そう断り、屋上に向かう俺。

廊下に待機していた、他クラスの女子が数人付いてくるが無視した。屋上に着いた俺は、のんびりと昼飯を食べー眠り着こうとしたとき校庭の方から、黄色い歓声が上がったので何事だと思って、下を覗いた。

「！？」

オウフ……なんでアイツがココに居るんだよ？！

俺は急いで校庭に向かった。

＼幻真side out＼

＼アルクside＼

幻真が居る学校に向かい、辿り着いた。

「へー、ここが幻真の通ってる学校か――」

そんなこと言いながら、堂々と校庭に侵入するアルク。

侵入しながら複数の存在を感じ取った。

「（あら、この学園に悪魔が複数いるわね……）」
そこで、ようやく自分が学校中の生徒（主に男子生徒）に注目されていることに気付いた。

だが、アルクにとつてはどうでもよく幻真を探した。
そこにあるクラスの男子が叫んだ。

「うおー！？ スゲエ金髪美人が校庭に居るぜ？！」

「「「なにiiiiiiiiiiiiiiii？！」」」

「うおっ！ スゲエ」

「なんでこんなところに居るんだ？」

「誰かの彼女か？」

と色々な反応を示すとあるクラス男子生徒たち。

そこにクラスメイトの幻真が突如現れた謎の美人に駆け寄っていた。

「あつ！ お、おい見ろ！！ 幻真が金髪美人に近づいていくぞ？」

「「「なんだつてええええええええ？！」」」

クラスに響き渡る二度目の驚愕の声。

「あ、幻真。ヤッホー」

「なんでここに居るんだよ、オマエは！？」

「だってえー、一度幻真が通学している“学校”という所に行ってみたかったんだもん」

「夜でもいいだろうが！」

そんなやり取りの中、生徒会長がやって来た。

「幻真君、こちらの女性は誰ですか？」

「ああ、生徒会長。こいつは俺のt……妻です」……アツΣ（
。D ;）」

「……本当ですか？」

さすがの会長もこれには驚き、事態が読み込めないでいた。

「……マジです」

「……年はいくつですか？」

「へ？」

「年はいくつかと聞いています」

「18歳よ」

「では、転入の手続きをやりますのでこちらに来てください」

「なにそれこわい」

「着いて来てください」

有無を言わせない圧迫力に負け、おとなしく着いていく二人。

「（これは面白そうね）」

この事態に動じていないアルクは自然と笑みがこぼれていた。

後の二人の内、一人はこの事態をどう收拾付けようかと頭をフル回転させており、もう一人は「（どーすんだ、これ？）」と頭を抱えながら、今後の事態の対応を考えるハメとなった。

（アルクside out）

この騒動をきっかけにアルクは『私立駒王学園』に転入という形で
幻真と通うこととなる。

来ちゃった・・・orz（後書き）

これから、アルクは話を進むにつれ、あーぱー化していきます。

夫婦そろって登校

く夫婦 side

昨日、生徒会長が転入手続きをしてしまった為、アルクも学校に通うこととなりました。

「アルク、準備はいいか？」

「ちよつと、待って」

「母さんも行くことになったの？」

後ろで朔夜がパジャマ姿で訪ねてきた。

「そうなんだよ、昨日学校に堂々と来たらなし崩しに決まっちゃってね。困ってるんだ」

「そうなんだ」

「朔夜には寂しい思いをさせて済まないな」

「私は大丈夫だよ、ガイア伯父ちゃんやたまに訪ねてくる大蛇とかが居るし、能力制御の練習もしなくちゃならないし」

「そうか、頑張れ」

そんなちよつと愚痴ってたら、アルクの準備が出来たようだ。

「出来たー！！」

「じゃ、行ってくるな」

「行ってくるねー！」

「いってらっしゃい、父さん、母さん」

そう言って二人は学校に向かった。

学校に向かう間では、同じくして歩いてる生徒たちが足を止めて、こちらを見ていた。

「皆、こつちを見てるわね」

「当り前だ、編入した奴が昨日の騒ぎを起こした女性と手を組んで歩いてるんだぞ？ 誰もが見るに決まってるだろう」

ああ、気が重い。

学校に着いたら、もつと重くなるのか。

やだなあ・・・。

そんなこんなで学校に着いた俺たちは、職員室に向かいアルクがどのクラスか聞くと俺と同じクラスらしい。

どうやら、生徒会長が計らってくれたようだ。

「全く、連日で転入生を紹介するとは・・・。しかも、お前ら結婚してるんだろ？」

「あー、まあ」

「それ、絶対アイツ等の前では言わない方がいいぞ？ 後がめんどくさいから」

「そりゃーもう、肝に銘じてますよ」

「ところで、駆け落ちとかだったのか？」

「いえ、許嫁に近い感じです」

「なるほどなあ、大変そうだな」

「まあ、自分で選んでしまった道なのでやるしかないです」

「そうか。そんじゃ、準備はいいな？」

ガラッ・・・

「お前ら席につけ。SHRを始めるぞ」

「先生！」

「なんだ？」

「幻真はどうしたんですか？」

「あー、幻真についてはすぐに分かるぞ。——さて、今日も転入生が居る。入ってこい」

合図があつたので、アルクが最初に入り、続いて俺が入った。

「（頼むから、メンドイ状況は作らないでくれよ・・・）」

（夫婦 side out）

（イッセー）

昨日の騒動のあと、幻真は頭を抱えながら帰っていったが何があつたんだろうな。

そんなことを木端微塵に壊すほどの事件が目の前に現れた。なんと、昨日の美女が幻真と一緒に手を組んで歩いていた。しかも、美女の方は若干、甘えているようにも見える。

「よーっす、イッセー」

「よう、イッセー」

こんな状況を知らない悪友二人が挨拶をしてきた。

「おう、松田に元浜。ところで目の前の光景が夢だと思いたいんだが・・・」

「「目の前の光景？・・・なん・・・だと?!」」

お前らもそういう反応ですか。

まあ、そうなるよな。

「おい、イッセー。これは夢か？」

「俺も夢だと思ったが現実だ、松田」

「夢なら覚めて欲しい」

「現実を見る、元浜」

現実逃避している二人を元に戻すのに手間がかかったが戻すことは出来た。

「「「なんであの二人が手を組んで登校してるんだ!?!」」」

「ま、まさか!?!」

「どうした、元浜?」

「あの二人、付きあってるんじゃないだろうか?」

「そんなバカな!」

「・・・いや、あり得るかもしれないぞ? あの様子を見る限りメ
チャクチャ親しそудし」

「学校に着いたら、幻真に聞いてみるか」

「「そうだな」」

そんな憶測を立てていた俺たちだが、その予測を右斜めに飛んだ方
向の答えが返って来た。

学校に着いた俺たちはクラスに行き、幻真を探したが見当たらず鐘
が鳴り先生が入って来た。

「席に着け、SHR始めるぞ」

そう言った先生は皆を席に着かせた。

クラスの一人が質問した。

「先生!」

「なんだ?」

「幻真はどうしたんですか?」

「すぐに会える。取り敢えず入ってこい」

そう言った後、クラスに入って来たのは昨日の騒動を引き起こした
謎の金髪美人と幻真だった。

「今日から、このクラスに転入するアルクエイド・G・プリュンス
タッドさんだ。皆仲良くな」
クラスに沈黙が出来る。

「「「「「・・・・・・」」」」」
状況を読みこめたのか全員が同じ声を発した。

[illegible]

夫婦 sides

クラス全員が驚愕した声を上げた。

まあ、そうなるよな。

「アルク」

「なに？」

「余計なこと言うなよ？」

「分かってるわよ」

本人は任せてと言っているが、俺は不安でしようがない。

「えーと、アルクエイドさん？」

「なに？」

「あの幻真君とはどんな関係で？」

「……妻よ」

ちよ？！

「えっ（Ｄ）。。！？」

$$\neg \cdot \cdot \cdot \text{ or } \perp$$

「やれやれ」

「余計なこと言うな」って言った結果がコレだよ!!!

「今、なに言っただか聞こえなかったのでもう一度言ってくれませんか？」

「だから、私は幻真の“妻”だって言ったのよ」

「「「.....」」」

皆が黙り、その後全員が俺の方を見た。

「あー、うん。言いたいことは凄く分かるけど、事実だ」

答えるしかなかった俺。

だって、凄い視線が痛いんだよ。

「「「そんなバカなーーーーー!?」」」

「おい、幻真！」

「なんだ、兵藤？」

「実は嘘だろ？」

「大マジです」

「嘘だと言ってくれ！」

「いや、そんな血の涙を流す勢いで言われても事実だから」

その後の色々質問が滝の如く殺到して、実質一時間目の授業は思いっきり潰れた。

学校が終わった時には学校中に情報が行き届いたようだ。

さつきから、コツチをジロジロ見てくる奴らが増えてきている気がするんだよね。

そして、兵藤も誰かを待っているようだった。

「兵藤、誰か待ってるのか？」

「幻真か。先日グレモリー先輩に「明日、学校が終わったら使いを出すから待っててちょうだい」って言われてな。それで待っているんだ。」

「なるほど、兵藤は心当たりはあるのか？」

「いや、無いんだけど、あつたような気がするんだよ」

「なんとまあ、曖昧な」

「それと、兵藤じゃなくてイツセーって読んでいいぞ」

「分かった。「幻真」?」・・・なんだ、アルク？」

「はやく帰りましょうよ。人が集まってきたるわよ?」

「うわぁ・・・」

見てみると廊下が噂を確認しようとヤジ馬がたくさんいる。

・特に女子が多い。

そこに、廊下の方から黄色い歓声が上がった。

「きゃ〜、木場君?」

「や、どうも」

「「なんか用か?」」

俺とイツセーは同時に言う。

そのときアルクが乗りかかりながら、囁く。

「（幻真、この子も悪魔よ）」

「（わかつてるさ）」

「（この子の主の使いって奴じゃない?）」

「（だろうよ）」

遠くから見ると、じゃれあつてるように見えるためか廊下の女子たちは顔を赤く染めている者がちらほらといた。

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ」

「・・・OK、OK ついていこう」

「それと、幻真君とアルクエイドさんにも来て欲しいと言ってるんだけど、いいかな?」

「「別に構わん（構わないわ）」」

「ありがとう」

そこに女子の悲鳴が響き渡る。

「木場君と幻真君が兵藤と一緒に歩くなんて」

「木場×兵藤なんてカップリング許せないわ!」

うわぁ・・・。

ここには腐女子しかいねえのかよ。
題材にされている木場とイツセー……」愁傷さま。

「いや、幻真×兵藤も嫌よ！」
俺もさりげなく巻き込まれてるし。
イツセーはげっそりしていた。
分かるぞ、その気持ち。

「イツセー、救われないな……。オレも、オマエも（題材にされている意味で）」

「幻真、まともじゃないよな……。お互いにさ（クラスの女子的な意味で）」

お互い、ため息がついた。

「それじゃあ、着いて来て」

木場が先頭となり歩くのを俺たちはついていった。

（夫婦 side out）

夫婦そろって登校（後書き）

顔文字は時折出しますので、許してください。
アルクも普段通りの姿で登校です。

オカルト研究部（前書き）

溜めてた分を一気に投稿

オカルト研究部

くリアスsideく

祐斗を使いに出させ、私は気持ちを切り替えるためにシャワーを浴びることにした。

会長による情報では、二人は「夫婦である」と聞いたがその他にも気になることを言っていた。

「アルクエイドと呼ばれている女性もなにかある」と。

謎の二人がどうしても気になってるため、あの子を呼ぶついでに居たら、連れてきてもらうことを祐斗に頼んだ。

「さて、ようやく腹割って話せるわね」

そのためにもシャワーで色々と流さなきゃ。

くリアスside outく

くイツセーsideく

木場に着いていき、辿り着いた場所は校舎の裏手にある、旧校舎だった。

その中に入り、二階に上がっていく。

旧校舎だが、二階は綺麗だった。塵や埃がない、掃除はマメにやっているようだった。

「ここだよ」

「そう言っつて、木場はある教室の前で止まった」

俺は上を見上げたらプレートにはこう書かれていた。

“オカルト研究部”

と、そう書かれているプレート見て、吃驚した。
先輩がそんな部に入っているとは……。

「部長、連れてきました。幻真君とアルクエイドさんも一緒です。」
『そう。入ってきてちょうだい』
そう奥から聞こえて、中に入る俺達。

中には床、天井に壁などと知らない文字や魔法陣が描かれていた。
さらに、ソファーや本棚と色々新しいモノが置かれている。
そのソファーに一人小さな女の子が座っていた。
あの子を俺は知ってるぞ！

一年生の塔城小猫ちゃんだ！
知らない人から見れば、小学生として見えなくはないと言われている。

それにいつもすごい眠たげそうな表情をしているのだ。
どうやら、こっちに気付いたようだ。
木場が紹介してくれた。

「こちら、兵藤一誠くん、幻真君とアルクエイドさん」
「あ、どうも」

こちらを確認した後軽く頭を下げたので、こっちも下げたがそれを
確認すると黙々と手に持っている羊羹を食べ始めた。

シャアアア・・

奥から水の流れる音が聞こえてきた。

「部長、これを」

「ありがとう、朱乃」

「ごめんなさいね、ちょっと、汗を流したかったから」

軽く苦笑しながら、謝って来た。

この部屋、シャワーなんてあるのかよ？！

さらに驚いたことにその後ろにいる女性を見て、吃驚した。

黒髪のポニーテールで、大和撫子を想像させる我が高のもう一人のアイドル、姫島朱乃先輩じゃないか！！

“二大お姉様”と呼ばれる女性であり、男子女子の憧れの的！

「あらあら。初めまして、私、姫島朱乃と申します。以後、お見知りおきを」

丁寧に挨拶されたため、声の上擦って返事をしてしまった。

「こ、ここれはどうも、兵藤一誠です。こちらこそ、よ、よろしくをお願いします。」

「・・・イッセー、緊張のしすぎだろ」

「うるせえ！ 緊張するに決まってるだろ！ “二大お姉様”と呼ばれる人が挨拶して来たんだぞ？！ 幻真は緊張しないのかよ！？」

「俺は別に？ しかし“二大お姉様”ねえ。呼ばれる感想はどうだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で返答する姫島先輩。

「コイツは嫌われたものだ」

その一部始終を見ていた、グレモリー先輩は「うん」と言って確認した。

「これで、全員揃ったわね。兵藤一誠くん。いや、イツセー」

「は、はい」

「私たち、オカルト研究部はあなたを歓迎するわ」

「え、あ、はい」

「——悪魔としてね」

父さん、母さん、何かが起こりそうです。

「イツセー side out」

「リアス side」

「単刀直入に言っわ、私たち悪魔なの」

そう言っても、信じられないっていう顔をしていた。

まあ、当たり前ね。

つい、この間まで人間だと思っていた人がいきなり「実は悪魔です」と言っても信じてはもらえないのが当たり前だ。

「信じられないのは分かるわ、でも事実なの。実際に、貴方は昨夜襲われたとき、男の黒い羽根を見たでしょう？」

——確かに見ましたが・・・

「アレは堕天使って言ってね、元は天使だったんだけど、邪な感情を持っていた為、墜ちてしまった存在。——太古から堕天使と悪魔との間では争っていたの、だけど、そこに神の命を受けた天使たちが乱入して三すくみの大戦争が起きてしまったのよ」

「いやいやいや！ ちょ、ちょっと待ってください！ 普通の男子高校生には難易度の高い話ですよ！！」

やっぱり信じられないか・・・。

しょうがない、言いたくは無いです——。

「――天野夕麻」

「そういうのは止めてくれませんか？　腹が立つんで」

「コレは堕天使よ、朱乃」

「はい」と言つてイツセーに一枚の写真を渡す。

「これ、見える？」

「はい」

「後ろに黒い羽根が生えてるでしょ？　コレは堕天使の証よ」

「そんな・・・バカな・・・！！」

「事実だぞ？」

端の方で黙っていた、幻真君が突如口をはさんだ。

「何故、知っている？」

「俺やアルクは知つてて当然なんだよ」

「“当然”とはどういうことかしら、“龍人”の幻真君？」

「・・・へえ、気付いたんだ」

「私のお兄様に確認したら、龍人ということが分かったわ」

「先輩、その“龍人”って？」

「“龍人”ってのは、元は龍なんだけど、長い年月を掛けることによって、人に変わることが出来る龍の事をそう呼ぶ事になっているのよ。」

それと同時にそれは『危険』ということを示す言葉となり、先程言つたように「長い年月」ということは見た目はどうであれ、力などはズバ抜けて高いの。実際に戦うには上級悪魔が三人居て、ようやく対等なレベルになるって言われてのよ」

「じゃあ、幻真は・・・」

「そう彼は人じゃない。・・・正直私は“龍人”特に彼が嫌いなんだよ。これは女性悪魔なら誰でも言えることね」

「何故ですか？」

素朴な疑問をぶつけてくる、イツセー。

そこに本人から理由を言ってきた。

「簡単だ、イツセー。俺が昔、女性悪魔に対してかなり酷いことをしたからに決まってるだろ？」

「本当に最低よね、貴方」

「お褒めに頂き、恐悦至極であります」

そう茶化すとイツセーを除くメンバーが殺気を僅かに出していた。

「これぐらいで殺気を出すなよ、程度がしれるぞ？」

「……」

抑えなきゃ、話を続けないと。

急いで、怒りを鎮めて、話しの再開をしようとしたが、それを幻真君に取られてしまった。

「リアス side」

「幻真 side」

話しがいつまでたっても再開されないの、俺が話すことにした。

「んでだ。イツセーが殺されかけた理由がな、それはお前の体の中にある“特殊な物”が原因だ」

「特殊な物ってなんだ？」

「——“神器”」

「“神器”ってなんだ？」

「コイツは特定の人間に宿る、規格外な力だ。基本的に歴史で名を残している人物はコレの保持者だ。と言っても、大きさは様々でな。人間社会規模ぐらいの力から、天使に悪魔、堕天使といったモノを簡単に屠れるモノまで色々ある。今回、イツセーに宿ったのは“神器”の中でも結構上位の方に位置するモノだ。」

と詳しく噛み砕いて説明した。

ぶっちゃけ、俺も多少は関わったからな“神器”の開発に。

「イツセー、お前にとって一番強い存在を言ってみろ」

「え、えっと、ドラグ・ソボールの空孫悟かな？」

「よし、それを頭の中で強く想像して、真似しろ」

「ここですか？」

「強くやれよ？ 軽いと発現しない」

まさかこの年でドラゴン波を真似るとは・・・辛いモノだ。

「・・・うおおおおお！ ドラゴン波ああああ！」

そう力強く叫んだ後、カツ！とイツセーの左手が光りに包まれた後、出てきたのは赤い籠手だった。

オイオイ、コイツは予想外だ。

よりによつて、あの籠手かよ。

当のイツセーは――

「なんじゃ、こりゃあああああ！？」

メツチャ驚いてる。

「発現したか、一度発現すれば、どんな場所でも発動できるぞ。ただ、お前の場合、発動するたびに先程のイメージを思い浮かべなければならぬけどな」

「“お前”の場合ってことは、幻真も持ってるのかよ？」

「ああ、持ってるぞ。」

「・・・おかしいわ。セイクリッド・ギア“神器”は龍には宿らないハズ」

「実際に見せてやろうか？」

「・・・お願い」

「アルク、ちよつと悪いな」

話しが始まってからずっと、俺の膝の上に乗っていたアルクをどかし、立ち上がった。

「コレは触れない方がいいぞ」

「敵を穿て—— “刺^ゲし穿^イつ死棘^{ボルク}の槍”」

「本当に持っているなんて・・・」

「刃には触れるなよ？ 傷を癒さない呪いが掛かっているんだからな」

そう言ったら、皆近づかなくなった。

「何かの特殊能力があるのかい？」

木場がいち早く聞いてきた。

「まあ、あるがこれ以上言ったらこの武器の意味が無いから、言えないな。ただ、コイツを使う時は“必ず”殺すときのみだ。それだけは言うておく」

「必ず殺す・・・か」

「まあ、こんなものだな、神器については」

そうして、再び黙りソファーに座ったらアルクが乗っかって来た。

「幻真side out」

「リアスside」

役目を終えたのか、ソファーに戻っていく幻真。

「それで、貴方が墮天使に殺されかけたときにポケットにこんなチラシが入っていたから私が呼ばれたのよ」

取り出したのは『あなたの願い、叶えます！』と書かれていて、魔法陣が書かれていた。

「本来なら、副部長の朱乃とかが呼ばれるんだけど、想いが強かつ

たのか私が呼ばれてね。そこで貴方を発見してイツセーが神器保持者だと分かり、墮天使に殺された。という仮説を立てて、貴方を救うことにした」

言い終わると同時に背中から羽根を出した。

墮天使の場合だと、天使の羽根を黒くした感じである。

「イツセーにも生えているわよ」

そう言った後、イツセーにも小さな羽根が生えた。

「これが、貴方の身に起こった顛末よ、理解した？」

「はい」

「それじゃ、改めて挨拶を私がイツセー達の主であるリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、イツセー」

そこから次々と挨拶していく。

「僕は言わなくても分かるけど、二年生の木場祐斗だ。まあ悪魔だよ」

「私は一年生の塔城小猫です。．．．よろしくお願いします。．．．悪魔です」

「私がこの部の副部長をやっている三年生の姫島朱乃です。．．．悪魔ですわ」

「出来れば、幻真君たちも紹介してくれると有難いんだけど．．．」

「アルク、紹介だってよ」

「うーん？」

「俺からやるか、二年で“龍人”の幻真・G・ブリュンスタッドだ。アルクの夫だ」

堂々と言い放った。

「私も二年の“吸血姫”のアルクエイド・G・ブリュンスタッドよ。幻真の妻よ」

「まあ、詳しいことはグレモリー先輩の兄に聞けばいい、多分教えてくれるよ」

そういつて、こっちを見てニヤついていた。

やっぱり、コイツは嫌いだわ。

「もう、終わったなら帰らせてもらうぞ？」

「どうぞ。というか、早く帰ってください」

「言われなくても分かってるよ」

そう言ったときには、幻真とアルクエイドさんが消えていた。

（リアス side out）

オカルト研究部（後書き）

幻真は現在、女性悪魔たちに相当嫌われています。
あんなことをすればねえ、嫌われて当然です。

はぐれ悪魔払い（前書き）

ぱっぱと話を進めることにしました。
原作一巻はね！

はぐれ悪魔払い

〈幻真side〉

あの日からイツセーは悪魔の仕事をしているらしい。
頑張れ、青年。

ここ最近、——神器。

しかも癒しの力の中でも特異な部類の『トワイライトヒーリング聖母の微笑』を持つ少女がこの街に来たらしい。

アレは、人間だけでなく保持者が「助けたい」と念じれば、神だろ
うが悪魔だろうが治療できるシロモノだからな。

治す者の正体を知らずに使えば、とんでもないことになる。

多分、彼女もその一人なんだろうな……。

その者はどうやらイツセーと出会ったらしい、イツセーも辛い思いをするな。

今現在夜なんだが……。

血の匂いが濃くなった、俺は『空間』の力で調べてみると、はぐれ悪魔の存在が強くなったのが、イツセー達にも分かったらしい。
今、棲家に行つて、討伐している。

「木場は『騎士^{ナイト}』、小猫は『戦車^{ルーク}』ね、最後に朱乃が『女王^{クイーン}』か。
なかなかバランスがいいじゃないか、リアス。」

聞こえない事も分かつてるのに彼女に呟く俺。

「……ところでなんの用かな？ 堕天使ドーナシックとその他二人」

「……気付いていたか」

「この街に入る前から気付いていたさ」

「そんなことが一介の龍人に出来る筈ない！」

「いや、確か、出来る龍人が一人居たと聞いたことがある」

「おや？ 俺も有名になったもんだ。で、要件とは？」

「今回、こちらの計画に介入しないでもらいたい」

「介入はしないさ。ただし、お前らの元に居る『はぐれ悪魔^{エクソシスト}払い』
がこつちに手出ししなければの話しだがな」

「重々承知した」

「次会う時が無いこと祈ってやるよ」

そう言ったら三人は翼をはばたかせ、本拠地に帰っていった。

「やれやれ、面倒なことになりそうだ」

頭を？きながら、妻と可愛い娘の元に戻っていった。

〈幻真side out〉

〈イツセーside〉

はぐれ悪魔から一夜明け、自分の駒が『兵士^{ポーン}』だと分かり、落胆が
デカかった。

上級悪魔になるには道が遠いな・・・。

考えれば考えるほど鬱になっていく、ダメだ駄目だ！

何か目標を立てよう！

取り敢えず、魔方阵からジャンプ出来ることから始めよう！

・・・うん。なんかやる気が出てきた。

「よっしゃー！ やってやるぜー！！！」

夜中遅くに叫んで、気合を入れた俺は呼んでくれた場所へ走る。

呼ばれた場所は、一軒家だった。

ブザーを鳴らす前に鍵が開いてることに気がついた俺は中に入る瞬間、全身が強張った。

「（なんだ、これ？ 凄い嫌な感じだ・・・）」

中の気配は何も感じられないのに足取りが重く感じる。

ゆっくりと進んでいく俺は家の中を見てみると、そこは普通と変わらない、一軒家だった。

リビングがあつて、テレビ、ソファなどが置いてあつた。

だが、一か所だけ異質な部屋があつた。

「な、なんだ、これ・・・？」

そこには太い釘のようなもので、男に刺さっており、至る所から切り傷があり血が今も出続けていた。

「おええ」

この遺体、酷い死に方だ。

どうやったら、ここまでこんなことが出来る？

その時、後ろからなんとも言えない感じが飛んで来たので無意識のうちに避けた。

「くっ！」

「あらら？ 避けれちった？」

「誰だ、お前？」

「この格好見りゃ、分かるでしょ？ バーカ！」

「・・・神父」

「そういうお前は悪魔だよな？ 取り敢えず、悪魔は俺の悦楽の為に死んでくれよ！ ギャハハハハ！！」

ダッ！

俺は部長の言いつけを守ることにした。

『神父、もしくは堕天使を見たら、逃げなさい』

部長の言うとおりだった。

コレはヤバイ。

言葉で表現できないが、マジでヤバイ。

道路に出て、走って逃げていたが突如、足に痛みが走った。

「ぐあああ!!」

撃たれた?

銃声音はしなかったのに。

「撃たれたことが分からないみたいだねえ? そりゃあ、そーだろ。この武器は光の弾丸を放つエクソシスト特製の被魔弾はチヨー気持ちイイだろお?」

「・・・やめてください!」

そこに一人の女性が割り込んだ。

「・・・アーシア?」

「・・・イツセーさん?」

「なに? なに? キミたち知り合い? ちよーウケル。悪魔とシスターは受け入れることのできない存在なんだよ!!」

言い終わると同時にアーシアを剣の柄で殴り倒し、俺に止めを刺そうとしたとき、地面に青白い紋章が光った。

中から出てきたのは木場、小猫ちゃん、そして朱乃さんだった。

「悪魔の団体さんかよ、ヒヤハ!」

剣を朱乃さんに振り降ろす瞬間、木場の剣とぶつかった。

ガキーン!

「おっと、そうはいかないよ」

「うぜえ！」

木場とクソ神父が打ち合っているとき、後ろから部長がやって来た。

「・・・ごめんなさいね、イツセー。まさか『はぐれ悪魔^{エクソシスト}払い』が居たなんて・・・その傷どうしたの？」

「あ、これ、撃たれちゃって・・・」

苦笑いで誤魔化そうとする俺だったが・・・。

「私の可愛い下僕に傷付けるなんて許さないわよ！」
とてつもなくキレていた！

「！？ 部長、近くから堕天使が数名近づいています！ このままではこちらが不利です！」

「祐斗！ 撤退よ！！」

「はい！」

「部長、あの子も！！」

「無理よ、この魔方阵は悪魔しか飛ばせない」

「でも！」

「諦めなさい、イツセー」

そう言われた時にはすでにジャンプしていた。

ジャンプした先には、幻真とアルクエイドさん(?)と抱きかかえられている少女、そして、至る所に伏せている神父共の姿があった。

「あーあ、出会っちゃったか」

めんどくさそうに呟く幻真が居た。

「イツセーside out」

「幻真side」

夜、ふと気が付くと朔夜がいないことに気が付き、アルク聞いてみた。

「アルク、朔夜は？」

「気配を絶つ練習として、この周りを歩いているわよ？」

「大丈夫かな？」

「大丈夫よ、私と幻真の子よ？　そうそう殺s・・・！？」

「・・・アルク」

「幻真、ヤバいわ。朔夜のところに教会の犬どもがたくさん近づいて来てる！」

「先に行つてる、後からついて来い！」

朔夜無事でいてくれ！！

幻真side out

朔夜side

今私は、気配を絶つ練習として家の周りを歩いている。

そんなとき、目の前に神父姿の男たちが道をふさいでいた。

「吸血鬼か？」

「いや、悪魔かもしれん」

「とりあえず、滅することが先決だ」

なにか話し合ったあと、武器を持って私に襲いかかって来た。

「嫌、嫌あああああああ！」

「・・・俺の可愛い娘に手を出してるんじゃないやねえ！！」

神父たちを思いっきり吹き飛ばした父さんの姿が現れた。

「朔夜、大丈夫か！？　どこも怪我してないか！？」

「う、うん。大丈夫」

「怖かったろ？　アルクも今来るから安心しろ」

父さんは私を護るように抱えていた。

父さんの中は暖かいなあ。

「大丈夫か、朔夜？」

そこに母さんも来た。正式の服装である真祖の姿で、しかも髪が長髪になっていた。

「・・・アルク、朔夜を頼む」

「うむ。任された。派手にやっても構わんぞ？」

「朔夜、少し待ってるよ。お前に怖い思いさせたクズどもを半殺しにしてくるから」

「うん」

そう言って父さんは黒い手袋をはめ、前に出た。

「朔夜 side out」

「幻真 side」

「ったくよお、お前らに情報が伝わってるはずだよなあ？」
『手出ししたら容赦しない』って」

「貴様の忠告など知らんわ！！」

「あつそ。じゃ、くたばれ」

ヒュッ！

モノを投げられたと勘違いして防御の態勢をとる神父共。

何も来なかったと勘違いして、攻め込んできた。

「所詮、ハツタリだ。やってしまえ！」

「「「うおおおおおお！！」「」」

「バーカ」

「身動きが取れん！ 貴様、一体何をした？！」

「さっきの行動で俺とお前らの間に至る所にワイヤーを仕掛けた。

あとは勝手に突っ込んで来てくれるお前らを待つだけ・・・お解り

？」

神父共の体の一部にはどこかしらにワイヤーが巻き付いていた。

「よ、よせ！！」

「フハハハハ・・・もう遅い」

神父共は制止の声を上げたが、そんなもの聞こえんなあ？

そこから俺は右、左、上、下と手を振るった。

それに連動してワイヤーが動き、対象物を切り刻んでいく。

ザシュザシュザシュザシュッ！

「塵となれい！！」

最後の攻撃は地面から龍気が神父共が居る一体から湧き上がり、潰されていった。

「こ、こんなこととして許されると思うな！」

生き残った神父はボソツと言う。

「逆だ、ド阿呆。テメエ等が生き残れると思うなよ？」

最後に生き残っていた奴の頭を踏み潰して終えた。

「朔夜、終わったよ」

「父さん！ カッコよかったよ！！」

「それは嬉しいね」

トテトテとこちらに走ってくる朔夜とゆったりと歩いてくるアルク（姫ver）の後ろに魔方陣が描かれ、青白く光った。

そこには傷ついたイッセーと木場、小猫、朱乃そしてリアスが出てきた。

「あーあ、出会っちゃったか」

面倒になったな、これは。

「これは、一体どういうこと？」

リアスがこの光景を見て、素朴な疑問をぶつけてきた。

「どういうこととは？」

「なんで、神父共が瀕死の状態でここに倒れているの？」

「「なんで？」って俺の可愛い娘に手を出したから潰したに決まってるんだろ？」

「・・・娘？」

「朔夜、挨拶してごらん」

「はい。朔夜・G・ブリュンスタッドです。以後よろしく」

「え、ああ、はい。よろしく」

不意を喰らったようだがすぐに表情を元に戻したりリアスは本題に入れたかったようだ。

「・・・この惨状は幻真、貴方がやったの？」

「そうだが・・・それがなにか？」

「貴方、何に手を出したか、分かっている？」

「・・・言いたいことがあるなら、はっきり言ってくれ。回りくどいのは嫌いなんだ」

「なら、言うけど。貴方——殺されるわよ」

「“殺される”か・・・「プ、アハハハハ！」・・・アルクエイド笑うなよ」

「・・・何がおかしいの？」

「だ、だって、幻真が“殺される”って言われるなんて思ってもみなかったから、面白くて・・・アハハハ」

「そんなに笑ってやるなよ、可哀想だろ」

「そうね・・・ププツ」

「不快なんだけど？」

「ほら、アルク、ストップストップ」

「ええ、ゴメンなさいね」

「ま、俺から言えることは一つだな。アイツ等が俺を“殺す”ことなんか天地がひっくりかえっても無理だっていうことだな。というか、逆に殲滅するけどね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リアスは黙る、俺の言っていることが嘘かもしれないと疑っているようだ。

「まあ、その件はこちらには関係ないし、あなた達で片付けてよね。それはそうと、アルクエイドさん・・・なのかしら？」

「うむ。そうだが？」

口調が変わっていることに戸惑う五人。

「あー、アルクはこの姿になると口調変わるから、気にしないでくれ」

「ええ、分かったわ。・・・その姿まさか——“真祖の吸血姫”？」

「よく知っておるな、結構秘匿されているものだが・・・」

「まさか、“真祖”だったとは・・・！」

イツセー以外の四人は驚き、焦る。

その時、抱えられている朔夜が目を擦りだした。

「朔夜、眠くなっちゃったか？」

「・・・・うん」

「じゃ、帰るか。アルク帰るぞ、朔夜が「眠い」って」

「では、帰るか」

「待ちなさい！ 話はまだ終わっていませんわよ？」

「リアス達は、堕天使レイナーレをブツ飛ばせばいい。俺たちは他の諸々を受け持ってる。・・・シンプルだろ？」

「堕天使全体の計画じゃないの!？」

「むしろ、勝手な暴走だよ、これは。・・・一部の堕天使が集まってやっていることだし。では、失礼。——リアス、サーゼクスによろしく言つといてくれ」

「!？　ちょ、ちよつと待ちなさい!!」

リアスが叫んだときには、一瞬でその場から三人とも消えていた。

「部長、幻真たちって一体何者なんですかね？」

「私が聞きたいわ。それに・・・（なんでお兄様の事を知ってるのかしら？）」

謎ばかりが深まるリアス達であつた。

く幻真side outく

はぐれ悪魔払い（後書き）

次はもうイッサー達が教会に殴り込みをかける話の予定です。

そして、フリードのCVは中村悠一さんでお願いします。

BLAZBLUEのハザマの声でフリードをやってもらったら、多分ピッタリだと思うんだ・・・

前哨戦

〈幻真side〉

前の騒動から三日が経ち、堕天使の連中も落ち着いたと思っただろうやら、準備を静かに進めてたらしく、先程イッセーの叫び声が虚空に木霊しているのが聞こえた。

「これは、動くかな・・・」

俺は例によつて、屋根の上に居て、イッセーが居る場所から堕天使が根城にしている教会に目を移した。

そろそろ教会の中にはぐれ悪魔払いの神父が入っている。

「さつさと、この事件を終わらせたいなあ」

「どうしたの？」

「アルクか。いや、堕天使共が今夜動くみたいでな・・・」

「あら、そう」

「バカ堕天使三人の元に行くのがメンドイから行きたくないんだよね」

「でも、啖呵切っちゃったんでしょ？」

「そうなんだよなあ・・・まあ、やるしかないか」

「その意気よ」

「で、アルク何故ココに？」

「朔夜が三日前の襲撃のせいで、寝ることが出来ないから一緒に寝て欲しいって言うてるわ」

「ん、分かった。夕方には行かなきゃならないからそれまでだぞ？」

「朔夜も「分かてる」って」

屋根から降り、朔夜のところにいった。

「朔夜、大丈夫か？」

「うん・・・でも」

「そばで一緒に寝てやるから安心して寝ていいぞ」

「・・・うん。おやすみ・・・zzz」

相当寝られなかったみたいだったな、布団の中に入ってやった瞬間すぐに寝ている・・・俺も少し寝よ。

その後、アルクが入ってきていた。

アルクが二人を見たとき、朔夜が幻真に抱きついて寝ていた。

それを見てアルクは、反対側から抱きついて一緒に寝た。

〈幻真side out〉

〈イツセーside〉

アーシアが連れられた後、学校に戻り部長に詳細を説明した上であの教会に行くつもりだった。だがその事を説明したら、部長に頬を叩かれた。

「あなたはバカなの？ 行けば殺されるわよ」

「それでも俺は行きます」

部長の顔を真っ直ぐ見て言い放った。

「・・・いい目をしてるわね。だけどね悪魔と堕天使の関係は思っている以上に複雑なのよ。何百年も睨み合いが続いている。隙を見せたら殺されるわ、彼らは敵なのだから・・・」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃないんですか？」

そう言い合い、部長と俺は無言の睨み合いだった。

そこに笑い声が突如部室に響いた。

『ハッハッハ！ いいねえ、イツセー。その覚悟を決めた目・・・』

悪くない』

「「「「「！？」「「「「」

『こんばんわ、グレモリー眷属』

そう言つて幻真が部屋に突如何も無いところから現れた。

「なっ！ どこから現れたの?!」

「気配すら感じなかったから、魔法の類か？」

「ですが、この気配は紛れも無く幻真さんの気配ですわ」

『言つておくが、俺には近づけねえぞ？ 次元をズラしているからな』

「次元を・・・ズラす？」

『一枚の紙があるでしょう。イツセー、お前は指一本で表と裏の表面を触ることが出来るか？』

「・・・出来るわけないだろ」

『そう、出来ない。その表と裏を同時に触ることは出来ない、どちらか一方しか触れないのが当り前。だが、次元を・・・接地面をズラすことによつて表と裏を触ることが出来る。俺がやっているのはそんな感じだ。だから、俺は今ここに居るが、実際は別の場所に居る』

「そんなことが、ただの龍人に出来るわけないでしょう!!」

『実際に出来ているんだから、信じるしかないな』

「で、幻真はなにしに来たんだ？ 俺は早くアーシアを救出したいんだが・・・」

『そうだったな。要件は簡単だ、俺が手伝つてやるよ』

「はあ？」

『手伝つてやるつて言つたんだよ』

「はあああああ?！」

『神父共とか邪魔で仕方がないんだろ？ だから俺が前もつて始末しておくつて話だ。さすがに不良神父はお前らがやれよ？ 俺は関わりが無いんだから』

「・・・幻真は何故手伝つてくれるんだ？」

『ドーナシークと取引してさあ、「手を出さない代わりにそちらのはぐれ悪魔払いも手を出すな」つて契約したはずなんだけどねえ、見事に裏切つてくれたから、ちよつと存在を『無』くしてやろうと

思つてね。いわば、イツセーの利害と一致するんだよ。イツセーは墮天使をブツ飛ばしてアーシアを助けたい。俺は墮天使とはぐれ悪魔払いどもを無くしたい。・・・お解り？」

そう言いながら、幻真は怒りのオーラを滲みだしていた。

「分かった、その助け有難く受けるよ」

「イツセー！・・・部長、これを」朱乃、いま私・・・！」

部長は俺たちの顔をぐるりと見た後、ため息を吐いてこう言った。

「大事な用事が出来たわ。少し朱乃と私は外に出るわね」

「部長！！」

それは間違いよ。『兵士』^{ボーン}はね、相手の本陣まで行くと『プロモーション』^{プロモーション}が出来るのよ」

「『プロモーション』？」

「『プロモーション』っていうのはね、実際のチェスと同じで相手の最深部に行けば、他の駒になれるのよ。あと、イツセー・・・神^{セイクリ}器^{ツド・ギア}についてだけ——想いなさい」

「想い・・・ですか？」

「想いの力で神器は動き出すわ。あなたが悪魔でも想いはあなた自身の願いでもある、それを忘れないこと。最後に絶対にこれだけは忘れないで。『兵士』^{ボーン}でも『王』^{キング}は取れるわ、チェスの基本よ。では、私たちは行くわ」

重要なことを言つて、部長は朱乃さんを連れて出ていった。

俺も敵陣に行こうとしたとき声を掛けられた。

「・・・イツセーくん、行くのかい？」

「ああ」

「なら、僕も行こう」

「なに?!」

「そのアーシアさんは知らないが、イツセーくんは僕の仲間だし、

教会にはちよつと恨みもあるしね」

そんなことを言っていたら、そこで聞いていた小猫ちゃんも「ついていく」と発言した。

「・・・私も行きます・・・二人じゃ心配」

「よし、行こうぜ！」

『先に行つて、殲滅しておく。あとはド派手にやればいい』

「分かった」

幻真は言うだけ言つて、消え去つた。

・・・幻真、お前は本当に何者なんだ？

くイツセーside outく

く幻真sideく

時刻になると自然に起きるものであり、目が覚めた俺はいつの間にかアルクまで寝ていた為、起こさないように起き、屋根の上に立ち、次元をズラして言うだけ言つてその場を去つた。

その後は高速で飛んでいき、教会の前まで行き中に入るとはぐれ悪魔払いどもの神父がわんさか居た。

「どーもおー、クソ神父共の皆さん、元気？」

「くく！？」

「俺からの要件は一つ。・・・くたばれ」

不意打ちだった。それも容赦のない攻撃、以前の攻撃はアルクたちが居た為、全力を出せなかったが、今回は周りには邪魔者しか居ない為全力でぶつ放した。

「喰らえ・・・Undulation of Phatasma
dragon ー！！」

ズバアアアアアアアア！！！！

俺から放たれる波動が神父共を襲い、全身がスタボロになっていく。僅かに生き残った者は俺を殺そうと近づくが、俺の周りから龍気が地面から立ち昇った。

「はああああああ！」

俺を囲むように龍気の柱が出来、外側の柱は叩きつけながら内側に引き込む性質があり、内側の柱は切り刻みながら外側に飛ばす性質があるため巻き込まれた相手は先程の攻撃よりも酷い状態で、息絶えた。

先程の攻撃で、教会の屋根が多少吹っ飛んだが、気にしない方向で。

「ま、こんなもんだろ。次は墮天使共か・・・なんで俺こんなに働いてんだろうか？」

と悉くめんどくさそうに呟く幻真はその場から消えた。

（幻真side out）

この後、教会に着いたイツセーたちは「なんじゃ、こりゃああああ！」と叫んでいた。

前哨戦（後書き）

もしかしたら、今日もう一話上げるかもしれません。
それと、次元のズレの話は自分でも書いて「これ、分かるのか？」
と思いました。説明が難しいんだよねあ。

決戦（前書き）

よっしゃー！

第一巻終わり！

あー、疲れた。

決戦

「イツセー side」

今、教会に居る俺たちは教会の惨状をみて目を疑った。

俺が散々苦勞した神父共が全員死んでいた。

「これを・・・幻真がやったのか？」

「多分・・・そうだろうね。こんな攻撃は僕たちには無理だ」

「木場、幻真はただの龍人だと思うか？」

「特殊な龍人には間違いないんだろうけど、今は考えることじゃないね」

そこにチャラク、二度と会いたくなかったクソ神父　フリードの声が窓の方から聞こえた。

「二度目だねえ、こうして会うは」

「アーシアはどこだ!？」

「その祭壇の下に階段があるから、そこから地下に行けるさ」

こいつ、あっさり吐きやがった。

俺達を簡単に殺せるからってか？

「セイクリッド・ギアア!!」

俺の叫びと共に左腕に赤い籠手が装着された。

そのとき小猫ちゃんは――

「・・・潰れて」

自分よりも大きな長椅子を持ち上げ投げ飛ばしている。

とんでもないな。

木場は避けた瞬間を狙って、フリードに斬りかかる。

ガキイン！

木場と神父フリードの剣がぶつかり合う、神父はすかさず音も無く発射される銃弾を撃つが、木場は避けながら攻撃の手を休めることは無かった。

「やるね、そろそろ本気を出そうかな」

本気？

何をする気だ？

「喰らえ」

木場の剣から黒いモヤが出現し、剣全体を覆った。闇の剣が光の剣とぶつかった瞬間、光の剣を侵食し始めた。

「な、なんだとお！」

「——『光喰剣』、ホリー・イレイザー光を喰らう闇の剣さ」

「て、てめえも神器持ちか！？」
セイクリッド・ギア

うろたえている神父、ブン殴るならここしかない！

「動け！神器アア！！」
セイクリッド・ギア

『Boost！！』

神父は俺の動きに気がついたがもう遅い！

「しゃらくせえ！」

「プロモーション！」「ルーク戦車！！」

「プロモーション！！」「ボーン兵士か！？」

「そう、『ルーク戦車』の特性はあり得ない防御と……！！」

バゴオン！

神父を殴る瞬間、硬い感触に当たったがそれごと殴り飛ばした。

「バカげた攻撃力だ」

壁に激突した神父は口の中の血を吐きだした後、よろよろだが立ち上がった。

「ふっざけんじゃ、ねーぞ！！ クソ悪魔どもがアア！！ 殺す、絶対に殺してやんよ！！」

そのとき俺、小猫ちゃん、木場と神父を囲んでいた。

その事に気がついた神父は袖から丸い球体を取り出し、地面に叩きつけたら光が目をくらまし、視力が回復した時には神父はおらず、声だけ聞こえた。

「その雑魚悪魔くん。イツセーくんだっけ？ お前は絶対に殺してやるよ。そんじゃ、ばいちゃ」

その後、視力が完全に回復したがやはり神父の姿は無かった。俺たちは前に進むことにした。

「イツセー side out」

「幻真 side」

俺は教会を出た後、墮天使共が居る場所に降り立った。

「・・・さて、出てこい」

そういうと、ドーナシークとその他二人が後に続いて出てきた。

「何故、約束を破った？」

ドーナシークが聞いてきた。

「はあ？ お前らがはぐれ悪魔払いの手綱を持てなかったのが原因だろうが」

「我らには関係ない！」

「関係がなかるうがあるうが、貴様等は俺の可愛い娘に手を出した。それだけで俺には十分な理由だ」

「たった一匹の龍人が我らに勝てると思うなよ！！」

と言って、ドーナシークの後ろに居た一人の堕天使が襲いかかって来た。

俺はするつと避け、手のひらに黒い球体を発生させた。

「『無』の力！！・・・そら、プレゼントだ」

ヒュウウウ・・・

『無』の球体を投げつけると同時に高速で接近し、三人の羽根を一枚程抜き取った。

三人は避けていくが、ドーナシークが避けようとした瞬間、球体が大きくなって三人を取り込んだ。

「くそっ！」

「な、なに！？」

「こん・・・」

三人を呑み込んだ球体は次第に小さくなって、俺の手のひらに収まった。

「永遠の虚無が訪れる・・・」

バキィン・・・

潰された球体は綺麗さっぱり無くなり、そこには静けさだけが残っていた。

ジャリ・・・

「・・・悪魔とは言え、こんな夜中、女二人で歩くのは危ないですよ、リアス先輩？」

「・・・先程のは何かしら、幻真君？」

「企業秘密で」

「そういうことにはいかないのよ、ここはグレモリー家の縄張り。何が起こったか把握しなくてはならない」

「語っても信じてもらえないだろうから、無理です」
そういうと、苦い顔をしながら追求を止めた。

「あ、そうそう。どうせこの後教会に行くんだろ？ これ持っていけ、同族なら分かるだろ」

と言って、三本の堕天使の羽根を渡した。

「そんじゃ、俺はイッサー達が終わり次第向かうよ」

「ちよっと、待ちなさい！」

リアスの制止を聞かずに出ていく俺。

「そう言えば、イッサーの神器だが、アレが何か知ってるかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アレは『ロングクス神滅具』の中でもレア中のレア。『ブーステッド赤帝龍の籠手』さ」

「ブ、ブーステッド・ギア！？ ああ！？」

「まあ、頑張れ。使い方次第で神や魔王も殺せる程の力を持てる・・・
(死んでるけどな)」

「あなたに言われなくても・・・分かってるわ」

「そうかい、そいつは失礼」

そして、俺は消えた。

幻真 side out

イッセーサイド

地下で儀式みたいなものやっていたレイナーレ達はアーシアから、
 淡い緑色の光を取り出すと同時にアーシアの悲鳴が聞こえる。

「てんめえええええええええええ！！」

「アハ、アハハハ！ ついに手に入れた！ 至高の力！ これで私は至高の墮天使となれる！」

高笑いしてる墮天使を無視し、アジアの元に駆け寄ったが、生気が感じられないほど弱くなっていた。

本能的に悟ってしまったのだ、この子が死ぬことを。

「兵藤くん、ここでは不利だ！　その子連れて一度上にいくんだ！」

俺は、木場の声を聞いて、急いで上に上がった。

「……イ、イツセイさん」

「アーシア！」

「私に……友達が……出来て、嬉しかった。……もし、再び……この国で生まれて……イツセーさん……と……」

そこでアーシアは言葉を紡ぐことなく、手がぶらりと力なく落ちていった。

体のぬくもりが次第に冷たくなっていくのを感じた。

「あら、彼女死んじゃった？ 見て、彼女の力を」

そうやって、手を傷口にかざすと緑色の光が傷を癒していく。

「俺の想いに答える・・・」

「何言ってるの貴方？ 頭大丈夫？」

「俺の想いに答える！！ セイクリッド・ギアアアアアア！！！！」

『Explosion！！』

籠手から発せられる声は機械的であつたが力強かつた。

籠手の宝玉から光り輝いた瞬間、溢れるほどの力が俺の体に流れ込んでくる。

その力の波動に怯えるレイナーレ。

逃げようとするが、俺は絶対に貴様を逃がさない！

「待てや、コラ！」

「は、離せ！」

「ぶっ飛べ、クソ天使！！」

「おのれ、おのれ、おのれ、おのれえええええ！ 下級悪魔」
「ああああ！！」

「うおおりやああああ！！」

ガッシャアアアアン！

教会の壁を激突したが、止まることを知らず壁を突き抜け、地面をバウンドしながら転がっていった。

「ざまーみる」

一矢報いたのが嬉しかったが、その笑顔もすぐに消えた。

一矢報いてもアーシアは帰ってこないからだ。

倒れそうになった時、俺の肩を支えた奴がいた。
木場だ。

「よー、遅えよ、色男」

「邪魔するなつて部長に言われてね」

「部長が？」

「あなたなら、墮天使を倒せると信じていたわ」

声の方を見ると、紅い髪を揺らしてやって来た。

「部長はどこから？」

「用事が終わって、ここの地下に直接ジャンプしたの。教会にジャンプなんか初めてだから緊張したわ」

ため息をつきながら言う部長。

その横を通り過ぎていく、小猫ちゃん。どこへいくのだろうか？

「出てきたらどうなの？ 幻真？」

「言われなくても出てくるさ」

そう言った瞬間、いきなり現れる幻真、もう驚かないぞ。しばらくすると小猫ちゃんが戻ってきた。

「部長、持ってきました」

持ってきたのは気絶した墮天使レイナーレだった。

「持ってきた」って・・・

「朱乃、叩き起こして」

「はい」

朱乃さんは手を上にかざすと宙に水の塊が出来、それをレイナーレに振り降ろす。

バシャ！

「ゴホツゴホツ！」

「ごきげんよう、墮天使レイナーレ」

「・・・グレモリー一族の娘か・・・」

「言っておくけど私には協力してくれる墮天使がいるわ」

「・・・悪いがアイツ等は無くなつたぞ？」

幻真がはつきりと言った。

「嘘よ！」

「リアス・・・」

幻真は部長を呼ぶと懷から黒い羽を三枚取り出し、レイナーレの前に落とした。

「ま、運がなかったな。俺に喧嘩吹っ掛けたのが原因だよ」
手を振りながら、軽い口調で言っている幻真。

「ということできつさと死んでくれ」

躊躇い無く、「死ね」という言葉を放つ幻真にちょっと怯える俺。

「あ、でもただ死ぬことは可哀想だから、イツセー神器について教えてやるよ」

「お、俺の？」

「イツセーが持っているのは——『ブーステッド赤帝龍ギアの籠手』って言えば分かるな？」

「あ、あの！？ 使い方次第で神、魔王すら屠れるという忌々しき神器がこの子に！？」

「そう、十秒ずつに力を倍にしていく力。でも、倍加させていく間を敵は待ってくれない。今回は敵が油断していくからうまくいったのよ」

うつ、部長に釘を刺された。

出世には遠いなあ。

「俺、参上！」

とフリードが崩れた壁から登場した。

だが、レイナーレを見て、あっさりと捨てていき再び逃げた。

「いつの時代も、部下に見捨てられる上司ってのは可哀想だねえ・

」

幻真がぼそりと言った後、レイナーレは怯えながら、俺の方見て媚びた目で助けを求めた。

「イツセーくん、私を助けて！」

その声は『夕麻ちゃん』そのものだった。
情けをかけた俺がバカだったよ……。

「グッバイ。俺の恋。部長、もう限界ツス。頼みます……」

「私のかわいい下僕に言い寄るな。消し飛べ」

ドンツ！

放たれた一撃は堕天使を消し飛ばし、残ったのはなんともいえない感情と黒い羽根がひらひらと舞っていった。

「イツセー、コレ何だと思う？」

部長が持っているのは、紅いチェスの駒だった。

「それは？」

「これは『僧侶^{ヒンヨッフ}』の駒よ。彼女をこれから悪魔に転生させてみるわ」

『我、リアス・グレモリーの名において命ず。汝、アーシア・アルジェントよ。いま再び我の下僕となるため、この地へ魂を帰還させ、悪魔と成れ。汝、我が『僧侶』として、新たな生に歓喜せよ！』

部長は「ふう」といって、神器もアーシアに返した。

「・・・イッセーさん？」

「帰ろう、アーシア」

俺は再び目覚めたアーシアを抱いていた。

（イッセー side out）

決戦（後書き）

このあと色々ありますが、メンドイから「カット！」
・・ワラキアさん、ご苦労様です。

二巻からは幻真とアルクエイドは生徒じゃなくて先生になります。
やっぱ、生徒は無理があつた。

あと、幻真の部下である龍達が出てくる予定です。

先生になったよ！（前書き）

なんとか、投稿出来たが・・・

先生になったよ！

く幻真sideく

うい、朝になつてから、目の前の兵藤家からイツセーとアーシアと一緒に出てきた。

「よお、イツセー。朝からイイ御身分だな」

「……幻真！？ お前の家つて俺ん家の目の前かよー！」

「あれ？ 知らなかったのか？」

「いま初めて知つたよー！！」

「まあ、よろしく頼むよ」

「ああ……」

そこで俺たちの声が重なった。

「アルク、行くぞー？」 「アーシア、準備はいいか？」

「待つて（ください）」 「」

「ん？」 「」

「いい（わよ）（ですよ）」 「」

「よし、じゃあ行くか」 「」

そうして俺たちは学園に行くことになった。

途中の通学路にて……

「どうして、アルジエントさんと兵藤が同じ方向から……」

「バカな……何事だ……」

「嘘よ、リアスお姉さまだけではなく、アーシアさんまで毒牙に……」
とイツセーの批判が凄まじい。

お前普段どんな思われ方してんだ？

一方俺たちはというと……

「おい、見ろよ！ アルクエイドさんだぜ！」

「幻真様もいつもキリツとしていて、かっこいいわあ」

「あの二人は素敵な夫婦よねえ」

「私も幻真様と……（ピンク色の何かを想像中）」

最後のは無視しておこう、何か知らないが聞いちゃいけない気がする。

そんな評価を貰っているらしい。

「……………ジー（。d）」

「えーと、アーシア俺になんか用か？」

「……ハツΣ（。d）」

「？」

「いえ?! なんでもありません」

「あ、そう」

「（幻真さんが“夢幻龍”なんて、誰に言われしたんでしたっけ？）」

「アーシアは聞き覚えのない単語に終始頭を悩ませていた。」

学校に着いた俺たちは、着いたとたん呼び出された。

「幻真くん、アルクエイドさん、あなた達職員室まで至急来て欲しい」

「いつて先程放送があったわよ？」

「あ、マジで？」

「ええ、マジで」

「悪いがイッサー、先に教室に行ってくれ」

「ああ、先に行ってるぜ」

そこで俺達とイッサー達は別れた。

「んじゃま、行きましようかね」

「なんだと思う？」

「さあ？ まさか世間的にマズイから教師をやれって言われたりして」

「まさかねえ」

コンコン・・・

「失礼します」

「おお、来てくれたか幻真君にアルクエイドさん、こちらに来てくれ」

校長自らが手招きして、応接室に案内された。

ボタン・・・

「え、あ、はい。で要件は？」

「うむ。こちらで意見が出たのだが、キミたちが学生で結婚しているのは世間的にマズイという意見が出てね。突然で悪いのだが、教

師をやってもらいたい」

「「は？」」

「幻真君は歴史教師を、アルクエイドさんは英語教師をしてもらいたい」

「いや、あの校長、俺達教員免許持ってないし、第一人に教えること出来ないですよ?!」

「教員免許の方は大丈夫だ、こちらに用意してある（スツ・・・」
「嘘だ〜」

「では、新任の教師として全校生徒に知らせるから、体育館に行くから、ついて来てくれ」

そう言つて、校長はさっさと出ていく。

職員室を見ると、誰もおらず体育館の方から、「ガヤガヤ」と声が聞こえていた。

「幻真の言っていた事が当たったわね」

「……どうして、物事がこううまくいかねんだ」

「諦めて順応するしかないわ」

「切り替え早いな、アルク」

「抗つても無駄なんだから、順応するしか前には進めないでしょ？」

「俺は、心がボロボロだよ」

「はいはい、あとでね」

一人は落ち込みながら、もう一人は平然と校長の後をついていった。

体育館にて・・・

「あー、今日皆さんに集まってくれたのは新任の教師がこの学園に就任されたので皆さんに知ってもらうために、呼びかけました。そ

そういつて、気分が暗いまま壇上に上がる俺と普通に平然としてるアルクが上に昇ってから、たった一瞬沈黙した。

「私はアルケイド・G・ブリュンスタッドよ。科目は英語、そして幻真の妻よ。よろしく〜!」

「アルクゝ耳を塞げ」

「『ええええええええええええ！！！！！！！？』」
どうみても衝撃波です。本当にありがとうございました。

「なんだ、イツセイ」

「うるせえ、黙れ、喋んな！俺ですら状況が読み込みいねえんだよ！！」

「はい、質問です！ アルクエイドさんと幻真さんは結婚してるんですか！？」

152

「許嫁に近い感じだ！ 次！」

「プロポーズはどんな言葉だったんですか？」

「んなもん言つてない！ 質問がないなら終わりにしたいんだがい
いな？」

「……どうぞ、どうぞ」「」

その場で、簡単な質問タイムをおこない、校長にマイクを返した。

「えー、担当するクラスですが、2・Fのクラスで担任はアルクエ
イド先生が副担として幻真先生にやってもらいます。2・Fの皆さ
んは仲良くやってください。これで、集会を終わります」

あー、後がメンドイなあ、これは。

（幻真side out）

（イツセーside）

朝早くから体育館に集められた俺たちは、校長の話では新任の教師
が二人も来たと言ったことだった。

皆、ざわついてる。

誰だろうと思つたら、幻真とアルクエイドさんだった。

「は？」

いやいやいや！

ちょっと待て！！

おかしいだろ！！！！

「え、ちょ、幻真……！！！」

「なんだ、イツセー」

「なんで教師になつてんの!？」

「うるせえ、黙れ、喋んな! 俺ですら状況が読み込めいねえんだよ!！」

とんでもない暴言を吐かれた。

しかも、校長が言うには、アルクエイドさんがウチの担任で幻真が副担!？」

職員室で何があつたんだよ?

それにて、集会は終わった。

＼イツセーside out＼

＼幻真side＼

暗い気持ちでイツセー達が居るクラスに入る俺とアルク。

イツセー達の顔を見ると「一体何があつた?」と言う顔だった。

「理由は世間的にマズイから、教師にしちゃえだつてよ……」

「マジで?」「」

「マジで」「」

「幻真達とか教員免許とかどうなつてんの?」

「用意してあるつてよ……」

でも、担当教科はベストかもしれない。

だって俺、創世記から生きてるし。……アルクもだけど。

アルクは英語が得意そうだしな。

「まあ、そんな感じだ。よろしく頼む」

「よろしくねえ」

そうして、俺とアルクの教員生活（笑）が始まった。

＼幻真side out＼

「イッサー side」

学校が終わり、アーシアと一緒に家に帰りそろそろ寝ようとした瞬間、俺の部屋に部長がジャンプしてきた。

「…イッサー、至急私を抱いてちょうだい」

「はい？」

日本語つてのは常に刺激的だ。

「あの、それはどういう・・・？」

「イッサーは始めてよね？」

こちらの言い分をそっちのけで話を進めていく部長は止まらなかった。

「はははは初めてですー！！」

「お互い、慣れないでしょうけど最後までやれるわ」

え！？ ヤルの！？ ヤっちゃうの！？

「え、ちよつ、ちよつと待ってくださいー！！」

「どうしたの、イッサー？」

「何故、いきなり？」

「ま、ちよつとね。既成事実まで行けば、文句も言えないハズだし・
・（ブツブツ・・・）」

となんか部長は独り言を呟いている。
そのとき、手に物凄いやわらかい感触があった。

むにい……

「あ、ありのままのことを話すぜ！！いつの間にか、部長が俺の手をお、おっぱいに当てて来たんだ。

恐ろしい感触を味わったぜ……」

「何を言ってるの、イツセー？」

「……ハッ！（；。㇏）」

何か知らんが電波を受け取った気がする。

いつの間にか鼻血まで出ていた、さらに次のステップにいきうとしたとき、再び部屋にどこかの紋章が浮かび上がった。

「……間に合わなかったのね……」

部長は悔しい声で呟いた。

「こんなことをして破談に持ち込もうということですか？……あ

なたはグレモリー家次期当主なのですから、無闇に殿方に肌を晒すのはおやめください。ただでさえ、事の前なのですから」

「ぶ、部長、あのこちらの方は？」

「失礼しました。私は、グレモリー家に仕える者です。グレイフィアと申します。以後、お見知りおきを」

「は、はい。ご丁寧にどうも」

と自然に頭を下げる俺。

「全く龍人といい、グレイフィアといい、次から次へと厄介事が舞

い込んでくるわね」
そうイラつきながら、言う部長。

「お嬢様、今なんと言いました？」

「だから、厄介事が……」

「いえ、その前です。グレイフィアの前です」

「龍人と言ったのよ」

「その龍人の名を伺っても？」

「幻真・G・ブリュンスタッドよ？」

「……！！……そうですか」

「どうかしたの？」

「いえ、なんでもありません」

「詳しい話をしましょう。……朱乃も同伴でいいわよね？」

「『雷の巫女』ですか？ 私は構いません。上級悪魔たる者、『女王』を傍らに置くのは常ですので」

「よろしい。イッセー」

チュツ？

頭が正常に機能したと思った直後、ほっぺにキスされたあああああ
ああ！？

「これで今夜は許してちょうだい。ごめんなさいね、イッセー」
そう言って、部長はグレイフィアさんと一緒に帰っていった。

再び、機能不全になり、再起動まで時間がかかった。
＼イツセーside out＼

＼幻真side＼

イツセーの家がなんか騒がしかったから、次元ズラして見に行つた。
姿は出していない為、バレていない。

あくまで意識のみを飛ばしている。

見てみると、リアスとセ。クスするようだ。

慌てているイツセーと覚悟を決めたリアスのシチュが妙にマッチして面白。

そこに銀髪^{：銀髪}のメイドが現れた。

「げえ！ アイツは……」

今現在、物凄く恨まれているグレイフィアが居た。
しかも、俺の存在がここに居るといことまでバレた。
俺は見るのを止めた。

「ヤバい、どうしよう……」

これから、起きることを想像すると汗がダラダラと流れ始めた。
＼幻真side out＼

先生になったよ！（後書き）

出来たが、なんというか中途半端だなあ。

次回は女誑しの焼き鳥がです。

はっきり言います、今回の犠牲者です。（色んな意味で）

因縁の再開・・・

く幻真sideく

うい、幻真だ。

教師と言う事で、まあ、歴史を教えているよ。

と言っても内容はスカスカだけどな！

まあ、大まかな出来事を教えてから、その辺の細かい出来事をうちくつぽく語っているだけだし……。

だけど、聞いている奴は何故かしらんがメモを必死に取っていた。

……なぜ？

そんなこんなで授業が終わり、SHRになり、いつも通り騒がしい我がクラス。

あまりの五月蠅さにアルクが脅しまがいなことをいった。

「へい！ そのエロ三人組！！」

「「はい！！」」

「あんまり、うるさいと……月の裏までブツ飛ばすわよ？」

「キヤー、アルクセンサーステキー！！」

「「……………」」

…………アルク、それ洒落になっただけから是非止めてくれまあ、ちよつとした出来事があつたが、無事に終わった。

「起立――」

礼――

さようなら――」

「はい！ みんな寄り道しないように帰りなさいよー！」
ここで、部活に行くグループと自宅に帰るグループで分かれていた。

「……幻真！」

「はいよ、アルク行くぞ」

「はいはい！ でも、その前に朔夜を迎えなきゃね」

「そうだった、朔夜は着いたかな？」

今日、学校に着いたとき、リアスから「放課後、オカルト研究部に家族全員で来て欲しい」と言われ、朔夜を学校で迎えることとなった。

そのとき、下から人だまりが出来ていた。

「来たね」

「ああ、来たな。迎えにいつてくる」

「ええ、おねがい」

校庭で騒がしい方に行った。

〈幻真 side out〉

〈朔夜 side〉

今日、私は父さんと母さんが働いている“学校”に行くことになった。
てる。

そろそろ時間なため、家から出ようとしたときリビングの空間が割れ、中から人が出てきた。

「ふう、ようやくこれた」

「あの、貴方はどちらさまで？」

「む。ここは幻真殿の家で間違いないかな？」

「はい、ここは父さんの家ですが……」

「“父さん”ということは幻真殿の娘さんかな？」

「はい、私の名前は 朔夜・G・プリュンスタッドです」

「ご丁寧にどうも。私の名前は大蛇。幻真殿と同じ龍人です」

「それで、父さんに何か御用ですか？」

「ちよっと、仕事の報告をしようと思ったんですが、居ないようですね」

「これから父さんの所に行くんですが、一緒にどうですか？」

「……よろしいのですか？」

「ええ」

「では、参りましょうか」

そうして、私は父さんの仕事の部下の方と家を出て、父さんの所に向かった。

移動中……

しばらく歩いて、父さんが働いている仕事場に来た。

「ここが、幻真殿の勤務先ですか……」

「父さんはどこに……？」

私は辺りを見渡したが、校庭にいるのは下校していく生徒たちだった。

いつの間にか、校庭の中に入っていた私たちは、物凄く注目されていた。

「ねえ、あの子可愛くない!?」

「え? ホントだ!! カワイイ〜」

「あの子、イイ! イイわ!!」

「や、ヤベエ!! 金髪にメイド服に口リ! キターーーーー!!」

「お前、頭大丈夫か?」

などと騒がれていた。

そこに奥から、父さんの声が聞こえた。

「朔夜ー!ー!!」

「朔夜side out」

「幻真side」

朔夜を目視出来た俺は、近づいていくうちに知り合いがいた。

朔夜を抱きかかえ隣に居た者に声をかけた。

「おや? 大蛇、なんでここに居るんだ?」

「久しぶりです、幻真殿」

「ああ、久しぶり。……なんかあったのか?」

「いえ、たまには顔を見ようと思い、報告ついでにこちらに来ました」

「なるほど、長旅ご苦労さん。ここじゃなんだし、落ちつける場所に行こうぜ」

「はい」

軽く挨拶した後、アルクエイドが先に向かっている旧校舎に向かっ

た。

その後、一同を見ていた生徒はあれよこれよと様々な噂が飛び交ったらしい。

「父さん、——ついいですか？」

「ん？なに、朔夜？」

「大蛇さんは龍人と言っていました、元は何なのですか？」

「言ってなかったのか？」

「聞かれなかったの」

「なるほど、大蛇の本来の姿は
八岐大蛇だよ」

「えええええゝゝ！？！？」 あヤマトノオロチの八岐大蛇？！」

「そうだよ。コイツが討たれた後、ほんの僅かだけど、まだ息があったから俺が保護してあそこに連れて帰ったのさ。それ以来、大蛇はあの場所で働いているのさ」

そんな話をしていると、アルクエイドに木場、アーシアそしてイツーが居た。

「アルク、待たせたな」

「ようやく来たわね。……こちらの方は？」

「まあ、俺の部下ってことになるのかな、大蛇って言うんだ」

「幻真殿の部下をやっております、大蛇です」

「アルクは俺の妻で朔夜は言わなくても、分かるな？　で、コイツが左から『騎士^{ナイト}』の木場祐斗、『僧侶^{ビショップ}』のアーシア・アルジェント、最後に『兵士^{ポーン}』の兵藤一誠だ。全員悪魔だぞ」

俺はイツセー達を軽く紹介してやった。

「なあ、幻真。大蛇さんも龍人なのか？」

「ああ、そうだぞ。取り敢えず、中に入ろうぜ？……俺は出来れば入りたくないんだが……」

「なんでよ？」

中に居る人物が問題なんだよ、うわー、スゲエ中に入りたくねえ。

「……幻真殿、覚悟を決めた方がよろしいのでは？」

「だって、殺し合いになるじゃないですかー！ やだー！！」

「なに言ってるんだ、幻真は？」

「さあ、僕にもわからないよ」

そう言い合いをしている、俺達を余所にイツセー達は扉を開ける。

ガラ・・・

その瞬間、張り詰めた空気が外に溢れてきた。

「……やはり、貴方でしたか」

「……………こうなることが目に見えてたから、来たくなかったんだよ」

俺とリアスのそばに居る、銀髪のメイドは互いを見据えていた。

〈幻真 side out〉

〈イツセー side〉

授業が終わって、昨日の出来事の事について、朱乃さんから聞こうと思っていたら、何故かやたら校庭が騒がしかったか。

「どうしたんだ、松田に元浜？」

「イッセー、聞いてくれ！　どうやら、校庭にメイドさんが来たらしい！！」

「はい？」

「しかも、金髪らしい」

「なに言ってるんだ？」

「取り敢えず、見てくるぜ！！」

そう言って悪友二人は校庭に向かって走っていった。

そこに幻真が校庭に向かって走っているのを見つけた。

そこからは一緒に部室についていった。

どうやら、幻真の隣に居る人は幻真の部下である、龍人の大蛇さんらしい。

そこで、不意に幻真の足が止まった。

「どうしたんだ？　幻真？」

「……中に入りたくねえ」

「幻真殿、覚悟を決めた方がよろしいのでは？」

「だって、殺し合いになるじゃないですかー！　やだー！！」

「何言ってるんだろうか？」

「さあ、僕には分からないよ」

幻真達を置いて、俺たちは部室に入った瞬間、空気が張り詰めていた。

「……やはり、貴方でしたか」

「………こうなることが目に見えてたから、来たくなかったんだよ」

幻真とグレイフィアさんはお互いに見据えていた。

「……部長、あの二人の間に何かあったんですか？」

「あまり口にしてはいけないのだけど、簡単に言つとあの二人に間に起きた出来事で私……いや、ほとんどの女性悪魔は龍人が嫌いになったわ」

「本当ですか!？」

「ええ、だから、私はあまり龍人は好きじゃないのよ。それよりも全員集まつたようだし、話していいかしら、グレイフィア？」

「つと、すみません。私から話しましょうか？」

「いえ、私から……!？」

何やら話そうとした瞬間、床にグレモリーの紋章から別のにな変わつていた。

そこで木場が呟いた。

「——フェニックス」

フェニックス？　つてことはやっぱり、グレモリーじゃないんだ！
魔方阵から出てきたのは赤いスーツを着た男。
木場のホスト姿verみたいな感じた。

「人間界は久しぶりだ」

その後、辺りを見渡し部長に目を止めた瞬間……

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

「ああ、なるほど。そういうわけか。」

幻真は何かに納得した感じだった、なんだ？　どういうことだ？
訳のわからない俺に説明してくれた。

「多分、グレモリー家次期当主の婿ってところだ、イッセー」
え、む、婿……！？

と言う事はつまり、アレか！？
次期当主は部長だから……。

「リアスお嬢様の婚約者でございます」

「こ、婚約者あああああああ？！？！？」

俺は不測の事態に叫んだ。

「イッセーside out」

因縁の再開・・・（後書き）

朔夜は基本的に東方の殺人姫の服装で過ごしています。

レイヴェルはイッサーではなく幻真の方が気になってます。

さて、オリキャラの大蛇さんの軽い紹介を

名：大蛇

種族：龍

真名：八岐大蛇

容姿：黒髪で眼は銀、ちよつと蛇目で古風な武人のイメージ

詳細

スサノオ（？）に草薙劔で討たれた後、ほんの少し未だに意識があった所を幻真によって保護されて、それから幻真の部下として“秘匿されし理想郷”で働く。

こんな感じです。

……スサノオに討たれたんだっけ？ アレ？

今、考え中ことが一つ。

『イービル・ヒース ブレイブ・ハート 悪魔の駒』や『御遣い』みたいに龍専用の駒を創るべきか……。

意見や感想待ってます。

一触即発・・・そして、またフラグ？（前書き）

眩きなんで見なくてもいいです。

D D F FのフリオニールのEXバーストの『ブロックファンタズムファイビットブザー』
どう見ても、アーチャーの『壊れた幻想』にしか見えない……

一触即発・・・そして、またフラグ？

〔幻真side〕

リアスが何かを話そうとしている時に魔方陣が変わり、フェニックスの紋章に変わった。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

その一言でだいたいの内容が把握できた俺はイツセーに分かりやすく説明し、その後朱乃の出したお茶を有意義に飲んでる。

ある意味、アイツ、スゲエな。

そこから、奴は悪魔の状況を一詳しく説明させている。
黙ってる聞いている俺は、心の中で謝っていた。

いや、マジでスミマセン……。

愚弟共がとんだご迷惑を……。

「ところで、彼女たちは悪魔じゃないのか？」

「ん？ なにか用か、ガキ共？」

「アンタじゃなくて、俺はそこに居る美しいお嬢さんとお姉さんに聞いているんだ」

「こちらはアルクエイド・G・ブリュンスタッド様とその娘様の朔夜・G・ブリュンスタッドです」

「どーも」

「・・・（ペコリ）」

アルクと朔夜は会釈のみだった。

「俺はライザー・フェニックスと申します。突然ですが俺と付き合い
てくれませんか？」

いきなり、朔夜とアルクに關係を作ろうとするアホ鳥。

「……勝手に人の妻と娘に迫ってんじゃねえぞ、アホンダラ」

「あ？ アンタ達結婚していたのかよ。じゃあ、朔夜でいいから俺にくれよ。可愛がってやるから」

「耳が腐ったか？ やるかボケ！」

朔夜はいつの間にか、俺の後ろに隠れていた。

「俺のような、上級悪魔に可愛がってもらえるんだから、アンタこそ感謝するんだな。だいたい、俺とアンタじゃ実力の差もはつきりと分かってるのによく噛みつくな」

まるで自分がこの世で最強みたいな言い方をするライダーだったが、
幻真達はそれを聞いて、呆然とし突然笑い出した。

「クク、アハハハ！」

「プツ、
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ！」

「ハッハッハッハッハッハ！！」

「何がおかしい！！」

「いや、だってよ。たかが、再生することしか能がない鳥が強いつておかしいのなんの」

「本当よね、幻真と貴方の確かにはつきりしてるわね」

「ああ、幻真殿が天で、小僧が地だな」

「なんだと!!」

「事実を言ってるまでだ、はっきり言ってやるよ。お前じゃ俺には

絶対勝てない。……しかし、虎の威を借る狐とはいうが、まさか虎の威を借る鳥は無かったな」

「たかが一介の龍人がこの俺をよくも侮辱したな、覚悟はいいか？」

「おや、やる気かい？」

「貴様は完全に消し炭にしてやる」

「なら、一生復活できないように心臓を穿つぞ、クソガキ！」

そういつて、俺たちは臨戦状態になる。

それに伴い、リアス達も構える。

そこで制止声がかかる。

「おやめください、ライザー様、幻真様。お二人が暴れるならサージェクス様の『女王^{クイーン}』である私が仲裁に入ります」

そういいながら、俺とアホ鳥の間に入るグレイフィア、ライザーは強張るが俺平然としている。

「わかった、やめよう」

「……おれは別に続けても構わないがな」

「まあ、いい。とにかく、リアスは俺とも結婚が嫌いなんだろ？」

なら『レーティングゲーム』で決着を付けようではないか。俺が勝てば結婚する、リアスが勝てば、この婚約は破棄で構わない。だが、出来るかな？ 俺の眷属達に勝てるかどうか？」

そういつて、アホ鳥が腕を振るった瞬間、十五名の眷属が出てきた。イツセーは何故かしらんが、ライザーの事をうらやましそうに見ていた。

「どうしたんだ、イツセーは？」

「イツセーはハーレム王になるのが夢らしいわ」

ああ、それであんなに羨ましそうに見ているわけね。
その中に、なんというかアホ鳥に似た感じの気配を感じたので聞いてみた。

「なあ、もしかして、その『僧侶^{ソニシツ}』の子ってそのアホ鳥の妹とか何かか？」

「ああ、そうだが、どうして分かったんだい？」

「いや、カンなんだけど……なんというかキミも大変だな」
知らず知らずに同情してしまった。

「……貴方のお名前は？」

「あ？ 俺？ 俺の名は幻真・G・ブリュンスタッドで龍人だけど？」

アホ鳥の妹さんが聞いてきた、なんだろう？

「もし、よろしければ、後日お茶などに付き合ってくださいませんか？」

「まあ、いいが……何故に？」

「貴方とお話してみたいからです」

「さいですか……」

「では、事が終わり次第、連絡します」

「はいよ。で、話を戻すが、どーせ今回の件、サーゼクスとその親父さんが仕組んだんだろ？ ちゃっちゃと連れて来い」

「取り敢えず、お嬢様とライザー様の『レーティングゲーム』の件はよろしいですね？」

「ああ」

「ええ」

「ご確認取れました。両家の方には私を通じて話を通させていただ

きます。後ほど、サーゼクス様を連れてきますので少々お待ちを」
そう言って、グレイフィアは飛んでいった。

「……全くめんどくさい」

そして、ライザーの妹がこつちを興味津津に見ていた。

ああ、また嫌な予感しかない……

く幻真side outく

一触即発・・・そして、またフラグ？（後書き）

さて、次はどうするか……

賭け（前書き）

最近、腰の調子が悪い作者です。

・・・変な寝方したかな？

賭け

「サーゼクス side」

グレイフィアがリアスの元に飛んだ後、少し経ってからグレイフィアが戻ってきた。

「グレイフィア……。やはり戦うこととなったかい？」

「はい……。それと、あの男が貴方を連れてくるようにとおっしゃってます」

「あの男？」

「……幻真・G・ブリュンスタッドです」

「ああ、なるほどね。しかし、私は今離れることが出来ないし……」

「では、連れてきます」

「うん、頼むよ」

「では、失礼します」

そう言って再びグレイフィアは駒王学園に飛んだ。

「……あの件の真実は黙っておかなければならないのか……。キミはそれでいいのかい？ 幻真」

これから来る客人を思っ て呟いた。

「サーゼクス side out」

「幻真 side」

今、俺たちはグレイフィアと共にジャンプ中だ。

戻ってきた後、「今、離れることが出来ないの、ついて来てくれ」と言われたので、ついていくことに。

リアス達は10日後ライザーと『レーティングゲーム』があるらしく、修行いった。

「……お前があの場合に居るとはな」

「……………」

「私は、未だにあの時ことを覚えているわ」

「……………」

「はっきり言えば、貴方を殺したいわ」

「……………」

「では、着きましたので衝撃に備えてください」

一瞬でメイド姿に戻るグレイフィアを見た朔夜は尊敬していた。

……………何故に？

「サーゼクス様、お連れしました」

そこには書類整理に勤しむ紅髪の若い男がいた。

「やあ、久しぶりだね……………幻真」

「よう、アレ以来だな。元気にやってるか？」

「まあね。……………つと、こちらの方は？」

「俺の妻と娘」

「私がアルクエイド・G・ブリュンスタッドよ、よろしく」

「私は父さんと母さんの娘の朔夜・G・ブリュンスタッドです。よろしくお願いします」

「これはどうも、私は魔王―ルシファー　サーゼクス・ルシファーだ」

「そのメイドのグレイフィアと申します」

お互い軽い挨拶をしたあと、グレイフィアは俺を睨む。

まあ当然か……。

「ねえ、幻真」

「なんだ、アルク？」

「あなた、彼女に何をしたの？」

「……………コイツが慕ってた主を俺が『無』で無くした」

「……………それ、本当？」

「ああ……………（理由があるけどな）」

「（でしようね。いずれ話してね？）」

「（分かった）」

途中から、念話になってしまった。

サーゼクスは待っていたようだ。

「さて、いいかな？」

「ああ、スマンな。で？　ライザーって言ったか？　あの焼き鳥男、手を出す癖を抑えろ」

「それは、私でも無理な気がするんだが……………？」

「じゃあ、二度と手を出すなと命じておけ。次やったら確実に潰す」

「そう言っておこう」

「しかし、リアスも可哀想だな。あんな男が婚約者だとは……………」

「先の戦争で、だいぶ純血の悪魔を失ってしまったからね……………、父上が焦って無理矢理婚約を進めたそうだ」

「このことにヴェネラさんは？」

「別に反対していなかったよ、母上も思う所があったんじゃないかな？」

「しがらみつてのはメンドイね」

本当に面倒くさいんだよ、これが。

「時に、リアスとライザーのレーティングゲームはどう見る？」

「まあ、期限が10日間。その間にどれだけ実力の差を詰めることが出来るかとイツセーの鍛え具合だな」

「……………勝率で言うと？」

「9：1だ」

「……………やはりそうか」

サーゼクスはそれを聞いてため息が出ていた。

辛いな、お前も。

「……………サーゼクス様」

「なんだい、グレイファイア？」

「今、ここでこの男を殺して構いませんか？」

「俺が憎いか？」

「ええ、とても」

「……………なら、賭けをするか」

「「賭け？」」

「そうだ、賭けだ。俺VSサーゼクス+最上級悪魔一人を加えて戦うんだよ。それで、サーゼクス達が勝てば、あの事件の全貌を話してやるよ。負ければ、無しだが……………。どうする？ この賭けに乗るか、降りるか？」

「……………乗るわ、その勝負」

「いい覚悟だ、グレイファイア」

「サーゼクス、最上級悪魔でそう簡単に倒れない奴は居るか？」

「……………タンニーンがいるな」

タンニーンか、龍にしては仁義の厚い男だったな。

「連絡取れるか？」

「……グレイフィア」

「分かりました、少々お待ちください」

グレイフィアは俺だけには見もせずに去っていった。

「しかし、キミが結婚して子供まで授かっていたとは……」

「あれから、色々あったんだよ」

「アルクエイドさんも普通の女性じゃないんだろう？」

「ああ、“真祖の吸血姫”と言えば分かるな？」

「あの真祖かい！？」

「そ、あの真祖」

「じゃあ、朔夜ちゃんは……「龍と真祖のハーフだ」……そうか」

「……リアス達でも勝てる気がしないんだが……」

「今の實力だとまだそちらの方が、分があるさ」

グレイフィアが戻るまでちよつとした雑談していた。

「お待たせしました」

「どうだった？」

「お返事の方は「いいぞ」だそうです」

「なら、明日やるか」

「そうだね、そうしよう」

「じゃ、俺たちは一度帰るから」

「ああ、明日会おう」

「さようなら」

「はい、朔夜ちゃん。さようなら」

朔夜は一生懸命に挨拶していた。

ああ可愛いなあ。

そうして、俺たちは帰っていった。

〈幻真side out〉

〈サーゼクスside〉

グレイフィアは帰って来てから、目に闘志がついたようであつたと怖い。

私たちの子供である、ミリキヤスも近づけないようだ。

「父様、母様が怖いです」

「大丈夫だ、明日には治まってるよ………多分」

「……あなた、絶対に勝ってくださいね？（ニコオ）」

「あ、ああ。分かった」

……幻真、これはマズイかもしれない。

……私は不安しかなかった。

〈サーゼクスside out〉

賭け（後書き）

次回はサーゼクス&タンニーン+α VS 幻真の戦いとなりました。

最近冷え込みが凄まじいので体の体調管理には気を付けましょう！

夢幻龍VS魔王、魔龍聖・・・そして、メイド？
.....メイドオオ？！Σ（

一話で纏めきれんかった・・・orz

夢幻龍VS魔王、魔龍聖・・・そして、メイド？ ……メイドオオ？！Σ（

）幻真side）

ヒヤッハー！！ 戦闘だーーーー！！

……スマン、冒頭から調子に乗った。

改めて言うが、賭け試合です。

場所は俺とガイアが作成した次元の狭間を大きく切り取ったところ。
まあ、自分たちのトップが戦うと言う事で、もうギャラリーがあちこちからやってきた。

ちなみに、VIPルームにはリアス達が居る。

……修業はどうした？

サーゼクス曰く……

『彼らにも、トップの戦いで何かを掴めることが出来た方が良いでしょう。』

と言っていた。

多分、出来ないんじゃないか？

その時、司会者のアナウンスが会場に流れた。

『皆さま、大変お待たせしました！！ これより始めさせていただきますー！！』

ウオオオオオオオオオオ！！

『今回の試合はこちら！！』

謎の龍人 幻真・G・ブリュンスタッド

V S

四大魔王の一人、サーゼクス・ルシファー様、最上級悪魔のタンニーン様……そしてなんと、そのサーゼクス様の『女王^{クイーン}』であるグレイフィア様が戦われます！！では、四人の登場です！！』

……オイコラ、ちょっと待て。

なんで、グレイフィアが居るんだよ！？
お互い、フィールドに入るとサーゼクス、タンニーン、グレイフィアが遠くに居た。

「……なんで居るんだ？」

「すまない、幻真。止めたのだが……」

「……………」

「まあ、しょうがねえ。出ちまったものだし、理不尽な攻撃喰らっても文句を言っなよ？」

「それはこっちのセリフよ」

『それでは両者、準備の方はよろしいですか？』

「おう」

「「「ああ（ええ）（うむ）」」」

『それでは開始！！』

さて、まずは軽いジャブから始めた。

体に魔力を流し込み、全体に行きわたったのを確認した後、地を蹴って一気にサーゼクス達の元まで迫った。

「サーゼクス、下がれ！ 俺が受ける！！」

タンニーンは俺が消えたのを見ており、腕を交差して防御の姿勢を取る。

「ウオらぁッ！」

ドゴォン！！

「グッ！！ 相も変わらず、とてつもない力だな！！ 幻真！！」

「そういうデメエはどういう視力してやがる!!」

二人がぶつかりとその衝撃波がフィールド全体に飛んでいく。
防御を受け切ったタンニーンは体を捻りながら尻尾を幻真に振るつた。

ブォン……
バシィン!

「がっ!」
「……フンツ!」

そこからは俺とタンニーンの殴り合いになった。
幻真 side out

「イツセー side」
俺たちは今、VIPルームに居る。
なんでも、幻真VS魔王 ルシファー様とグレイフィアさん、そして最上級悪魔でありながら龍王の人(?)がこれから、試合をやるらしい。

「……あら、あなた達も来てたのね」
「あ、アルクエイド先生、お早うございます」
「うん、お早う」

「ところで、何故魔王様と幻真が試合なんかを？」

「ちよつと、理由は言えないのよ。…簡単に言えば“賭け試合”かしら？」

「…賭け？ 何のですか？」

「それは言えないわよ」

「アルクエイド先生、いいですか？」

「今は学校じゃないから、アルクエイドでいいわよ」

「じゃあ、アルクエイドさん。いくら幻真でもこの戦力差は無理なんじゃないんですか？」

思い切つて聞いてみた。

後ろを見ると、部長達の表情も「そのとおりよ」と言わんばかりの表情だった。

「……？ 何言ってるの？ アレで幻真にとってはちよつどいいくらいよ」

「……アレで！？」「……」

「しかも、幻真は本来の姿すら成るつもりは……今のところは無いわね」

なにも言えなかった……。

ただ、分かったことは幻真が次元を超えた存在だという事が認識させられた。

しかも、今、幻真の数十倍はあるドラゴンと対等に殴り合っていた。

「イツセー side out」

「幻真 side」

タンニーンと殴り合ってから数分が経っているが音が凄まじい……

ドガッ！

バキッ！

バギリ！！

ゴキンッ！！

ときどきどちらかの骨が折れる音が辺り一帯に聞こえるが、お互いはそれを気にせず、殴り合う。

俺がストレートをだし、タンニーンはかわしジャブを放つ。

俺は受け流して、足払いをすかさず放つとタンニーンは飛び、そのままサマーソルトで反撃と……… 躲しては放つの繰り返しだった。

そんな停滞していた流れが若干動き出した。

先程飛びあがったタンニーンは少し距離を離して、口から空を覆い尽くすほどのブレスを放ってきた。

「これを避けられるか！？」

ゴオオオオオオオオ！！！！

迫りくる炎に対抗するために右手に魔力を集中させて、振り上げて“壁”を造るように両断した。

「ウオオオオオオオ！！ 『アースブレイカー』！！」

バゴォン！

・ゴゴゴゴゴ

ゴオアアアアアアアア！！

集中させた右手を地面に向けて振り降ろし叩きつけた瞬間、地面が割れ、魔力の壁が出来て、タンニンのブレスは幻真に届くことはなかった。

その“壁”はブレスが収まっても、途切れることはなく幻真とサーゼクス達の間をきっちり分けていた。

「（さて、あとちょっと、この壁が消えるし広域型に切り替えるか……）」

幻真は広域型のフォームに切り替える準備をし、準備が終わったと同時に壁が消えた。

そこで、俺は呟いた。

「さあ、いくぜ…… 『飛翔しろ、^{ドラゴンズ}龍軍団！！』」

幻真 side out

サーゼクス side

タンニンと殴り合い始めて数分経っているが、幻真は疲れることなく「元六大龍王」と戦っていた。

タンニーンが宙に浮きながら、バックしブレスを吐きながら距離を空けた。

タンニーンは容赦なく手加減なしにブレスを放ち、逃げ場のない炎が幻真に襲いかかったが、幻真も右手に魔力を集中させていたことが分かった。

その右手を振り降ろした瞬間、魔力が一気に駆け上がりタンニーンのブレスを防ぐ壁となった。

この一連の動きについていける者はいるのだろうか……。

「リアス、聞こえるかい？」

『あ、はい！ 聞こえてます、魔王様』

「どうだい？ 何か掴めそうかい？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

無言で返事が帰ってくる。

予想通りの返答で安心したような、残念なような気持ちでなんともいえなかった。

念話が終わると、壁も次第に消えていき幻真の姿が見えようとした瞬間――

『飛翔しろ、ドラゴンズ龍軍団！！』

そう聞こえた後、幻真の姿が変わっていた。

〈幻真side out〉

〈イツセーside〉

VIPルームで試合を観戦していた俺たちだったが、あまりにも理解を超える内容であり『何かを掴めてくれたらいい』と言ってきた魔王様には悪いが……無理ッス！

「ぶ、部長？」

「へ？ え、な、なにかしら、イツセー？」

「あの二人の動きというか、内容というものはわかり……ました……か？」

「……………」

部長に朱乃さんは黙っていた。

木場に聞くことにした。

「なあ、木場は……「いや、僕にも無理だ」……マジ？」

「うん。アレを人の理解でする方が無理だと思う……」

木場ですら無理だと！？

なら、分かっている人は………

いた、一人だけ………

「アルクエイドさんは理解できましたか？」

「うーん、まあ、七割ほどかな？」

「十割じゃないんですか！？」

「まあねー、私も実際に幻真が戦う所見てないのよ、今日が初めてとおどけた感じで言ってくる。」

さらに次の光景で何も言えなかった……………。

龍の人が辺り一帯を埋め尽くす炎を吐いたと思ったら、幻真が魔力を込めた一撃が結果的に壁となって防いでいた。

「……………」

黙るしかない俺達、不敵に笑うアルクエイドさん、そしてちょっと心配そうに見守る朔夜ちゃんはそれぞれ、各々の表情だった。

「……………動くみたいね」

アルクエイドさんがそう呟く、幻真はこう言った。

『飛翔しろ、^{ドラゴンズ}龍軍団！！』

出てきた幻真の姿は、両腕に銃を持ち、銃口は龍の口をイメージさせるモノであり、姿も龍騎士のようなモノだった。

（イッセー side out）

夢幻龍VS魔王、魔龍聖・・・そして、メイド？メイドオオ?!Σ(。)

最後のアレは『BREACH』のスタークの帰刃である『レクレシオン群狼』の
龍バージョンだと思ってください。

姿だけが違っただけで、ほぼ能力は同じに近い感じです。

しかし、安直過ぎるネーミングだな……。

意見や感想待ってます。

夢幻龍VS魔王、魔龍聖・・・そして、メイド？メイドオオ？！Σ（

幻真side

煙が晴れた時、俺は軽鎧を纏っていた。

ただ、背中には龍翼があり、移動時は羽ばたいて飛んだり、魔力を込めることでブレードにもなる、ちょっとした隠れ武器だ。

腰にも龍翼があるが、これは俺の足を守るように覆われていた。

「さて、と.....」

気持ちを一度落ちつかせた後、目の前の敵を再び見据えた。

「やるか」

そう言った瞬間、壁が消滅すると同時にタンニーンは俺の元に迫ってきていた。

「.....殺ったー!!」

「タンニーン!! テメエはちょっと、引っこんでろ!!」

高速で突っ込んできたタンニーンを避けて、そのまま尻尾を掴んでジャイアントスイングで壁に投げつけた。

ひゅ.....ドゴン...ドゴン...ドゴオオオン!!

自身の突進力がプラスされたジャイアントスイングだった為か、地面にぶつかった後、バウンドしながら向こう側に吹っ飛んでいき、

壁にぶつかり、立ち上がるのにしばらく時間が掛かりそうだった。

「さて、戦ろうか？ サーゼクス、グレイフィア？」

「ようやく、私たちの番か」

「……では、遠慮なく……行きます!!」

そう言ったグレイフィアは言い終わると同時に魔力の球を飛ばしてきた。

俺は右手の銃で撃ち落とす為に撃った。

ドウンッ!!

バチッ!

シューウウウウウウ……

俺の弾とグレイフィアの放った魔力の球がぶつかった瞬間、消滅した。

「消滅……。ちっ、面倒さいなこれは」

「キミの攻撃は終わりなら、今度は私たちの番だな!!」

ヒュッ!

ヒュッ!

サーゼクス達は、動きを攪乱させながら消滅の魔力球を何個もこちらに放ってきていた。

俺はその動きに対応するために左手の銃で連射しまくった。

ドゥンッ！ドゥンッ！ドゥンッ！ドゥンッ！

バシユッ！

ドゥンッ！

シユウウウ……………

「くそ！」

今まで、左だけで対応出来ていたが、いかんせん数が多い為右手も使うハメになった。

もちろん避けたりもしているが、避けたところで次の攻撃が飛んでくるため結局のところ、銃を使って撃ち落としたりしているのだ。そして、サーゼクス達は何やら俺の銃撃に気が付いたようだった。

右と左、同時に攻撃してきた。

大量の消滅の力が迫っており、逃げる場所もないので両腕使って撃ち落とした。

その時を狙って、グレイフィアが右から魔力を込めた一撃を拳に乗せて振りかざした。

右手の銃で対応しようとしたとき……………

「無駄よ、その銃は威力が強い分、一度撃つたらリロードしなくてはならない。……………そして、その銃はリロードされていない。——私たちの勝ちよ！」

よく観察したのはまあ、及第点をくれてやるが……………あとは不合格だな。

「……誰が連射出来ないって言った？」「?!」

ドゥン……………

グレイフィアは銀色の魔力弾に呑み込まれた……………
幻真 side out

「サーゼクス side」

タンニーンが吹き飛ばされ、グレイフィアが消滅の魔力球を放ったところ、幻真が撃ってきた銃弾とぶつかった瞬間、お互いの球は消滅した。

「（見たまんま、銃による攻撃、遠距離か。近づかなければならぬいが、そうはさせてくれないのは当たり前……、グレイフィア、ここは攪乱させながら隙を窺おう）」

「（はい。では……行きます!）」

攪乱攻撃で隙を窺っていたがなかなか隙は出来ず、数を増やして攻撃すると幻真は苦しくなったのか、右手まで使って対応してきた。

「（……あなた。気が付いてますか?）」

「（……ああ、幻真の銃撃方法だね?）」

「（……ええ、右手は一発一発が強い分、リロードしなくてはならない。）」

「（左手は威力が劣る分、連射が可能だね。……やってみるかい？）」

「

「（はい、合図をしたら、左側からお願い）」

「（わかった）」

攪乱攻撃をしていた私はグレイフィアの合図があり、私が左側からグレイフィアが右側から同時に攻撃した。

予想通りに幻真は両腕を使って撃ち落としたが、グレイフィアはすでに右側から幻真に迫って拳に魔力をたっぷり込めて振りかぶっていたが、何故か幻真は焦っておらず、むしろ待ちかまえていた用に見えた。

そして、若干口元が嗤っていたのが見え、私は急いでグレイフィアの元に駆け寄った。

「よしんだ、グレイフィア!!」

急だったため、首襟を一気に引っ張って緊急回避した。

グイッ!

ドウン…………

寸でのところで回避出来てよかった。

「ゲホ、ゴホッ!! く、苦しいわよ、サーゼクス?」

「ああ、すまない。……大丈夫か？」

「ええ、助かったわ……」

助かったグレイフィアを見て、悔しそうにしていた。

「——あのまま気が付かなければグレイフィアをリタイヤ出来たのに……気が付くなよ、サーゼクス」

「それは危なかったな……っと！」

すかさず、撃ってきた。

「弾のスピードは覚えたし、右手も連射出来ることが分かった……。もう油断しないし当たらないよ、今度こそキミの負けだ——幻真」
そう宣言すると、幻真は再び右手の銃をこちらに向けていた。

「サーゼクス side out」

「幻真 side」

寸での所で避けられた。

「——あのまま気が付かなければグレイフィアをリタイヤ出来たのに……気が付くなよ、サーゼクス」

「それは危なかったな……っと！」

喋っている途中だったが撃つてみたが、やはり避けられた。

しかも、「弾のスピードは覚えた」といい、さらには勝利宣言まで言ってきたので魅せてやることにした。

スピードとかそんなものが関係しないモノを……。

「覚えた。……か、笑わせるなよ、サーゼクス」
「……なんだって？」

俺は魔力を銃に注ぎ込み始めた。

『ドラグ・メトラジエッタ
無限装弾龍気弾』

そこから迸るのは、空間を覆い尽くすほどの龍気弾がサーゼクス達に襲いかかった。

「「なっ!?!」」

ドガガガガガガガガガ!

途切れることなく弾丸がサーゼクス達に襲いかかる。

「弾丸のスピードを覚えた? 笑わせるな!! スピードを覚えてもこの状態でも反撃できるのかよ? ああ!?!」
「くっ!?!」

サーゼクスは周りに消滅の魔力球を何個も浮かべ、緻密に操作し弾丸を消していたが、限界が来て弾丸の嵐に呑み込まれた。

「ぐああああー!!」

サーゼクスを呑み込んだ後、しばらくの間放ち続けてそして止めた。
呑み込まれたサーゼクスは倒れて、そのまま消えていった。

『サ、サー、サーゼクス……・ルシファー様……り、リタイアで
す……』

会場は静寂に包まれていた。

「まずは一人……、グレイフィアはどこ行った？」

グレイフィアも巻き込まれたのは見えていたのだが、途中で姿を消したのである。

グレイフィアを搜索していると、不意に俺の体が拘束された。

ガシッ！

「な、何?!」

「……捕えたぞ、幻真殿!!」

「なっ!? タンニーン、テメエ!!」

「グレイフィア嬢、今がチャンスだ!!」

「……感謝するわ、タンニーン!!」

「くそ、離せ!」

グレイフィアはいつの間にか上空に居た。

落下しながら、足に魔力を込めているのが物凄く分かるの抜け出さなければならぬが、タンニーンの拘束力が尋常じゃないほど強い。

というかですね……

グレイフィアさん、アンタ、メイド服の格好で居るんだからスカート抑えろよ。

色々と見えてるんだよ……。そうイロイロと。

……。……。黒か。エロイなあ。

そんなこと考えてることより、抜け出さなければ!!

後数メートルだったので、喰らいたくもなかったのですがこの試合では絶対に使わないようにしていた能力を使うこととなった。

『時よ!』

一瞬だけ世界が止まり、再び動き始めた時にはタンニーンが拘束していたはずの幻真はそこに居らず、グレイフィアの攻撃も当たることはなかった。

「「なっ!」? いつの間に」

……。ジャガ!!

倒れこんでいるタンニーンには口の中に銃口を向け、グレイフィアには額にア当てていた。

「さあ、どうする？」

「……………」

「……悔しいけど、降s……引き分けだ……え？」

「だから、引き分けだって言ってるんだよ」

「な、何故だ？」

「お前らの最後の攻撃は本来通るはずだったんだがな、俺がこの試合では絶対に使わないようにしていた能力を使って避けたんだよ、だから、引き分けってことだ。……司会者、終わりだ。この勝負……」

…『引き分け』で締める」

『あ、はい。……この勝負の結果は引き分けになりました！！』

観衆はどよめく、自分たちの主をリタイヤしといて“引き分け”にした理由が分からなかったから。

「まあ、実際には俺の反則負けだし、治療が終わり次第話してやるよ。……真相を」

「……………いいのですか？ 条件は『勝てば』ですよな？」

「自分で決めたルールを破ったんだ、表面上は“引き分け”と言っても“負け”は“負け”だ」

「……分かりました、ちゃんと聞かせてもらいます」

「それじゃ、転送するぞ。……そおい!!」
転送した二人を見て、俺は姿を元に戻して歩いて治療ルームに向かった。

途中、イッサー達に出会ってしまっただけで喧しかったが……
（幻真 side out）

夢幻龍VS魔王、魔龍聖・・・そして、メイド？メイドオオ？！Σ（

次回は、あの事件の全貌ですね。

ただし、イツセー達には教えられません。

だって、グレイフィアとの約束ですし.....

真相（前書き）

シリアスの名を被ったシリアルになった

真相

「幻真side」

俺たちはグレモリー家専門の医療施設に居るよ。

基本的に俺はダメージを受けていないから別にいいんだがね。

しつこいのなんの、俺よりもお宅らの方を心配した方がいいんじゃないの？

「父さん、大丈夫？」

「これぐらいなら全然平気だよ」

「そうよかった……」

「……幻真、あなた、本来の姿にはならなかったわね」

「なったら、もっと酷いことになってるよ。空間割れるんじゃないの？」

「まあ、そうでしょうね……」

そんな家族の団欒(?)をしてると、向こう側からリアスが怒った表情でこっちに向かってきた。

「幻真!!」

「なんだよ、うるせえな」

「貴方、やり過ぎでしょう!!」

「あれでも充分抑えてんだよ、文句言うんじゃない」

「お兄様は全治一週間よ!？」

「むしろ、それで済んでよかったじゃねえか」

「貴方ねえ……!!」

「なんならテメエ等が俺と戦い合うか? ああ？」

「「ッ!?!」」

「お前らのみたいなガキが粋がっても俺には勝てないんだよ！俺よりも目の前のことに集中しろや。……いいのか？このままじゃお前らライザーに負けるぞ？」

「そうですよ。お嬢様」

治療を終えたグレイフィアがいつの間にか戻ってきていた。

「グレイフィア！？大丈夫なの？」

「ええ、それほど傷を負っていませんから……」

「そう。なら私達は帰るわね。お兄様によろしく言っといてちょうだい」

「はい。分かりました」

そう言っただけでリアス達は帰って行った。

「では、約束を守ってもらいますよ？」

「はいはい。で、どこで話す？」

「サーゼクス様の病室で」

移動中……

中に入るとヴェネラナさんとサーゼクス様のちいさな男の子が居た。

「お久しぶりですね、ヴェネラナさん」

「ええ、久しぶりね。……そちらの方は？」

「ああ、挨拶がまだでしたね。私の妻である、アルクエイド・G・ブリュンスタッドと娘の朔夜・G・ブリュンスタッドです」

「あら、ご結婚されたのね！ おめでとうございます。時として、アルクエイドさんは悪魔ではないですよね？」

「アルク、あの姿になってくれ」

「はい！」

なんか姿を変える時「変身」とか言ってたけど、聞こえなかったことにしよう。

そして、アルクは姫アルクになりました。

「その姿……………まさか、“真祖の吸血姫”？」

「ああ、そのとおりだ」

「口調まで変わるのですね」

「この姿……………故な」

「まあ、そんなことはどうでもよくて。——サーゼクス」

「ああ、書類はここに全部あるよ」

「……………この件にお義母さまは関わっていないんじゃないんですか？」

「——ヴェネラさんも関わっていたさ、お前をグレモリー家に預けた後、事を話したんだからな。——それじゃあ、話すとするかねえ」

そう言つて、身近にある椅子に座りながら語った。

〈幻真side out〉

〈グレイファイaside〉

幻真から語られた真相は私にとって信じがたい事実だった。

昔の主が若い女性悪魔達と交り合ったこと。

気にいらなくなったら殺して爆弾にしていたこと。

私以外のメイドも犠牲になったこと。

そして、あの日は……私の番だったこと。

「これが真実だ」

「……で、ですが！ 私以外のメイド仲間の姿はちゃんと確認できましたし、それを行ったこと判定するには……！」

「実際に見たんだよ、やられている所をな」

「……………」

「多分、お前が最後にちゃんとした姿を確認した後だな。俺が現れたのは……。酷いモンだったよ、助けようにも手遅れだった」

「そんなことつて……………」

「そこでこの“書類”が重要なんだよ」
「書類？」

一つの茶封筒に数枚の文面が書かれており、幻真が語った内容をより詳しく書かれていた。

そして、最後の文面で調査した名前の欄がさらなる衝撃を与えた。
そこにはこう書かれていた――

『カトレア・レヴィアタン』

と。

「これは……事実なのですか？」

「ああ。そうだよ、 그레이フィア。まだ関係が悪くなってないうちに調べるように頼んだのだよ」

「……………しばらく一人にさせてもらえませんか？」

「……………キミの好きなようにすればいい」

私は人が居ないところに早足で駆けていった。

＼グレイフィア side out＼

＼サーゼクス side＼

部屋を出る際、グレイフィアは目元に微かに涙を浮かべていた。

…………やはり、事実を受け止めきれないか。

「幻真、やはり話すのはまだ早かったんじゃないのかい？」

「だが、アイツはどんな真実でも受け止める覚悟が瞳に宿ってた。だから話したんだ」

「でも、あれは泣いていたわよ？」

アルクエイドさんの言葉がクリティカルヒットしたのか幻真は黙ってしまった。

「……俺、ちよつと外の空気を吸ってくる」

「……いつてらつしゃい」

ブリュンスタッド母子は、まるでどこかに行くのかを示すかのよう
に送り出す。

幻真…………頼んだよ。

＼サーゼクス side out＼

＼幻真 side＼

人気の無いところと言ったら、屋上しかないので真つ先に屋上に向
かった。

そうすると、手すりによっかかって泣いてるグレイフィアがいた。
すげえ声をかけづらい。

しばらくするとこちらに気が付いたのか、涙を拭いて立ち上がった。

「……何の用ですか？」

「いや、お前が泣くところみて何も言えない状況だ」

「なら放つといてください！」

「ヘイヘイ」

そう言ってベンチの上で仰向けになって寝ころんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気まずい空気が流れるが耐えられなくなったのかグレイフィアがこちらに寄っつきながら聞いてきた。

「——何故話してくれなかったんですか？」

「あの状況で話せると思ったのかよ？ お前は慕ってた主を殺されて怒り狂ってたんだぞ？ どう見ても無理だろ」

「ええ、だから、私はあの事件以来、貴方を恨みながら生きてきました。ですがあの時話してくれたら、少しはましな人生を送れたかもしれないかったですよ！？」

「——それは無理だな。あの時話していたら、オマエは事実には耐えられなくて自殺してるよ。……なら恨まれることで生き延びることが出来るなら、そちらの方が良いに決まってるだろう」

「それが救った相手でも………ですか？」

「そうだ。生き続けることが出来るなら恨まれることも喜んでやってやるよ」

「そうですか……。ちょっと、起きてください」

そう言われて上半身を起こしてグレイフィアに顔を向けた。

その後、強烈なビンタを貰った。

パシンッ！！

「いっつって~~~~（泣）」

「……ふん」

「グレイフィア、オマエ、魔力を手に入めんなよ！ 超痛え~~~~（泣）」

「私をバカにした罰です。だいたいですね？ 私を舐めないでください。その気になれば、それぐらいの悲しみ意地でも乗り越えて見せます！！」

「……さつきメツチャ泣いてたじゃねえか」

「もう一発欲しいですか？」

「いえ、なんでもないです」

グレイフィアは微かに笑っていた。

「……ようやく笑ったか」

「……え？」

「口元がニヤけてるぞ？」

「……笑うのも久しぶりね」

「そいつはよかったな。さて、俺は戻るか。グレイフィアもその内戻ってこいよ？」

俺はサーゼクスの病室に戻ろうとした瞬間、グレイフィアがいきなり足払いをしてきて俺は転んでしまった。

ビッタン！！

「痛ってえ！！ 何しやがるグレイフィア！！」
顔から入った為か凄く痛い。
というか俺、なんで病院でこんなに怪我してんの？

「グレイ…フィ…アさん？」
何か知らんが馬乗りになつて迫ってくる。

「待て…待て…待て。何する気だ？！」
「良いことよ」

「良いk…んんっ？！」
いきなりだ。
いきなり、キスをしてきたグレイフィアは貪る様にキスを求めてきた。
た。

「……………つぶはあ！」
「ハアハア……………」
「お前、おかしくなつたんじゃねえの？！」
「魔王の妻の口づけなんだから喜びなさいよ」
「訳が分からんがな！！ というか何がしたいんだよ、オマエは？！」
「……………つたのよ」
「聞こえないんだが？」
「……………ちやつたのよ」
「もうちよい大きな声で！」
「だから！ 好きになつちやつたのよ！！」

.....。

「はぁあ?????」

精神科ここの病院にあつたかな……………。

「いやいやいや、あり得ないから!! さっき自分で魔王の妻って
言っただけなのに何言ってるよ!!」

「愛人ってことで？」

「開き直んな! バカ!!」

「いいじゃない、サーゼクスも応援してくれるわ!!」

「しねえよ!! むしろ反対するよ!!」

「関係を作らないと毎晩押し掛けるわよ？」

「自重しろよ!!」

「自重? なにそれ? おいしいの？」

「医者!! 医者ア!! マジで来てくれ!! ここに重症者がい
るんだ!! (特に精神が)」

そんな感じで腕にひつついたグレイフィアをどうにかしながら俺は
サーゼクスの病室に戻った。

（幻真 side out）

真相（後書き）

カトレアとは当時はまだ溝は深くありませんので頼めることが出来ました。

そして、グレイフィアさんはニコ動の【MUGENストーリー】のラスボスインストール・・・
マジで押し掛けてきます。

覚悟（前書き）

全部入らなかった・・・orz

覚悟

〈幻真side〉

はい、今現在、俺たちはリアスVSライザーの試合を観戦中だ。というかもう終盤だけだね。

で、今はライザーとイッセーが戦り合っているんだが、音が凄いいい。

ライザーが殴る度にイッセーは吹き飛ばされ、再びおぼつかない足で立ち上がりライザーの元に向かい、そしてまた吹き飛ばされるというのがすでに5分以上繰り返されていた。

その光景を皆、固唾と見ている。

途中で俺は気が付いた。

イッセーの意識がもうすでないことを……………

だが、イッセーは立ち上がってまたライザーの元に向かって行く。

「……………やはり、面白い」

「なにがだい？ 幻真？」

「イッセーは鍛え次第によっては化けるな……………それも相当に。しかも……………」

「しかも？」

「ああいう男ほど恐いモノはないぞ？ 特に誰かを必死で護ろうとするヤツってのは、な」

「そうか……………」

俺とサーゼクスの話が終わると同時にリアスの投了^{リザイン}の宣言が聞こえた。

サーゼクスはグレイフィアとなにやら話し込んでいた。

絶対何かしでかすつもりだ。

「……幻真達もパーティーに来るといい。招待するよ」

「いいのか？ 悪魔でもない俺たちが行っても？」

「私の友人だからいいさ」

「また強引なことを……」

「では、これを渡しておくよ。また会おう」

そう言つてサーゼクス達は去つていった。

俺の手元には魔方阵が書かれた札が一枚残つた。

どうやら、これに魔力を込めれば会場に直通みたいだ。

「さてはて、どうなるかねえ？」

〈幻真side out〉

〈リアスside〉

私の前でライザーとイッセーが殴り合っている……。

いや、ライザーが一方的に殴っていた。

初めてのレーティング・ゲームで怖い思いも何度も経験してるのに、イッセーは明るく振る舞い、今も必死にライザーと対峙している。

ドゴンッ！

再び殴り飛ばされたがフラフラになりながらも立ち上がりイッセーは向かつて行く。

「止めなければ！」と思いイッセーの前に立ちはだかった時に見た

光景は衝撃的だった。

すでに意識は無く、至る所が傷だらけで涎もダラダラ出していた。
こんなになるまで頑張って……

私はイッサーのほっぺを触れて、やさしく囁いた。

「ありがとう、イッサー………　こんな私の為に頑張ってくれて」
そう呟くとイッサーは力が抜けて、立ち上がることはなかった。

「このゲームを……^{リザイン}投了します」

私はこの敗北を絶対忘れない！

宣言するとイッサーはすぐさま医療施設に転送された。

次の日……

私は婚約パーティーの会場に居た、ドレスを着て。

会場内には朱乃たちもついてきてくれた。

その時、入口付近に転送されてきた団体が来た。

「………つと、来たぞ。サーゼクス」

「やあ、幻真。ようこそ」

あの男は上級悪魔が大勢いる中、堂々と道の真ん中を歩いて私達の前に来た。

「今日はお招きどうも」

「いやいや、よく来てくれた。楽しんでいってくれたまえ」

「……はいよ」

軽い挨拶のあと、少し離れたところに立つ幻真達。

幻真達が来たあと、しばらく時間が経った頃に、扉が開かれ、開けた人物はなんと――イツセーだった。

「リアス side out」

「イツセー side」

俺の目の前に大きな赤いナニカが俺に向けて、喋っている。

『そんなんじゃ何時まで経っても奴に笑われるぞ?』

「誰だ、オマエは?」

『赤い龍の帝王、ウエルシュ・ドラゴンドライク。兵藤一誠、お前の左腕に宿りし者だ』

「ウエルシュ・ドラゴン……ドライク……」

『俺はいつでもオマエに応じよう。力が欲しいなら与えよう。お前が払った犠牲に俺はそれにふさわしい対価を与えよう。そして嘲笑った連中に見せつけてやるがいい「ドラゴン」という存在をな。……それとアイツの前に居るんだみつともない姿は見せるなよ?』

「……アイツって誰だ？」

『——夢幻龍さ』

そのあと俺は目を覚ました。

「目覚めたみたいですね」

後ろにはグレイフィアさんが立っていた。

ここで俺が寝ていると言う事は負けたのか……俺は情けない。

あそこまで啖呵切ったのにあのザマじゃ……

そのとき、グレイフィアさんから声を掛けられた。

「……納得しませんか？」

「……はい」

「なら、伝言とこれをお渡しします」

そういうと俺の手に一枚の魔方陣を渡してきた。

「これは？」

「お嬢様の会場に向かえる魔方陣です。そして伝言です。

『妹を助けたければ、会場に殴りこんできなさい』と私の主である、サーセクスさまからの伝言です。

もし、お嬢様を奪還できたら裏の魔方陣をお使いください。必ずお役に立つと思います」

そういつてグレイフィアさんは部屋を去った。

入れ違いでアーシアが入って来た。

俺はアーシアに頼んである物を取ってくるように頼み、そして、ウエルシュ・ドラゴン……いや、ドライグを呼び出した。

「（おい！ ウエルシュ・ドラゴン、ドライグ！！ いるなら出て来い！！）」

『ああ、なんだ、小僧。俺になんの話した？』

話しこんだ後、俺は着替えてアーシアからある物を受け取り、魔方阵を使つて部長達が居る会場に乗り込んだ。

「部長オオオツ！！」

開けた扉の先は豪華絢爛な造りで知らない上級悪魔がたくさん居ただけど、木場たちや幻真たちを発見出来た後、俺は大きく息を吸い込み叫んだ。

「部長—— リアス・グレモリーさまの処女は俺のもんだっ——！！」

そう叫ぶと会場は騒がしくなり、衛兵らしき人がこちらにやってくると思つたら——

「ハハハハハ！！ 最高だよ、イツセー！！」

「幻真？」

「イツセー、覚悟は出来てるか？」

「ああ！！」

「なら、俺が舞台を創つてやろう！！ その前に邪魔者は…… っと」
幻真は指を「パチンツ！」と鳴らすと近くまで来ていた衛兵たちの距離が開いたままこちらに寄ってこなくなった。

「これで邪魔はされない。さあ！ イツセー、たった一歩だ。一歩踏み出せ！！ そうすれば、俺がお前をリアスの元まで送ってやるうー！！」

「行くぞ、幻真！！」

そういい俺は一步踏み出した——瞬間、俺は何故か部長の目の前まで来ていた。

「「「「「！？」」「」「」」

「ど、どうやったの？」

「ここには人が多すぎるから企業秘密だ。それと「パチンツ！」……もういいから戻しておくか」

そうすると、衛兵たちは先程まで俺が居た場所に向かう事が出来ていた。

衛兵たちは全員首を傾げていた。

「さあ！ 舞台は整った！！ イツセー、思うがままにやればいい……！！」

「助かったぜ、幻真！！」

そこにサーゼクス様のお声が掛かった。

「可愛い妹の婚約パーティーを派手にやりたいと私は思ってる。そこでドラゴン使いのキミとフェニックスであるライザーくんの戦いをやってもらいたい。」

伝説の生物同士の戦いです。最高に盛り上がると思いませんか？」
会場全員はそれを聞くと黙ってしまった。

「さて、ドラゴン使いくん、お許しは出たよ。キミが勝った場合何が欲しい？ 爵位かい？ それとも絶世の美女かい？」
そう誘惑してくるが俺の願いはすでに決まってる。

「俺の主であるリアス・グレモリーさまを返してください」

「分かった。キミが勝ったら、リアスを連れて行けばいい」

そのやり取りのあと、急遽会場の中央を開かれ、戦場^{リング}が出来ていた。

さあ、ここからが本番だ！！

＼イツセーside out＼

覚悟（後書き）

衛兵たちとイッサーにやった術は距離感を弄りました。

衛兵とイッサーの間は見た目よりもメチャクチャ距離を引きのばし、イッサーとリアス達の間は距離を極限まで縮めました。

赤帝龍VS不死鳥（前書き）

原作二巻終了！

赤帝龍VS不死鳥

（イツセー side）

今俺たちは会場の真ん中に居る。

審判は幻真が立ち合うこととなった。

「そんじゃ、双方準備はいいか？」

俺とライザーは同時に頷く。

「では――――始め！！」

俺がやることは一つ！！

「部長！ この場で『プロモーション』を許してください！！」
そう叫ぶと部長は頷いた。

「『プロモーション』！ 『女王』！」

『女王』に昇格した為か、体全体に力が漲り、最初からクライマックスで行くぜ！！

そして、俺は部長に今、ここで誓う！！

「部長！ 俺には全く才能がありません！ それでも最強の『兵士』になりますッ！ あなたの為なら、俺は神様だってぶっ倒してみま

すッ！ このブーステッド・ギアで！！ 俺の唯一の武器でッ！
俺はあなたを守ってみせますッ！」
だからこそ俺は……。いや、仲間たちとともに強くなってみせる
！！

「輝きやがれえええええ！！ オーバーブーストオ！！」
『Welsh Dragon over booster！！！！』

会場全体に赤い光が覆った。
そのあとドライグから宣言された。

『使ってみせろ、兵藤一誠。ただし、十秒だ。それ以上はお前の体
が保てない』

「（そんなこと分かっているさ。——だが、十秒もあれば！！）」

『「俺たちは奴を殴り飛ばせるッ！！」』

赤い光が収まっていくと同時に飛びだした。

「これが龍帝の力！ バランス・ブレイカーステッド・ギア・スケイルメイル 禁手、『赤龍帝の鎧』だ。止めたきゃ、魔王
様にでも頼みこめ！！」

『？』

カウントが始まった以上、時間がない。

一気に決める！！

（イッサー side out）

（幻真 side）

赤い光が全体を覆った思ったら、そこから赤い鎧を纏ったイッサーがライザーに突撃していった。

それにしても禁手か……

考えたな、イッサー。

今のイッサーにはほんの数秒しか扱えないだろう、だが、殴り飛ばすのには十分な時間だな。

だが、疑問が一つある。

「どうやって、禁手まで持っていけたか……だな。代償なしに発動は出来ないハズだ」

ほんの数秒の間でライザーはようやく本気になったらしい。

不死鳥の炎を自身に纏わせて、イッサーに突っ込んでいき、再びインファイトが始まった。

その時、あのライザーが大量に血を吐いた。

イッサーのクロスカウンターが原因みたいで手に何かが握られていた。

「ほお……、やるじゃないか、イツセー」

イツセーが握っている物は十字架だった。

おそらくアーシアに借りたものだろう。

確かにアレなら、例え不死鳥でも元が悪魔だから効果は絶大だな。

「だが、貴様にも激痛の筈だ！！　いかにドラゴンの鎧で……まさか……！！」

「そうだ、俺は左腕丸ごとを犠牲に払う事でこの力を手に入れた。代わりに左腕はドラゴンの腕となっただけだな」

「お前、正気か！？　二度と元には戻らないんだぞ！！　そんなことをして……」

「それがどうした……『？』……左腕一本で部長が帰ってこれるんだぜ？　むしろ破格の取引だろうが！！」

そう叫んだ後、殴り合うが若干イツセーが押されつつあった。

ライザーは一瞬の隙をついて、イツセーの首を掴みそのまま意識を失わせようとしたが、イツセーは懷から水のようなものを取り出した後、『譲渡』の力でソレを高め上げてライザーに振りかけた。

「うがああああああああッ！！！！」

どうやら、振りまいた物は聖水だったらしい。

それによりライザーは痛みにした打ち回っていた。

対してイツセーは急激な禁手だった為か、鎧の具現化がどんどんと消えていき、ドラゴンと化している左腕のみに力を集束していた。

どうやら、終わりが近いな、これは。
＼幻真 side out＼

＼イツセー side＼

左腕に十字架＋聖水を掛け合わせて『譲渡』の力でさらに高め上げたのをライザーは強張り、体を引いていた。

俺は皆から教わったことを口に出しながら、奴に狙いを定め……後は叩き込むだけとなった。

狙いを定められたライザーは慌てて、なにやら「悪魔の未来」とか言ってきたが……

「んなもん、俺は知らんツ！　だが、お前は部長を泣かせた……俺がテメエを殴る理由は十分だアアああ……」

ドゴオオン！

「ガハッ……」

ライザーは血反吐を吐きながら、倒れ込み、その場では二度と立ち上がることは無かった。

「……………部長、帰りましょう」

部長の手を取り、グレイフィアさんに渡された魔方陣の裏側を向けた。

キユイイイイイン！

大きな鷹なのかライオンなのか分からないが、四本足の生物が目の前に現れた。

会場の誰かが小さく呟いた。

「グリフォン……」

グリフォンね……、コイツに乗って逃げろと言う事かな。

俺は先に乗り、その後部長の手を取って、俺の前に乗せて先程俺が激突して作った穴から会場を飛び出る瞬間に……

「部室で待つてゐるからな！！」

と大声で叫び、木場達に手を振りながら飛んでいった。

「イツセーside out」

「幻真side」

イツセー達が去っていった後、自然にパーティーもお開きとなった。俺たちも帰ろうとした時、ライザーの妹が来ていた。

「あの、幻真さま……」

「ん？ ああ、えーと……」「レイヴェル・フェニックスと申します」
「悪いな、レイヴェル」

「いえ、名乗ってませんでしたから。それですね。あの、その……」

……」

「お茶会のことか？」

「は、はい。日程の方を伺いたくて来ました」

「俺はいつでも大丈夫だぞ？」

「ほ、本当ですか！」

「うおっ?! ああ、まあな」

「では、三日後、こちらに来て頂けますか？」

「いいけど、場所どこだ？」

「場所ですか……？」

「俺が冥界で知ってる場所と言えば、グレモリー家ぐらいだからなあ」

「では、三日後、グレモリー家の前に来て頂ければ、お迎えを出しますので……」

「分かった。楽しみにしてるよ」

「………は、はい／＼／＼」

顔を赤くしながら、去っていくレイヴェル。

俺何かしたかな？

「いやいや、幻真は凄いなえ」

「サーゼクスか、何のようだ？」

「ただの挨拶と………お礼かな」

「ただ俺は“舞台”を創ってやったただけだぜ？ お礼を言われる筋合いは無いと思うが？」

「それでも間接的にリアスを助けてくれたんだから、お礼はいいものなんだよ。……有難う幻真。妹を助けてくれて」

「まあ、受け取っておくよ。で？ 挨拶じゃないんだろ？ 本当のところは」

「ああ。幻真、キミはいつ彼女を口説いたんだい？」

「それは………どっちだ？」

「…………どっちとは？」

「レイヴェルかグレイフィアか」

「そんなの決まってるだろう？——両方だ」

「デスヨネー。というか俺は口説いちゃいねえ！！」

「でも、レイヴェルの表情は間違いなく好意の目だったよ？」

「コイツ、間違いなく楽しんでいやがる。」

「…………俺に一夫多妻制でもしろってか？」

「そこまで分かってるなら、やってしまえばいいのに……………」

「やめてくれない！？ 第一アルクがそんなこと許すハズない……

……「私は良いわよ？」……………はい？」

「幻真ならどれほど妻を持っても、全員愛してくれると分かっている」

「どうなんだい、幻真？」

「…………まあ、愛しますけどね？ 俺の身が持たないっていうかその辺が色々心配なんですよ。…………今も狙われてるし」

「そういえば、グレイフィアが関係を作る様に迫ったそうだね？」

「どうにかしてくれよ……………」

「私には無理だ…………が、母上が制止の声を出したら止まると思うよ。

…………ただ」

「なんだ、その途切れの悪さは？」

「ただ、母上がGOサインを出してしまったら、もう諦めてくれ」

「お前の親父さんが居るだろう？！」

「父上は母上に上がらないんだ……………」

「グレモリー家って実権は、女が握ってんのかよ！！」

「チクショウ！！」

「この展開は逃げ場がない気がする……！」

「俺はこの事実にとてつもなく頭を悩ませた。」

次の日・・・

イツセーの家にリアスが引っ越してきたらしい。

イツセーの親父さんとお袋さんは大喜びしていた。

近いうちに俺たちとイツセーの両親を合せるとか言っていたな。
スケジュールがエライことになるとるがな。

出来れば、サーゼクスからの報告が良いことを願おう。

〈幻真side out〉

赤帝龍VS不死鳥（後書き）

もう何も言えない・・・

お茶会（前書き）

真恋姫と同時更新だー！！

お茶会

「幻真side」

よう、幻真だ。

今、非常に困ってることがあるんだが聞いてくれないか？

……ベッドで寝てたら、いつの間にかグレイフィアが隣で全裸になっ
て寝ていたんだよ。

朝、起きたら……手元にさわり心地の良い感触だったから「なんだろう
つか？」と思ったら、グレイフィアのおっぱいだっただよ……
…。

Oh………

この一言に尽きたね。

というかいつの間に俺の部屋に入ってきた？！

おかしい、オカシイぞ？！

つか、ここにコイツが居るってことはまさか……！！

通信中……

「サーゼクス！！」

『いきなりのモーニングコールを出してきたのは……幻真か。ど
うしたんだい？』

「グレイフィアの件はどうなった！？」

『あー、……非常に伝えにくいんだが母上がGOサインを出した

ようだ……」

「ちよつと……マテやーーーー！！！！」

『まあ、頑張ってくれ』

「チクシヨウがー！　ヴェネラナさんと呼んでくれー！」

『ああ。……母上、幻真が代わって欲しいと。「はいはい」お早うございます。幻真さん』

「ああ、お早うございます。……じゃ、なくて！！　どついう事だ！？」

『だって、グレイフィアの気持ちを考えると止めさせる方が酷じゃない？』

「俺の身も考えてくれませんかねえ！？」

『それに……フェニックス家の息女をご存じでしょ？』

「ええ、レイヴェルですよね？」

『あの子、貴方の事ばかり最近話してるようですし、先手を打たれる前にやつとかないと……』

「アンタは情勢を引つ掻き回したただけか！？」

『あとわ……』

オイ、今、物凄く不穏当な発言が聞こえたんだが俺の気のせいかな？

『……ゴホンッ！　とにかく、グレイフィアとガンバってください』

「それはどつちの意味だ、コラ？」

『では、失礼します。……まあ、幻真ガンバレ』

ブツッ……

そこで通信はきれた。

俺にどないせい言っんだよ。
どーすんだ？ この状況？
悩んでいるとグレイフィアが起きた。

「……………うゝん、あら、お早う幻真」
「お早うじゃねえよ、グレイフィア。なんでココに居るんだ？」
「昨日、夜遅くにこっちに来た時にアルクエイドさんにあって話したら、了承を得たわ」
何、あっさりOK出してんの？

「と言うわけでやりましょうよ」
「脈絡がおかしいし、やらんがな！！」
「なら無理矢理でも……………」
「なんで休日からこんなに忙しいんだ！！　　っーか、今日はレイヴエルとお茶に誘われてんだよ！！」
「そういえばそうね……………」
「だから、着替えさせる」
そう言っつと、おとなしく下がった。

「……………うん、そうよね」
なんか呟いてるが気にせず、着替える。

「そのお茶会に私もついていくわ」
「……………はい？」
耳がついにおかしくなったかな……………

「私もついていくって言ったのよ」

「お前、仕事は？」

「今日はお義母さまに言っで、休みを貰ったわ」

「だから、あんなに念を押していたのか！！」

「だいたい、貴方、フェニックス家の行き方知らないでしょう？」

「グレモリー家まで迎えに来る話になってたんだよ」

「なら今すぐ行きましょう」

「早いし、お前もなんか着ろよ！」

「そうね、忘れてたわ」

「忘れんな、後が面倒だろうが（主に俺が説明するのに）」

着替え始めたので、俺は外に出て、リビングに向かったら案の定、アルクと朔夜が居た。

「あら、お早いことで」

「お早う、父さん」

「朔夜、お早う。そして、アルク……どういうことだ？」

「なにが？」

「なんで、グレイフィアにOKを出した？！」

「いいじゃない、別に。私も彼女の気持ちを考えたら、同じことをすると思うし。幻真だって多少は食べてみたいでしょ？」

「100%ないって言えば、嘘になるが……それでもマズイだろ！？」

「私は妻が何人増えても構わないわよ？」

「そこまで発展してねえよ！！」

ダメだ、これは……

何言っても、丸めこまれる。

朔夜は近づいて来て言ってきた。

「父さん、大丈夫？」

「朔夜だけが俺の身を心配してくれるのは嬉しいな」

「ん……………（ナデナデ）」

頭を撫でられた。

あー、和む。

「取り敢えず、今日俺はレイヴェルにお茶会誘われているからな」

「はいはい。私達はイツセー君の家に居るから」

「なんかあつたっけ？」

「今日は私達で挨拶に向かうのよ、幻真がまた今度だつて」

「分かった。「幻真、行くわよ」……………まあ、そう言う事だから行ってくる。朔夜も礼儀よくね」

「はい」

その後、無理矢理手を引っ張られ、グレモリー家に移動した。

そこで、またヴェネラさんとサーゼクスに説明するのが面倒だった。

「幻真side out」

「レイヴェルside」

今日は、幻真様が来られるという事で緊張していつもより早く起きてしまった。

そこからはお茶会のセッティングとか服装とかを何度も何度もチェックした。

「レイヴェル、少しは落ち着きなさい」

「で、でも、お母様……」

「そんなに慌てていたら、いざというときに笑われてしまいますよ？」

「……………!!」

「落ち着きましたか？」

「……………はい」

「では、そろそろ時間ですわね……」

「迎えを出します」

そう言つて、グレモリー家に行つてもらつた。

ううう、やっぱり緊張する。

〈レイヴェル side out〉

〈幻真 side〉

グレモリー家の門の前に立つてるとフェニックス家の方が来て、「こちらにどうぞ」っていうから、その人達の近くに行ったら下からフェニックス家の魔方陣が浮かび上がり、「カツ！」と光り、目を開けた時にはフェニックス家の門の前まで来ていた。

「……………グレモリー家だけではなくフェニックス家もデカイな」

「まあ、基本的に公爵家は皆、家は大きいわよ。というか、貴方の家も大概でしょうに」

「それを言っちゃお終いなんだけどよ」

と話していると、門が開いて声がした。

「ようこそ、フェニックス家へ。……………歓迎します、幻真様、 그레이 フィア様」

間違いなく、レイヴェルだった。
つか、ドレス着てるし、そんなに気合入らなくてもいいのに。

「お招きどうも。レイヴェル」

「い、いえ………／＼／」

「綺麗だな。ドレスを着ているとより美しく見えるぞ」

「………／＼／／」

思ったことを言っただが、不味いかもしれん。
顔が真っ赤になってる。

そして、超不機嫌なグレイフィア。

「………グ、グレイフィア様も来て頂いてくださって有難うございます」

「今日はメイドの仕事がないから、普通にしてくれて構わないわよ？　ここに居るのは“幻真を愛しているただの女”だからね」

先制攻撃を仕掛けたのはグレイフィアだった。

レイヴェルが一部の言葉に反応したあとレイヴェルも負けずと反撃した。

「私も今は“幻真様の妻になりたい女”ですので……」

グレイフィアがジャブなら、レイヴェルはストレートだな。

その後、二人の視線の間には火花が散ってるのが見えた。

「いや、一夫多妻制は人間界では無理だからな？」

「「なら冥界で創ってください」」

なんでそこで意気が合うんだよ、おかしいだろ。

「第一、俺は冥界で土地を持ってねえよ」
「「なら、私達の領地に来てください」」
なにこれ怖いんだけど……………」

「取り敢えず、座ろうぜ」

「そうでした、どうぞこちらに……………」

「…………… 負けないわよ」

乙女の戦いはどうやら続くらしい……………

〈幻真side out〉

〈グレイファイside〉

レイヴェルと挨拶をした後、幻真がレイヴェルの服装の感想を言ったら、予想通りに顔が真っ赤になっていた。
やはり、レイヴェルは幻真に惚れてるわね。
なら、先制した方がいいわよね……………。

「今日はメイドの仕事がないから、普通にしてくれて構わないわよ？　ここにいるのは“幻真を愛しているただの女”だからね……………」
そう言うのと、負けずにレイヴェルも素早く反撃してきた。

「私も今は“幻真様の妻になりたい女”ですので……………」
ッ！

中々、大胆なこと言うじゃない……………。
そうして、私とレイヴェルは睨み合った。

これは今日の夜から、襲った方がいいかしら？
取り敢えず私達は、お茶会を始めることにした。
くグレイフィア side outく

くレイヴェル sideく
グレイフィア様から“幻真を愛しているただの女”と言われた時、
ちよつとムツ！つと来た。
だから、恥ずかしいけど、負けたくなかったから反撃した。

「私も今は“幻真様の妻になりたい女”ですので……」
これはもう堂々と、「私は幻真様と結婚したいです」と言ってるよ
うだが、女として負けたくなかったから言い切った。
だけど、やっぱり凄く恥ずかしい。
取り敢えず、移動してお茶会を始めることにした。

「フェニックス家、特製の紅茶です」
「「頂きます」」
「……うん。美味しいな」
「ええ、香りもいいわね」
「有難うございます」

幻真様はカップを置いた後、突然兄の事を聞いてきた。

「……ライザーはあの後、どうなった？」
「負けたことがよほどショックだったのか、部屋には一步も出ずに
塞ぎこんでます」
「心も体も軟弱過ぎんだろ………」

「ええ、全く……」

「バツサリといったな……」

「事実ですので……。それに私は今お兄様の眷属ではありませんし……」

「どういうこと？」

「お母様の空いている『僧侶』とトレードしたんですわ。だから、今はお母様の眷属という事になってますの……」

幻真様は『トレード』と言う単語が分からなかったらしい。

そこにグレイフィア様が詳しく説明してもらった。

「幻真、『トレード』と言うのは、相手の駒と自分の駒を交換するのよ」

「そんなことが出来るのか？」

「ええ。ただし、交換には交換するモノと対等な価値が必要だけだね……」

「そーなのかー」

「ところで、幻真様は悪魔では無いんですよね？」

「ん？ ああ、そうだな。龍人だしな」

「……転生悪魔はどうですか？」

「んー、出来ないんだよね。根本的な問題でね」

「そう言えば、幻真。貴方って龍人って言うけど、元は何なの？」

「これは俺の勘だが、近いうちに何かが起こるね。それも世界を揺るがすほどの“何か”が……その時になれば分かるかもよ？」

引っかかるような言い方をした幻真様は再び、紅茶を飲んでいた。その後は、お茶を飲みながら、会話を楽しんだ。

三時間経過……

「さて、そろそろ帰ろうかな」
「なら、門までお送りします」
「別に良いぞ、そこまでしなくても……」
「私がしたいだけですから……」
「……サーゼクスはちゃんと仕事をしてるかしら？」
「してんだろ、アレでも魔王だぞ？」
「でも、結構イタズラ好きですよね？」
「そうなのよ……」
グレイフィア様はため息をついていた。
……苦労してるんですね。

「ああ、そうだ。レイヴェル」
「はい。何でしょう？」
「俺を呼ぶ時は、『幻真』って呼び捨てで構わないぞ？」
「ええ！？ そんな恐れ多いです！！」
「あ、私もメイドの仕事がオフの時は『グレイフィア』って呼び捨てで良いわよ？」
「でも！！ な、ならせめて『幻真さん』と『グレイフィアさん』で勘弁してください」
「まあ、時間が経てば、自然と呼べるだろうから、それでいいぞ」
「私も同じよ」……だつてさ。はい、言ってみな？」
「げ……幻真さん、グ……グレイフィアさん」
「ん！ よく出来ました（ナデナデ）」
「ひゃっ！？」
いきなり頭を撫でられて、びっくりしたけど……幻真さんに撫でられるとなんか気持ちいいというか心が落ち着く。

「今日はお茶会に誘ってくれて有難うな」

「……………楽しかったわ」

「そう言ってくれると嬉しいです」

幻真さんから少し離れると、魔方阵が光り出し始めた。

「今度、ウチに来るといい。それなりにもてなすよ」

「はい。……………是非」

「「じゃあな（さようなら）」」

そう言った二人は消えた。

今日はとてもいい日でしたわ。

＼レイヴェルside out＼

＼幻真side＼

グレモリー家から俺たちは別れ、無事に家に着いた。

「ただいまー」

「「おかえりー」」

「どうだった？」

「とても面白かったわよ、そっちは？」

「アルクが「妻が何人増えても構わない」っていう発言したから、エライことになりそうだよ」

「いいじゃない、楽しめるんだから」

「よくねえって……………」

「あ、そう言えば、今日イッセーくんの家に教会の連中が来たわ」
「何故に？」

「なんでもこの街に入った神父が次々と殺されているそうよ」

「へえ……で？」

「だから、この街を取り仕切ってるグレモリーと交渉したいんですって、その時に私達も出てきて欲しいそうよ」

「メンドクセえ……」

「明日の放課後、部室に来て頂戴だつてさ」

「また厄介事か。考えるだけで嫌になるから俺は寝る」

「お休みー」

そうして寝た俺であつたが、ベッドに入って数十分後……何かが来る気配がしたので高速で回避したら、グレイフィアが襲ってきた。

「また、来やがつたな!!」

「襲わせなさいよ!!」

「フザケんな!! はよ帰れ!!」

俺はグレモリー家に強制送還させた。

「ふう。これでようやく寝」……「幻真？」……今度はアルクかよ!!」

だが、アルクにはお仕置きをしないといけないし。やらせてもらうか。

「悪いが、ちょっとストレス溜まつてるから……やらせてもらうぞ!!」

その後はアルクの体の隅々を愉しみました。

〈 幻真 side out 〉

その後のアルクには、よがってもらいました。

あー、気持ちよかった。

お茶会（後書き）

レイヴェルマジ乙女。

グレイフィアはMUGENストーリーの某ラスボスインストール。

ネタ分かる人いるかな？

というより、グレイフィアの性格ブチ壊しになった。

交渉

＼幻真side＼

やった後の朝は辛いな。

いや、加減忘れてやりまくったから腰が動かん。

とはいえ、今日は交渉とかしないといけないし、まあ行くか。
その前にシャワーを浴びねえと。

ちよつとまってね！！

浴びた俺は、未だに寝ているアルクを起こしにいった。

「おい、アルク。学校に行くぞ」

「ええゝゝ、ねーむーい！！」

「交渉に出てくれて言われたんだろ？ 朔夜も準備出来てるし、
後はアルクだけだぞ？」

「じゃあゝゝ、今日もやって？」

「……二日連続かよ。理性もつかない？」

「じゃあ、起きるゝゝ」

「シャワー、浴びて来い」

「分かったゝゝ」

そう言いながら、全裸で向かった。

基本アルクは家に居る時は、裸＼シャツが多いが、やった後とかは
全裸で動きまわる。

だから、二階にも風呂場を創った。

これなら、下に客が来ていてもハプニングは起きないのだ。

「ふう、さっぱりした」

「衣服どーすんだ？」

「こちらの姿でいこう（一回転して姫アルクに変わりました）」

「んじゃ、俺の手を握ってくれ」

「うむ」

「はい」

握った瞬間、移転した。

移転した場所は、オカルト研究部の部室の前だった。

ちょうどその時、向こう側からイッサー達 came。

「よう、イッサー」

「幻真！？ 何時来たんだ？」

「さつき、直接飛んで来た」

「なるほど……アルクエイドさんの姿なんか変わってない？」

「まあ、教会の使者が居るからな、それなりの服装で来たんだよ」

「じゃ、入るか」

ガラッ……

入ったら、二人の女性がリアス達と対峙しており、木場は物凄く彼女たちを睨んでいた。

まあ、当然だよなあ。

自分達を間接的に殺したモノが目の前にあるんだから。

「リアス、来てやったぞ」

「ご苦労様、幻真。紹介するわね、こちらが紫藤イリナでもう一人の女性が「ゼノヴィアだ」……だそうよ」

「ご丁寧にどうも。アルクエイド・G・ブリュンスタッドの夫であり、朔夜・G・ブリュンスタッドの父である、幻真・G・ブリュンスタッドだ。今回はこの交渉に参加してくれということでの場に参った」

「……一つ聞きたいがいいか？」

「なんだ？」

「……貴方は“龍人”か？」

「いかにも。龍の中でもとりわけ、長い年月を生きている最古の龍だ」

「では、貴方の子である。朔夜と言う子は……」

「ああ、真祖の吸血姫と龍のハーフだ。まあ、こちらの話はどうでもいいから交渉を始めな、本来の要件はそちらだろう？」

「……そうよ、ゼノヴィア」

「ああ、そうだな」

ゼノヴィアは席に戻り、交渉を始めた。

（幻真 side out）

（イツセー side）

最初に切り出してきたのは紫藤イリナだった。

「先日、保管・管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

え？

エクスカリバーって一箇所にあるんじゃないのか？
そんなことを考えてると部長が――

「聖剣エクスカリバーそのものは現存してないわ」

部長が俺の心を見透かしたように言う。

「ゴメンなさいね。私の下僕の中には成り立てもいるから説明込みでいいかしら？」

「ええ。イツセーくんエクスカリバーはね大昔の戦争で折れたの」

そう言つて、包みを解いた瞬間、戦慄――、恐怖――、畏怖――。
――。

そのような感情が全身の毛穴から冷たく流れ出た。

「折れたエクスカリバーの刃の破片をかき集めて、錬金術で新たな姿となった。

それが七本作られた。その一つが――」

髪に緑色のメッシュを入れる女性が持っている包みを解き、見せた。

「これが私の持つてるエクスカリバー『破壊の聖剣』エクスカリバー・デストラクション。七つに分かれた聖剣の一つだ。私の所属するカトリックが管理している」
その後、すぐに布で覆った。
よく見ると、その布にはいくつもの呪術の文字が記されていた。
普段は封印されているらしい。
イリナも取り出した。

「これは私が持つ『擬態の聖剣』エクスカリバー・ミミック。文字通り、色々なモノに擬態が出来るわ。こんな風にね」

そういうと、一振りの日本刀が紐みたいになった。

「イリナ、エクスカリバーの能力を悪魔に教えなくてもいいだろう？」

「あら、ゼノヴィア。いくら悪魔でも信頼関係を築かなければこの場はしょうがないでしょう？ それに知ったところで悪魔には遅れをとらないわ」

そう自信満々に言う。

そこに幻真が口を出した。

「管理がずさんすぎるだろ」
「.....」
「で、盗んだヤツの見当は？」
「『神の子_グを見張る者_ゴ』だ」
「『神の子_グを見張る者_ゴ』かよ、メンドクセえ」

「盗んだ連中の主は、グリゴリの幹部、コカビエルだ」
「…………コカビエル。古の戦いから生き残る堕天使の幹部……。聖書にも記されている者の名前が出てくるとはね」

部長も相手の名前に苦笑していた。
それに対して幻真は――

「コカビエル、あの戦争大好きヤロウか……。厄介なヤツに盗まれやがって」

と表情には「面倒くさい奴が来た!」と言う表情だった。
というか、堕天使の幹部?!
この街に堕天使が来てんのかよ!? 話が大きくなってきたな。

「で? 本題は?」

「…………私達と堕天使たちのエクスカリバー争奪の戦いに悪魔側は介入しないこと」

「――断る」

「――ふざけてるの、貴女?」

部長が片目を釣り上げてかなりキレていた。

そして、幻真、お前何言ってるの?!

「幻真さんはなんていったのかしら?」

「断るって言ったんだよ。俺は元々コカビエルが好きじゃないしな
…………まあ、あまりにも調子に乗ってたら「プチッ!」と潰すか

ら」

「……私も幻真と同じ気持ちだ」

「父さん、母さん頑張れー」

余裕あり過ぎだろ、ブリュンスタッド家一同。

「ま、悪魔側は干渉しない。ウチは干渉する。これでOK?」

「……ああ、分かった」

そして、ゼノヴィア達は俺の後ろに居るアーシアに目を向けられた。

「まさかと思うが“元”『聖女』のアーシア・アルジェントか？

このような極東の地でお目にかかるとはな……」

アーシアが「ビクツ！」と体を震わせた。

その後のゼノヴィアとイリナの視線は害虫を見るような眼だった。

「まだ『神』を信じているなら、私達に斬られる。今なら神の名の元に置いて断罪しよう。我らの『神』なら救いの手を差し伸べてくれるだろう」

そこから言いだされた言葉は理不尽な言葉だった。

俺が言いだそうとした時、幻真が割り込んだ。

「————黙れ、小娘」

そこに居たのは先程の軽い幻真ではなく、風格のある幻真だった。
（イツセーside out）

く幻真sideく

ゼノヴィアが勝手な言い分を言ったときの言葉に俺は反応した。

“神”

まるで自分達は生存していた『神』とあつて来たような言い分だった。

だから、俺は割り込んだ。

「——黙れ、小娘」

「……………なにか用か？」

「彼女が何故『聖女』から『魔女』に変わってしまった理由も知らずに彼女を貶すことは許さん。今の言葉取り消せ」

「貴方はバカか？ アーシアが『魔女』になった理由は悪魔や堕天使を癒すことが出来てしまったから、そう言われるようになったんだろっ？」

「馬鹿はデメエだボケ。そしてそれは“結果”だ。貴様等は“原因”を知らないだけだ」

アルクエイドと朔夜以外は首を傾げている。

「簡単な例だ。“事故が起きた”としよう。……イッセー“事故”と聞いたら、何を想像する？」

「え？ えーっと、何かと何かがぶつかっただろ？ 普通は」

「普通はそうだな。だが、それは“結果”だろっ？ 皆は“何”と“何”がぶつかったか無意識に知りたくなるよな？ それと今回の

ケースはそれに似ているんだよ。——つまり、『悪魔や堕天使を癒すことが出来る』というのは結果で『どうしてそうなったのか?』という“原因”をコイツ等は知らんというわけだ」

「…………つまり、貴方は“原因”を知ってる?」

「ああ、知ってるぞ? ちなみにお前らの主であるミカエル、リアス達側の四大魔王も然り、あとは堕天使側の総督を含めて、太古から生きてる奴は全員知ってるな。コカビエルも知ってる筈だ」

そういうと…………イリナは「ミカエルさまが…………」といい、リアス達は「お兄様が知ってる…………?」と様々な反応を見せていた。

「原因も知らないで『神』を語るな、小娘」

「……………」

「次、語ったら…………潰すぞ?」

「ッ!?」

「わかったか?」

「ああ(ええ)」

なんせ、彼女があのような理不尽を受けたのも半分は俺のせいだしな。

「これで交渉は終わりでいいか?」

「…………ええ」

「…………それでいいわ」

「では失礼する。アルク、朔夜」

「うむ」

「はい」

俺はアルクの腰に手を回し、もう片方の手で朔夜の手を握った。

そうして、再び家に戻った。

「はあゝゝ、やれやれ。あの姿も疲れるわゝゝ」

「帰って来たたん、砕けるなよ」

「しかし、あのゼノヴィアって子、調子に乗り過ぎねゝゝ。真相も知らずに幻真に喧嘩を売りかけるとは」

「……………私もゼノヴィアって人、嫌い」

「何故に？」

「融通が利かなそうだから」

「あらら、バツサリいくね。……………しかし」

「ん？ なぁに幻真？ そんなに見つめてどうしたの？」

「いや、やっぱりアルクは長髪の方がいいなぁと思って」

「あれ？ 幻真、あっちの髪型の方が好きなの？」

「どっちも好きだけど、あっちの方が好きかな……………」

「なら、今日はこっちでしてあげる？」

そう言って姫アルクの姿になった後、ドレスを脱いでいた。

「うん、やっぱりこっちの方がやりがいがある！」

「父さんも母さんも頑張ってるね。じゃ、お休みゝゝ」

「はーい、おやすみゝゝ」

朔夜は自分の部屋に帰って寝た。

俺は文字通り姫様抱っこしながら、俺達の部屋に入ろうとした時グレイフィアを思い出したので部屋の中を『空間』の力で探したが、今日は何故かしらんが居なかった。

まあ、居ないのならそれはそれで有難い。

これから体力使うので無駄な体力を使いたくないし。

アルクをベッドに降ろした後は、最初はおっぱいを弄繰り回して、
いい感じに出来あがった後、たっぷりと頂いた。

く幻真side outく

なんで、長髪のままをやったかだって？

そっちの方がいった時に綺麗で可愛いからに決まってるじゃん。

交渉（後書き）

エロで始まりエロで終わる。

これは酷い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0947w/>

ハイスクールD×D 夢幻龍

2011年11月17日21時10分発行